

---

## Muv-Luv Alternative +

あっぱっぱー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M u v - L u v   A l t e r n a t i v e   +

### 【Nコード】

N 6 0 7 9 S

### 【作者名】

あっぱっぱー

### 【あらすじ】

かつての戦いは終わった。だが、彼の戦争は終わってない。何のために戦い、何のために生きているのか。それを彼は探し続ける。

## チャート

8月 未明 リヴェアオルタの世界で目覚める。数時間後あ号標的破壊。

8月 5日 リヴェア、イーニアと遭遇。

8月 6日 リヴェア、唯依と遭遇。接触回線による情報収集完了。

同日 リヴェア、社麻衣と遭遇。大破した戦術機と共に横浜基地に届け、捕縛される。

8月 9日 横浜基地から脱走。

8月 10日 カムチャツカ半島にてBETAと遭遇、これを撃破。進化級と初の交戦、これを撃破。

8月 11日 横浜基地に協力要請。相互利益の為、香月博士と結託。

同日 戦闘力確認の為不知火2機と模擬戦。これを撃破。煌武院 悠陽と接触、味覚破壊兵器『手料理』を口にシダウン。

8月 13日 進化級と二度目の交戦。これを撃破。死体回収。

同日 軍曹とハプニング。ボコボコにされる。

8月 16日 進化級命名。計画の発動時を待ちわびる。

同日 珠瀬王姫と接触。御剣冥夜と邂逅。

8月 19日 不知火改造計画認可。発動。製作開始。

9月 18日 不知火特機型2機完成。プロミネンス計画廃止。

9月 20日 珠瀬拉致。狙撃型のデータ収集完了。人類意思統合計画発動を決意。

9月 21日 霞、認証式ドアの遊びを習得。イノベーターサンドウイチ完成。

9月 22日 戦術機用バックパック第一弾『砲撃戦仕様』の完成。

9月 23日早朝 涼宮遙と決別。

10月 22日 白銀武とリヴェア遭遇。特機である近接型の白銀専用機化計画を始める。

同日 リヴェア”彼女”を拒否。

11月 11日 リヴェア、BETAの完全駆逐を決意。



## サブタイトル

第一話 終わらない戦い

第二話 改変の序曲

第三話 無くした記憶のかけら

第四話 この世界に神はいるのか？

第五話 記憶と共に

第六話 答えを探し続ける者たち

第七話 純粹種

第八話 横浜基地

第九話 救世主になれない男

第十話 御剣 冥夜

第十一話 スペシャルOS

定期的に更新していくつもりです。

以下文字数稼ぎと過去に書いたMuv-Luv Alternat  
ive + の過去品です。これじゃあ駄目なんだと書き直したのが

現在の作品なんですね。ハイ。読みたい方はどうぞ。

ガンダムマイスター。私設武装組織ソレスタルビーングが所有する機動兵器ガンダムを操るパイロット。イノベーターである俺は、あの時蒼いガンダムと対峙した。連中と同じ、ガンダムに乗って。

## 第一話

体全体を駆け抜ける寒さにリヴェアは目を覚ました。背中にある冷たい感触、視線の先に広がる大空。地面に寝ていると気づくのに時間は掛からなかった。先ほどまで刹那・F・セイエイと戦っていた筈なのだが・・・まあ、所詮はイノベーター、負けは見えていた。リボンスも負けると分かっている仕向けたのだろう。

ゆっくりと立ち上がる。負けて地球の重力に引かれ、落ちてきたのだろうか？目の前の瓦礫の山には仰向けに倒れている黒と赤のカラーリング機体があった。見間違えもしない。自分のガンダムだ。

両手に握られた機体の下半身程あるバスターライフルに両腰のバインダー。それらを伝って頭部の下、首元にある座席に座り、傍のレバーを引く。

懐かしいコックピット。手元のコンソールを操作してOSを立ち上げる。暗かったコックピットに一斉に光が灯り始めた。360度モニターに景色が写り、次々と小さなウィンドウが現れ、消えていく。

「システムは・・・大丈夫か」

ツインドライヴシステム。リボーンズガンダムに搭載される前にテストとしてこの機体に搭載されたシステム。両肘の大型GNコンデンサーに取り付けられた擬似太陽炉は紅い粒子を撒き散らして静かに鳴り響いている。てつきりトランザムライザーに叩き潰されたのかと思ったが。不幸中の幸い、とやらなのだろうか。リヴェアは小さく溜息を吐くとコンソールを叩く手を止めて操縦桿を握る。

先ほど他のイノベイド達に呼びかけてみたが反応は無かった。詰まる所この世界にイノベイド、イノベーターは存在しない。死んでしまった、という可能性はあるが中々にしぶといリボンスが死ぬとは思えない。きっとなにか保険を用意していた筈だ。

まあ、他のイノベーター共は死んだ、もしくは生きていたとしても意識を共有できない状態にある。と言う事だ。地球の重力に引かれて落ちた事は予想外だが、今まともに活動できるイノベーターは自分だけ。これはチャンスだ。

ゆっくりと機体を立ち上げらせて上昇を開始する。GN粒子も十分だし、擬似太陽炉搭載機と遭遇しても叩きのめせる自信はある。問題はソレスタルビーング。特にオリジナルドライブを二機搭載しているガンダム。そして 純粹種である刹那・F・セイエイ。奴は間違いなく生き残っている筈だ。

「出会ったら速攻で」

アラート。機体が勝手にGNフィールドを展開して急降下を始め



る。どうやら言った傍から誰か来たらしい。GNライフルにしては細かいし、色も違う。謂わばレーザーがフィールドを掠めて彼方へと飛んでいった。フィールドの減少具合を見ると大した威力ではないらしい。しかし

「この射程距離は異常だな・・・狙撃に特化しているMAでも開発したのか」

もしくはオリジナルのガンダムか。太陽炉ならそれが可能だがあのガンダムは確か狙撃が出来る程損傷は軽くないはずだ。どちらにしてもやる事は変わらないのだが。かなりの長距離狙撃。一気に距離を詰めて近接攻撃で殲滅したい所だが・・・如何せん距離が距離だ。

何本も飛んでくるレーザーを右に、左に回避しながら策を考える。トランザムも良いがあまり粒子を使いたくない。フアングは距離が開きすぎ。バスターライフルは届かない。

そうだ。リヴェア。君のガンダムには少し面白いシステムを載せてある。

そんな事、俺は聞いてないが

当たり前だよ。初の実戦で君を混乱させようと思ってね。

おい

あわよくばその混乱で死んでくれたら・・・と思ったのさ

リボンズウウウウ!!!

確か、オリジナルガンダム。狙撃特化のケルデイルを落す為に造られた、とか言っていたな。コンソールを叩いて表示させる。GN粒子をチャージし、一気に開放することで驚異的な加速を手に入れる事ができる。らしい。どうでもいいが確実にパイロットに掛かるGは計り知れないよな。

コンソールを更に操作してGN粒子のチャージを開始する。粒子の消費量は推測するに半端ではないが他に方法がある訳でもない。フィールドを全面展開から正面展開に切り替えてフィールドの粒子も両肘のドライブに回す。

「 3、2、1」

キイイイイイイン

高速回転を始めたドライブから高密度の真紅粒子が排出される。そして一気に 爆発。

「ん？何だ？」

「どうした」

「ハッ！レーダーが不調なのか少々映りが悪くて……」

「直ぐに直せ。今からBETA相手に新型戦術機のテストだ。不調

など認められん」

「ハッ！」

嫌悪感が拭えないままリヴェアは機体を動かす。バスターライフルを左右に向けて撃ち、正面の敵には十二基のファンングで一斉掃射。GNライフル程度の威力しかないファンングの攻撃で死んでいく、ということは図体はデカイが防御力は然程高く無いのだろう。正直言っつてこんな未確認生命体と戦うのは気が引けるがリボンスからデータに無い物は積極的にデータ採取する様に言われている。リボンスが消えた今、命令を遂行する意味は無いが、この生命体のデータを入手しておいても損は無いはずだ。

ファンングを粒子チャージの為に腰のバインダーに戻し、背中にマウントしてある一基の大型GNキャノンを展開。ロックもせずトリガーを引く。どうやらこの生命体には知性が殆ど無いらしい。バスターライフルで体の二分の一を消滅させても向かってくるのを止めない。此方に来るまでに死んでるが。その姿はトランザムを発動して突っ込んでいったガガを思い出させるが、向こうの方が気分的には楽だ。

チャージしていた粒子が切れたのか真紅の光が段々と消えていく。GNキャノンを背中にマウントし、バスターライフルも二挺から一挺に纏める。そして空いた右手で腰にマウントされていたGNサーベルを抜き取った。

「俺の前に立つんじゃない。死ぬよ」

一閃。他のイノベイドから凶悪とまで言われた程の出力を誇る大型GNサーベルは紅い粒子を残して易々と目の前の巨大な生命体を分断した。残るは奥にあるレーザーを放ってくる物のみ。最初見たときはどんな奴らなのかと思ったが拍子抜けだった。此処まで弱いと逆に戦い方に悩む。ウィンドウを操作してファンングを数基射出。適当に飛ばして残りを殲滅する。

楽勝。リヴェアはそう呟いた。これならGN-Xシリーズの方がまだ強い。役目を終えたファンングがバインダーに戻ったのを確認し、ウィンドウを閉じる。機体損傷0、粒子残量は98%。一日放っておけば簡単に回復できる程度だ。兎にも角にもこれで一先ずは

『その戦術機！』

外部スピーカーでの呼びかけ。人語を喋っている事から人間なのは間違いないだろう。発信源は直ぐ近くの人型の機体から。従来のMSと違った骨格、胴体のデカさ、新しく開発したにしるあれは進化しているのではなく退化しているのではないのだろうか。粒子を出さずに地面歩行している、つまりGNドライブを搭載していない機体。最近では見飽きてくる程に粒子を見ているというのに。それともドライブを載せなくても搭載機に勝てる自信があるということか？

『聞いているのか！聞こえていた場合、三秒以内に返答せよ！』

「どちらにしても」

『……聞こえていたのか、ならば所属と』

「やることには変わりはないが」

ファングを一斉展開。一気に突撃させる。

『何を！！』

十二基のファングが機体に突き刺さる。新型機の癖に案外耐久力はないらしい。不甲斐ないものだ。

「俺はイノベーター。人類を再生する者だ」

『俺はイノベーター。人類を再生する者だ』

その言葉と共に深く紅い光を撒き散らして爆散していく新型機。成す術もなく、見えない何かに、一方的に。背中から紅い光を出しながら浮遊している未確認機。誰も完成形を見たことが無い光学兵器を使用し、BETAを一方向的に殲滅し今度はお披露目だった新型機さえも一瞬で破壊する。

「イノ……ベーター」

『目標国を戦争幫助国と断定。これより武力による再生を開始する』

「み、未確認機真つ直ぐ此方に向かってきます！！凄い速さです！  
！」

「援軍を！援軍を要請しろ！！アレにこの基地の戦力で勝てる訳が  
無い！！」

「……駄目です！通信が取れません！！ジャミングみたいのが  
掛かっていて……！」

「……ツク！戦術機をありつたけ出せ！その間に基地を放棄す  
る！！」

「了解！！」

『救世主なんだよ……俺は』

キーン……と翠に光る目が

**F i g h t t h a t i s s u r e t o e n d (前書き)**

全ての言い訳は全てあとがきにて行います。

F i g h t   t h a t   i s   s u r e   t o   e n d

晴天と言うに相応しい青空の下で新しい人類と謳われたイノベイターである、リヴェア・ヴェネツチアは目を覚ました。何の違和感も無い少し影が差した見飽きた空。ただ記憶と違ったのは数秒前はピンクの光と紅い光が交差する宇宙にいた筈だった。違和感を覚えるどころか訳がわからない。さっぱりとしない気持ちのまま寝ていた状態から起き上がり、影を差していた原因を見つける。

全長18mの真っ黒の巨体。腰にマウントされた下半身と同じほど大きなライフル。背後に取り付けられた暗い紅の大型ブースタ。頭にはV字の角。翡翠のモノアイ。それを見て懐かしさを抑え切れなかったリヴェアは微笑んだ。戦いは既に終結していた筈なのに、何故こんなものが此処にあるのだろうか。そう心の中で思いながら。

かつての戦争は終わりを告げた。リボンス・アルマーク率いるイノベイターは負けたのだ。純粹種として覚醒した刹那・F・セイエイに。勿論この機体　リボンスガンダム〔P〕を操っていたリヴェアも例外ではない。ソレスタルビーング側と同じツインドライヴを用いてランザムシステムを使ったにも関わらずリヴェアは敗北した。機体は大破し、瀕死のところをソレスタルビーングに拾われ、そのまま生かされた。

そして、二年後。ELSとの戦闘、そこで再びリヴェアは改修されたこの機体に再び乗った。刹那・F・セイエイが言っていた生きる為に、未来の為に戦う為に。戦闘が始まってイノベイターのせい、か、真っ先に狙われて機体を侵食された。そこで記憶は途切れていた。



此処が所謂天国と呼ばれる場所なのだろうか。昇降装置に足を掛け、首元の部分にあるコックピットを指すリヴェアは呟いた。高まっていく視線には荒れ果てた荒野が映り、家と呼ばれる物も原型を留めていない。辛うじて瓦礫の傍にあったドアで家だと判断できた程だ。とても天国とは言えない。

それに、先ほどから脳量子波に変な訴えが来ている。イノベイド、イノベイターの様な意思ではなく、敵意でもない。だがリヴェアには確証は無いが分かっていた。これは邪気だと、自分に対する物ではない。まるで 人類に向けての悪意が脳量子波に介入していた。

コンソールを急いで操作する。全天モニターには機体の情報が出ては消え、出では消えを繰り返している中マニピレータを操作して腰のバスターランチャーに向かわせる。異常なほどの悪寒、それがリヴェアを動かしている。コンソールのキーボードを叩き、システムを起動させ、操縦桿をギュツと握る。翡翠の目が光り、遙か彼方の地平線を見据えた。

## 第一話

頭の中がパンクしてしまいそんな状況の中にリヴェアはいた。心臓の音は早打つ事しか知らず、操縦桿を握った手は既に汗まみれだ。脳量子波にはガンガンと大量の何かが侵入し、モニターに映る訳の分からない生命体は止まることを知らない。思わず「ファング！」とリヴェアは叫んだ。腰のバインダーから飛び出した十二基の放射熱板、ファングを操作し上空から数分間粒子ビームを浴びせる。しかしそれも長くは続かない。直ぐに粒子が切れ、ファングは力なく地面へと落ちていく。

肌に蛇を這わせた様な不快感、コンタクトを取ろうとしているのか頭の中に入ってくる意味不明な言語。それに耐え切れなくなったリヴェアはGNフィールドを展開して空へと上がる。大小様々なレーザーがフィールドを掠めるがリヴェアは構わずに叫んだ。

「トランザムッ!!」

両肘のコンデンサーに装着された二基の擬似太陽炉が紅い粒子を一層強く撒き散らす。黒い機体色のせいが見え辛い装甲の継ぎ目が次々にスライドし、そこから粒子が漏れ出し機体を包み込んでいく。背後のブースタは二つに別れ更に粒子が漏れ出す。高出力の粒子が翼のように展開され、天高く昇っていく。

「圧縮粒子、前面開放!!」

二つに束ね、一丁となったバスターランチャーの銃口に紅い光りが集う。リヴェアは戸惑うことなくトリガーを引いた。

平和などリヴェアは求めてなかった。武力で武力を、戦争で戦争を否定し平和を目指すことなどにも興味は無かった。唯、知りたかった。計画者であり、リヴェアを冷凍睡眠（コールドスリプ）させたイオリアの意図を。自分宛てに残されていたビデオテープ。進

化の可能性を信じるといったイオリアの言葉。 真実を知る為に、彼は戦争根絶を、武力介入を始めた。

パチパチ・・・と薪が割れる音が聞こえる。 燃え盛る火をただ見つめながらリヴェアは考えていた。 この世界は何なのか。 あの異種生命体は何なのか。 ヴェーダにリンクしようにも一向に反応が無い。 イノベーターからも反応は無い、天へと伸びる軌道エレベーターも存在を確認できない。 これらの条件を全て照らし合わせた結果、それは

「異世界。 もしくはパラレルワールド」

疲れているのかもしれない・・・と呟くとリヴェアは機体の足に背を預け、目を閉じた。

不思議な夢を見ていた。 何も無い真っ白な空間の中で一人の少女が何かを話している。 声掠れていて聞きづらかったが必死なことはよく分かる。 身を此方に乗り出し、手を動かして必死に何かをアピールしている。 霧が掛かったように見えない表情や体。 動きにあわせて揺れるオレンジの髪。 リヴェアは惹かれる様に右手を差し伸ばした。

瞬間、景色が替わる。 真っ白な空間は一転して真っ黒な空間へ。 スポットライトの様な光りが降り注ぐ中、先ほどのオレンジの髪を持った誰かは居らず、代わりに一人の少女がいた。 兎の耳の模して作ったのか耳があるカチューシャに銀髪の少女。 その目は対面に立つリヴェアは射抜いていた。

「あなたは、誰ですか？」

「君は、誰なんだ」

「・・・わかりません」

悲しそうに目を伏せた少女は再びリヴェアを見た。先ほどの答えが欲しいと言わんばかりに。だが、お前は何者だ。という問いに対してリヴェアは確たる答えを持ち合わせてはいなかった。リボンス・アルマークは救世主と自称し、刹那・F・セイエイは未来の為に戦う兵士と言った。ならば、自分は？。イオリア・シュヘンベルグが言った進化の可能性を秘めた者とも言うのか。

皮肉な物だった。自分が何者かを探す為に数年間戦い続けたというのに自分は未だに答えを見つけられずにいる。

「探しませんか？」

「え？」

「わたしと一緒に。自分が何者なのか」

銀髪の少女はスツと手をリヴェアに向けて差し出す。不思議と、自らの手を差し出すことに戸惑わなかった。

目覚めれば既に空は蒼く染まっていた。あの銀髪の少女が言っていた事、BETAと呼ばれる異種生命体、その巢たるハイヴの存在聞けば人類は絶滅の危機に瀕していると言う。BETAの猛攻によって。ならば、BETAという存在が人間に戦争を仕掛けているのなら、戦いを幫助しているというのならば。

コックピットの中でリヴェアはコンソールを叩く。昨日の戦闘で連中のデータは取得済み、後はFCSを書き換えて完了。ハイヴ、というのが何処に在るのかはリヴェアには皆目見当もつかないが、一つだけBETAとは違う存在を知っていた。イノベイドの上にイノベーターがいるように恐らく、BETAの上位種なのだろう。

「リヴェア・ヴェネツチア。目標を戦争幫助対象と断定、この地球上から異種生命体を駆逐する」

紅い閃光がモニターを横切った。目の前の八本足のBETAはそれだけで血を噴出し地面に倒れていく。これでモニターに映っている周辺の敵反応は消えた。それでもまだ脳量子波に介入してくる意思の場所までは辿り着いていない。思わずリヴェアは溜息を吐いた。BETAにとってこれから行く場所は随分と大事な場所らしい。

だが、おかしい。意思是地下から感じる。敵の数も段々と増えてきているし、このままやつてもジリ貧になるのは目に見えている。リヴェアはマニュアルを操作し、紅い光りを灯しているGNビームサーベルを背中に戻し、バスターランチャーを掴む。相手が

地下にいるならば話は早い。操縦桿を握り一気に高度を上昇させる。

蒼い空の上。雲の上に飛び出たリヴェアは凶悪なほどに光りが集まったバスターランチャーを正面、地表に向けて構える。出力は極力押させ、確実に打ち抜く。そして、トリガーを引いた。

雲が一気に拡散する。それだけではない、機体の両腕に取り付けられたGNドライブが駆動音と共に粒子を撒き散らし、紅い光りの奔流を辺りに撒き始める。銃口から放たれた真紅の極光は地表を一瞬にして抉り取った。リヴェアが抉ったかと思うより速く、機体がアラームを鳴らした。抉った場所からBETAが溢れ出てきたのだ。それを確認したリヴェアはもう一度トリガーを引いた。

### 【理解不能】

「理解なんていらぬ。俺はお前等を駆逐する」

大きな広間の中央に存在する目と思われる黒い玉を六個つけ、触手を揺らしている物。間違いなかった、脳量子波に直接話し掛けてくる。この存在が上位種、とやらなのだろう。この存在もリヴェアの脳量子波から流れていく敵意を感じたのか、揺らしていた触手を止めた。

### 【攻撃】

それは謂わば小さな針。今にも突き刺そうとリヴェアを四方八方

から狙っている。だが、それを知ったとしてもどうするかなど当の昔に決まっていた。「トランザム」小さく呟いた一言に機体が、ガンダムが反応する。【TRANS-AM】と表示されたのは一瞬。モニターの映像は直ぐに切り替わる。向かってくる触手は消え、存在の後ろに変わる。

【攻「破壊する」

繰り出したのはビームサーベルではなく、ランチャーでもない。手刀、直線に伸ばされたマニピレーターが存在の頭部と思われる場所を貫いた。直ぐに引き抜き、離脱。向かってきた触手を回避し再び正面に存在を捉える。右のマニピレーターにはGNビームサーベル。それを迷わず正面から突き刺した。そしてそのまま直下に向けて降下。切り裂く。

「GNバスターフィールド。全面広範囲展開」

展開されたGNフィールドが真紅に染まっていく。その紅さで機体が消えた次の瞬間大きくフィールドが縮小し、一気に拡大した。紅い光りは次々にその範囲を広げ、触れた物を粒子と共に消滅させていく。

その日。後にあ号標的と称される上位存在はオリジナルハイヴと共に人知れず消滅した。

**F i g h t t h a t i s s u r e t o e n d (後書き)**

やってしまった。

にじファンの皆様の感想は優しいものだと思っています。



## Prelude of modification

戦いの道を歩んできた。それしか出来なかったと言えれば言い訳になるのだろうか。バスターランチャーで地表その他を抉り取ったせいなのか所々穴が開き、太陽の光りが差し込んでくる中。あの存在がいた場所にリヴェアは居た。

あの敵が何なのか。BETAと呼称される異種生命体の目的は。訳の分からないままに、状況の流されるままに戦っている自分に嫌気が差したのだ。いや、嫌気ならばとうの昔に来ていた。記憶を無くし、訳の分からないまま戦争に巻き込まれ、使命と称され戦争根絶を開始する。人形のような自分にあの頃は嫌気が差していた。

リヴェアは深く溜息を吐くとこれからの事を考え始める。気に掛かっている事は一つ、手刀を繰り出した時に何かの通信記録、というより交信記録とも言えば良いのか。それが流れ込んできた。これはあの存在がこの世界に存在する”何か”と定期的に交信していた事を示しているのだが、生憎と場所までは分からなかった。

そこでリヴェアの腹が音を上げる。言ってしまうえば空腹だった。機体に備え付けられている非常食レーションは一週間分のしかない、しかも飲料水も早くて数日で底を切るだろう。なかなか致命的な問題だった。

機体の整備の問題もあるし、そろそろ協力者を見つけなければ拙いかもしれない。

地域によつて貧困の差があるのはよく理解しているが、国の違いで此処まで緑が在るか無いかが違つてくるのは初めて知つた。生い茂る緑、荒野と化していたさっきの国とは大違ひだつた。街に出てみても感想は同じ。どうやらこの国は他の国、地域より被害が少ならしい。

リヴェアはある商店を探していた。いや、厳密に言えばこの右手に握つた小さな宝石を買い取つてくれれば誰でも良いのだ。こういう宝石の類はかなり持つているし、この世界で宝石の価値がわかる人間が居るのかどうかは分からないが、何事も行動しなければ始まらない。取りあはず目に付けた店に足を運ぶ。

入つた店は謂わば喫茶店のような場所だつた。だが、お世辞にもいい雰囲気とはいえない。入つてきたリヴェアを殺意の混めた目で見てくる辺り、この店がどんな物なのかが窺い知れる。が、伊達に戦場で生きてきたリヴェアではない。その殺意を一蹴し、カウンターに座つて手に握つていた宝石をカウンターの向こう側に立つ厳つい男に見せる。

「.....」

「買わないか？」

暫しの無言。手にとって宝石を見つめる男は数秒考えた後、店の奥に消えていく。数秒後再び戻つてきた男の手には所謂麻袋の様な物が握られていた。それをカウンターのの上に置く。

「交渉成立だな」

リヴェアは宝石を男の手に握らせると代わりに麻袋を手取る。

中には硬貨が入っていた。この国の通貨なのだろう。満足そうにリヴェアは笑うと席を立て店の出口に向かった。この金が幾らほどの物かは知らないがそこら辺の店に持っていけば直ぐに分かる。だからこそ、街の道を歩く自分の後ろを追ってくる男たちをどうしようかりヴェアは考え始めた。

結局考えたところでこうなるのは目に見えているのだが。地面に倒れている数人の男。広場と思える場所で覚悟を決めたのか突っ込んできた男たちをリヴェアは一蹴し、利口な最後の男は手に持った銃を此方に向けていた。が、銃などリヴェアにとっては玩具以下の存在だった。所詮銃など銃口と引き金に掛けている指さえ見えていれば交わす事など容易い。

数秒後、男が手に持った銃の引き金を引く。空に響くのは撃鉄を下ろした音。イノベイターたるリヴェアの瞳に映るのは空を切つて向かってくる弾丸。耳に響くのは弾丸が空気を切る音。それを首を動かし避けたリヴェアは頬に走った赤い線を気にすることなく男に向かつて走り出した。距離は数百メートル。啞然としている男の腹部に向かつて容赦なく拳を突き出した。

「あ……が……」

「悪いな。加減が利かなかった」

イノベイターであるリヴェアは身体能力が大幅に強化されている。いざという時に素手で対処する為だ。その数値は生身の人間では耐えられない程。心が籠ってないにも程がある謝罪を棒読みでリヴェ

アは伝えると何時の間にか集まっていたギャラリーを掻き分け小走りでその場を離れる。ギャラリーの一部分が「軍を呼べ」と言っていたのが聞こえたからだ。

軍に尋問されても吐かない自信があるし、なにより性格を偽るなど武力介入を開始した時からお手の物。だが、今は食料を集め、情報を収集し、此処が何処で今は何年なのかを知ることが先決。軍の下らない尋問に付き合うほどリヴェアは暇じゃ無かった。

だが、不意に足を止めてしまう。頭に入ってくる得体の知れない”ナニカ”。間違いなかった。此方の意思を、考えを、過去を覗こうとしている奴がいる。脳量子波を極力使わない様になっているのは頭痛がするからだというのに。覗こうとしている奴を逆に辿り見つける。ギャラリーがいる中、一際目立つ存在。白に近い銀の髪色を伸ばした少女。身に纏っているのは軍服だろうか。軍人？こんな少女が？

「狂ってる・・・ッ！この世界も、狂ってる・・・ッ」

頭痛に苦しみながらも少女の覗こうとしている”力”を拒絶し、食料調達も情報収集も諦め、森の中に向かって走る。ステルスを発動させ、周りの風景と同化していた機体のステルス機能を解除し、膝を辿ってコックピットを目指す。

間違っているとは言えなかった。世界の情勢は銀髪の少女から聞いて分かっていたし、人手が惜しいということも分かっている。だが、歪んでいる。世界は歪んでしまっている。全ての元凶は

一体何度目の戦いだ。あの少女を見つけてから、あの場所を逃げる様にして去り、BETAを見つけては駆逐する。ルイス・ハレヴィの様じゃないか。だが、彼女の場合ガンダムという力を手に入れて調子に乗っていたチームトリニティに殺された母親と父親の敵討ちという立派な言い訳があった。自分自身には無いが。

荒野に立ちビームサーベルを振るう機体。その中でアラームが響いた。レーザーが照射されているのだ。だが、それをGNフィールドが阻止する。機体を操作し、紅い閃光が斜めに振られ正面に存在した全てのBETAを切り裂いた。GNドライブと直結され、異常なほどの出力を放つ大型GNビームサーベルは意図も簡単にBETAを消滅させていく。

BETAの攻撃は届かない。攻撃しようにも圧縮されたGN粒子に触れ、消滅していくのみ。左のマニピレーターが大型のBETAの八本足の一つを掴む。それをリヴェアは機体の出力、力任せに引き千切り、GNビームサーベルで無駄に大きな頭部を切り落とす。戦略も、戦術も無い。目の前に現れる”敵”を全て叩く。それだけ。

「次イツー!!」

左に装備していたバスターランチャーが再び八本足のBETAを捉える。頭部を貫通して突き刺さったバスターランチャーの引き金を引き、紅い粒子がその巨体を飲み込んだのを確認するまでも無く、次の目標に向けてGN粒子を吹かした。

その数分後。何処かへと移動しようとしていたBETA群は完全に壊滅していた。だが、リヴェアは握った操縦桿を離そうとはしな

かった。機体が遙か後方に在るBETAの存在を知らせたからだ。その他にもBETAではない反応も在る。生命反応だ。データを確認したリヴェアはGNコンデンサーに蓄積していたGN粒子を一気に開放した。

殺人的な加速を手に入れた機体は数百キロあった距離を一気に縮めた。そして加速はそのまま手に持ったGNビームサーベルを横に振るう。全天のモニターが紅く染まったのは一瞬。直ぐにまたBETA一色に染まる。

ギリツときつくりヴェアは齒軋りを鳴らす。歪んでいるのはコイツのせいだ。歪ませたのは、コイツ等だ。リボンスは言った。「歪んだ世界と歪んだ人類には救世主が必要」だと。ならば自分は救世主になれるのだろうか。BETAを駆逐し、人々を導く。いや、自分には出来ない。破壊は出来ても、再生は出来ない。だからこそ。

「俺はお前等を駆逐する！！」

「此方」

オープンチャンネル、外部スピーカーでの呼びかけにリヴェアは答えなかった。やはりこの世界にも多少は軍事力があるらしい。たしか、戦術機。と聞いていたか。だからこそリヴェアは返答をしなかった。別に外部スピーカーが不調を来しているというわけではない。軍事力があるならば、BETAと戦う力を求めて成長してきた軍ならばこの機体の力、ガンダムを欲するだろう。そう考え

ただ。

リヴェアが知っているMSとは違った設計思想。スラツとしたフォルムに右手に持ったショートバレルのアサルトライフル。背中にマウントしているのは実体剣だろうか。そしてアサルトライフルが此方に向けられてなければどれほど安心しただろうか。

「速やかに所属、名前を。もし返答が無い場合、発砲も辞さない」

出来ればなにも問わずに去ってくれば良かったが、彼は軍人としての職務を真つ当する事を選んだ。今はまだこの機体の存在を知られるわけにはいかない。黒色の機体の翡翠の目が光りを灯す。GN粒子供給を絶っていたGNビームサーベルに粒子を供給する。聞こえるか聞こえないかの境目で駆動音を鳴らしたGNドライブから真紅の光りが辺りを包み始めた。

「何をしている？・・・しょうがない。HQ・・・HQ？」

地面を滑空する。一撃目、ビームサーベルが上半身と下半身を分断した。更に二撃目、腰にマウントされていたGNビームダガーを引き抜き、空を舞っていた上半身の中心部に向けて振り下ろす。あの部分がコックピットなのかは分からないが黙っているところをみるとどうやら当たっていたらしい。だが、このままだとBETAではない第三者による撃破と向こう側の軍部にばれてしまつかも知れない。

GNビームダガーを引き抜き、腰に戻すとGNバスターランチャーの光りが辺りを一瞬照らした。





## Prelude of Modification (後書き)

なんとか今日中に投稿完了。かなり焦ったぜ・・・。

マブラヴのウィキとか見て頑張りました。ちなみに作者は原作をやってませんのであしからず。

## Fragment of memory losing it

ガンダムによる武力介入。その他の場所でもガンダムを見た者には死を与えなければならぬ。そうしなければ、ならないのだ。秘匿義務を押し付けられているリヴェアにとってはそれが当たり前。だが、この世界で安直に人を殺して良いのか。見たから殺す、秘匿しなければならぬから殺す、・・・間違っているから殺す。

リヴェアは、未だにガンダムに縛られている自分を疎む様に暗闇の中で小さく蹲った。俺は間違っていない、そう呟きながら。

### 第三話

うつすらと目を開けた。数日前に見た暗い、スポットライトが照らす場所。ただ、数日前と違ったのは兎耳のカチューシャを着けた銀髪の少女の姿は無く、代わりに逃げ出した街で見掛けた覗こうとしていた少女が居た程度だ。その他は特に変わりはない。

「.....」

「にげないの？」

「逃げられないからな」

逃げられたら、逃げてる。とリヴェアは軽く笑った。その笑顔を見て安心したのか銀髪の少女も笑う。此処が何処なのかは分からないが、夢だということはリヴェアには分かっていた。実際にも、目の前の少女とは脳量子波を介して互いの意思を共有しているし、脳

量子波を使っても頭痛が襲って来ない。

一言で言えば目の前の少女の意識は真っ白だった。何にも染まらず、何にでも染まる。そんな意識。自分とは大違いだ。自身の手を見下ろしたリヴェアは小さく自傷気味に笑った。手は赤に染まり、心は、感情は殺した。世界の意思統一の為に、リボنزの計画遂行を手助けするために小国家に武力介入し、破壊の限りを尽くした。

「わたし、イーニア。イーニア・シエスチナ」

「コードネームはリヴェア・ヴェネツチア」

「ほんとのなまえは？」

「無い」

「ないの？」

「忘れたんだ。昔にね」

冷凍睡眠時にイオリアがナニカし込んだのかは分からないが、リヴェアは睡眠から目覚めた時には全ての記憶をなくしていた。だが、生きていくに必要なデータはしつかり書類として用意されていたし、眠りにつく前に計画遂行の為に力を貸して欲しいとイオリアから頼まれていた事もその書類には書かれていた。力を貸すことを自身が承諾したことも。

今となってはイオリアの計画はリボنزによって乗っ取られ、リヴェアは計画は変わってもリボنزに協力した。計画に協力する、それがイオリアとの約束だったからだ。

目の前の少女は小さく首を傾げると「いおりあ？」とリヴェアに近寄る。長いようで短い夢の中での会話が始まった。

塩の香りが鼻を擽る。静かな波の音でリヴェアは目を覚ました。宛ても無く彷徨った結果、汚れた機体を洗おうと海までやって来たのだ。一晚費やして機体を海の水に漬からせて洗い、疲れてそのまま近くの土手で眠ってしまったのだったか。上半身を起き上がらせて機体を見る。システムダウンをしているせいなのか、白をメインカラーに所々黒の線が走っている姿に戻っている。

暫くは機体をこうして放置した方がいいだろう。GN粒子のチャージにも時間が必要だし、なによりも自身の感情制御が出来なかった事が原因とは言え、連戦に連戦を続けたのだ。肉体的にも休養が必要だ。幸い、近くに街があるようだし食料の調達に行くのも良いだろう。リヴェアは麻袋を手に持ち、重い腰を上げた。

しくってしまったとリヴェアは小さく呟いた。此処はニッポンという国らしい。何時の間にかかなり離れた場所にやってきてしまった。此処はニッポンのニイガタと呼ばれている地域で在り、今は殆ど人が住んでないそうさ。なんでも数ヶ月前にBETAが上陸し、皆土地を離れていったのだから。話を聞いた年老いた男性もこれから帝都、と呼ばれている場所に向かうそうさ。食料を集めるのには時間が掛かりそうだった。

コッソと足元に何かがつぶかった。リヴェアが足元に視線を下ろすとそこには一つの小さな球体。風に吹かれて転がってきたのか、

それとも誰かが蹴つて転がってきたのか。その答えは直ぐに解つた。後者だ、数メートル離れた所にある廃墟と化した家の影から一人の少女と少年がこっちの様子を見ている。

おいで、と球体を持つたりヴェアが声を掛ける。何の警戒心もなく近寄ってきたこの子達は純粹だと言えるだろう。お世辞にも楽しそうに生きているとはいえない格好。ボロボロの衣服、汚れた髪。少女が持っている熊の人形もかなり汚れてしまっている。リヴェアは球体と一緒にポケットに入れていたビスケット形状のレーションを二人に手渡す。

「俺にはこれしかできないから。ごめんな」

「……もらつていいの？」

恐る恐る聞いてきた少年にリヴェアは頷くことで肯定する。食べると良い、の掛け声で食べ始めた二人の少年少女の頭を撫でるとリヴェアは立ち上がり機体が待つ海の方面に向けて歩を進める。これ以上此処に留まる意味はないし、休養も数分間だったが十分出来た。だが、そんな彼の服の裾を少女が掴む。

振り向くと少女が白い花をリヴェアに向けて差し出していた。持つていけと言っているのだろうか、無言のまま突き出す少女に苦笑しながらも花を受けとり、再び海の方面へとリヴェアは歩き始めた。

コンソールの隙間と隙間に挟み込んだ花が静かに揺れている。陸

上から海方面に数百キロほど。言ってしまうえば沖合いにリヴェアは居た。最小限の出力でGN粒子を放出し海上に浮いているのだ。浮いている意味は特に無い、強いて言うならば少し風に当たりたかったのだ。先ほどの少年少女、BETAの侵攻によって生まれてしまった子供たち。

花はどんなに綺麗に咲いても誰かに、何かに吹き飛ばされる。それは人間であつたり、BETAであつたり。コンソールを叩いてニッポンとニイガタの位置をCPUに打ち込んで記憶させたりヴェアは満足そうに息を吐き、剥き出しの背もたれに背を預ける。守らなければいけない。この世界にガンダムがいる限り、戦争幫助対象は確実に排除しなければならぬ。少女も、少年も、絶対に、守ってみせる。

### ズキンッ

不意に痛みが走る。脳量子波に介入してくる感じでは無かった、何かが蘇る感覚がリヴェアを襲った。断続的に痛みが右のこめかみを走る。燃え盛る炎、泣き叫ぶ子供、天を登る翡翠の光り、走る少年、歩く二足歩行兵器、放たれる機銃、死んでいく。

『このビデオを200年後に目覚めた に送る。』

『どうか見せて欲しい、人類の進化の可能性を 』

『花を咲かせましょう。綺麗な花を。きっとみんなをししししいししあああわせ』

「そつだ、俺は」

そこで意識は落ちていった。

あ、と小さな喜びを含んだ声が黒い空間に響いた。銀髪の少女、イーニアだ。この空間に来れるのは意識を落とした特殊能力を得ている人間、という事をリヴェアがなんとなく理解したのは数分前のことだ。という事は彼女も意識を落としているのだろうか。

「いまはおひるね」

「なるほど」

「リヴェアは？」

「・・・わからない」

意識を落とす瞬間を覚えていたリヴェアだが、生憎と思い出して何を感じたのかは憶えてなかった。精々こめかみに激しい痛みが走ったことしか憶えてない。どうしようもないな、そんな一言が空間に浸透する。何のために戦おうとしたのか、何故、冷凍睡眠につく以前の自分は戦争根絶に、人類の意思統合というイオリア・シュヘンベルグの計画を手伝うと承諾したのか。

その答えに辿り着くかもしれないと思わせる何らかの風景のフラッシュバック。イオリアが残したビデオテープの映像、顔に影が掛かって見えなかった女性の声。痛みを伴ったにしては随分と少ない

報酬だ。

「花を咲かせましょう、か……」

「？」

残念ながら花を咲かせましょうなどと言って来る人間はリヴェアの友好関係に存在しなかった。いや、そもそも友好関係自体が在ると言えるかどうかすら解らない。イノベーターたちとの交流は付き合うにも値しない下らないものだし、他人を見下した発言ばかりするから話しを無視していても意識共有のせいで聞こえる。それだけにリヴェアも不機嫌になる。

かといって情勢を調べる為に親密になったと言える各国の大臣や重鎮たちとはそもそも性格を偽っているし、名前、年齢、プロフィール、出身国さえも嘘で固めた完璧な架空人物だ。リヴェアにとって素になって話せる人物とえば、互いの意識共有によって誤解無く理解できる、無垢な蒼い瞳を向けてくるイーニアくらいなものだ。

しかし、そんな事言ってくる人間に一つだけリヴェアは心当たりがあった。それは 母親。200年前の人物だが、曖昧な記憶の中覚えていた母の存在がもしかしたらそんな事を言っていたのかもしれない。最も、根拠は無いが。父親の姿は覚えていない。それほどに嫌っていたのか、それとも唯単に記憶に残りづらい人だったのかどうかはリヴェアにとってどうでも良かった。

リヴェアの視界が段々と滲んでいく。フラッシュバックによる一時的な気絶だったのか、今回は此処にいる時間がやけに短く感じた。イーニアが悲しそうな顔をするが顔を上げ、「ばいばい」と手を振った。



肌寒い風がワイシャツ越しにリヴェアに届いた。開けた視界は数分前の景色と変わらず。地平線まで延びる青と、白の装飾が所々に見える蒼。自身の手には視線を落としてみれば汗が滲んでいた。それは痛みによる物なのか、それとも……

いや。トリヴェアは頭を振った。どちらにしても考えるのは後にしなければならぬ。剥き出しになり外気に晒されているコンソールと座席。コンソールには大型の熱源反応を知らせるマーカーが出ていた。このサイズ、海上となれば空母かそれに準じる何かだろう。

落としてしまおうか……。そんな考えがリヴェアの頭を横切る。戦艦、空母など落とすことは片手間にできる事だ。だが、此処でひらめきが浮かぶ。接触回線による情報強奪。今の自分に必要なのは何よりも情報だ。敵を知らなければ何もできない。そこで考えたりヴェアは外部スピーカーで呼びかけてくる空母に投降する意思を伝えた。

「戦術機から速やかに降りて来い!!」

手に持ったスピーカーからは艦内でも有名な鬼軍曹で知られる高山軍曹の声が甲板に響く。その他の兵もライフルを構え、膝を着いている白い機体に狙いをつけていた。謎の戦術機。推進剤を使用していないのに海上に浮き、両肘から訳の分からない光を撒き散らし

ている機体が今にも攻撃しようとしていた此方の呼びかけに答えたのは数分前だ。

ガシャンと音共に首元から現れたのは少し緑が混じった白髪の男。年齢は19位だろうか。遠目でも分かる金色の瞳。白いシャツに黒いズボンを着用している男はそのまま器用に機体の肩や腕部を伝って甲板に降り立った。

「名前、所属を」

「クリス・アルレヴィオです。所属は」

「……どうした。所属を」

「BETA極秘掃討部隊です」

「なに？そんな部隊名は聞いたことがないぞ」

確かに。極秘といっているあたり事情は伺えるが、かといって訳の分からない機体に強化装備無しで乗っている奴をはいそいそと帰すわけにはいかない。篋 唯依は静かに腰に在る拳銃に右手を置く。

「ええ。極秘ですから」

「……では、その部隊の責任者の名前を」

「それもまた、極秘です」

「話にならないな。悪いが貴官を拘束させて」

ジリッと囲むように配置されていた兵が一步前に出る。それと同じ時に男は一步後ろに下がった。兵もまた一步前に足を踏み出そうとするが、それを振り下ろされた白い機体の腕によって阻止される。高山軍曹が「バカな！」と叫ぶよりも早く唯依は銃を引き抜いて走り出していた。男は既に足を機体に乗せ、今にも首元に到達しようとしている。が、甲板と白い機体の腕との微妙な間に身を滑り込ませ、立ち上がった唯依は銃を構える。

「動くな!!」

「.....」

冷たい視線が唯依を射抜く。先ほどの優男をイメージさせる言葉づかいと雰囲気は演技だったらしい。だとしたら

(ここで、撃つ！)

引き金が引かれる。だが男はそれを身を捻る事で回避し、機体に乗り込んだ。驚愕。この距離で、確実に狙う為に胴体を狙ったというのに回避された。白い機体に翡翠の光りが灯り、それと同時に機体が空母から離れていく。歩兵が必死にライフルを撃つが海中に向けて大きな水飛沫を上げて潜っていった機体には当たらなかった。

F r a g m e n t o f m e m o r y l o s i n g i t (後書き)

難しい……。改めて痛感しました。

さて次々……

Isn't there good in this world?

人を救うのは何だ。神か、それとも同じ人なのか。・・・答えなんて解りきってる。人は人を救えない、表面上は救えても中身は救えない。それは、同じ人だから救えない。同属嫌悪。そう言った方が早いだろう。そして、神は人を救わない。そして、この世界に神はいない。

#### 第四話

空母にロックしたバスターランチャーのトリガーをリヴェアは引くことが出来なかつた。一瞬、そう一瞬躊躇ってしまった。栗色の髪を靡かせた少女に向けられた銃が原因、いや・・・少女自体が問題なのか。

兎にも角にもこのガンダムの存在が軍にばれてしまった以上何らかの処置が下されるのは目に見えている。捕獲か、あるいは撃破なのか。どちらにしてもリヴェアが軍から追われる事は解りきっている事実だった。

これまでの思考を振り払い、コンソールを叩く。接触回線で入手できた情報は少ないが、少なくともあの空母がアラスカ、に向かう事だけは把握できた。これだけでもリヴェアは満足だった。アラスカまで行ってあの空母を叩くのかと聞かれればNO。今はそんな事をしている暇は無い。いつでも落とせる空母をわざわざ執念深く追って落とすなど時間の無駄にも程がある。

悪魔でも最優先事項は異種生命体の、BETAの排除。軍事力に

武力介入している暇は無い。幸い相手もこつちを追ってきていないし、無闇な殺生は避けたい。それに呼応するかのようにコンソールに挟まれた花が揺れるのと、海中を進む機体がBETAの存在をアラートとして伝えたのはほぼ同時だった。

戦術機の迎撃部隊なのだろうか。今となつては見る影も無いガラクタの上に降り立ったりリヴェアは地面を歩いて搜索を始める。大抵の物はコックピットを食い千切られて中に乗っている人間も食い殺されている。形だけの十字架を胸で切ったりリヴェアは死体をポイツと外に放り投げ座席に座った。システム自体は死んでいるが幸いとどんなシステムを使っているのかは分かる。

「網膜投射・・・興味深い」

モニターではなく網膜に直接映像を写す。中々ユニークな発想にリヴェアは感嘆の声を漏らす。戦術機から出ると今度は形状の違う戦術機の所へ。システムメモリーが生きていればソレを頂こうと考えているのだ。だが、その考えも直ぐに終わった。手足が見事にぶっ壊れている戦術機のコックピットへと通じる場所が壊れてないのだ。詰まる所、パイロットは生きている可能性が高い。

よく見ると装甲の一部分が剥がれている。そこ見逃さずに手を掛けたリヴェアは一気に装甲を引き剥がした。案外呆気なく剥がれた装甲を捨て、中を覗く。先ほどの死体が身に纏っていた謂わばパイロットスーツだろうか。それを身に着けているブロンド髪の女性がグッタリとして座っていた。手を取って脈拍を確認してみると予感的中。生きていた。

もう少し奥を除いてみると複座式なのかもう一人の人間がいた。年齢は若い。何処かイーニアに似ている白髪、チリチリと少しだけだけだが、リヴェアは少女に触れた途端に襲ってきた頭痛に一瞬瞼を閉じる。どれだけいるんだと小さくリヴェアは愚痴を零すと、身を乗り出して中を覗いていた体を元に戻し、地面に降りる。

機体は生きているみたいだし、目が覚めれば腰に付いているバーニアでも吹かせば自力で帰還する事も可能だろう。データを奪わなかったのは同種の情け、という奴だ。死んでいるのなら遠慮なく頂くが生きているのならばその可能性を摘むんではいけない。

『可能性を重んじよ』イオリアが残していた書類の最後の行に書かれていた一言。可能性が在るならば、その可能性を信じる。リヴェアはやれやれと溜息を吐きシステムを起動して元の黒色に戻って方膝を着いている機体へと歩を進めようとして 失敗した。

右足を踏み出そうとして失敗したのだ。リヴェアは見事に前のめに倒れ、「ふぎゅ」と情けない声をだして地面とキスした。即座に起き上がり原因を見つける。うつ伏せでリヴェアの右足を握っている白い物体。一瞬BETAか!？と腰から抜き取った小型のナイフを突き刺そうと上に振り上げて

「……ふえ……」

「……」

白い物体、もとい少女が目尻に涙を溜めてリヴェアを見る。ナイフを仕舞ったリヴェアは目尻の涙を拭いてやると、流れるような動きで足に纏わり付いていた手を外す。立ち上がったリヴェアに小さ

な衝撃が走った。腰に視線を落とすと、白い肌の可愛らしい手がギョツとシャツを握っている。片方外す、片方握る。片方外せば、もう片方が握る。

「……………う……………」

「離せ」

「やっ」

子供かよ。しょうがない、とリヴェアは呟くとポケットから取り出した今日の晩飯、ビスケットを少女に渡す。が、手で払われる。どうやら考えを読んでいたらしい。貴重な食料が地面を転がる。幾ら消滅したとはいえ、BETAのいた場所なのだ。拾って食おうとは思わなかった。

ズルズルと引き摺りながら機体の足元まで歩き、昇降装置に足を掛ける。もうどうにでもなれ。どうせ考えは読まれてるし、拒絶するにしても後味が悪い。一人増えても問題はないだろう。若干自暴自棄になりながらもリヴェアは脚部の昇降装置のスイッチを雑に蹴る。しっかりと少女の襟を掴んでおくのも忘れない。

抱きつく場所が腰から首に変化してもリヴェアは何とか面倒だと叫びそうになる口を閉じていた。握った操縦桿を操作し、マニユピレーターで大破している戦術機を掴んで持ち上げる。見捨てる訳には行かないのだ。最寄の基地に連れてってポイすればきつと誰か拾ってくれるはず。出来ればこの少女も拾って欲しいが。

と、此処でリヴェアの頭に閃きマークが浮かぶ。確か……………イニアはアラスカにいとあの世界で言っていた。この少女も制御



は出来ていないが能力者だ。この複座席に乗っていた金髪の女性もセットでイーニアに持っていけば友達みたいな物が出る筈。リヴェアはそう考えたのだ。なんという押し付け。その瞬間首の骨が軋むほど首を締められたが。

「うー……」

「……暴力反対」

「うー！」

分かった、分かりましたよとリヴェアは諦め、マイパーティーに少女一人追加しようと考えたが、少女から伝わってきたイメージでその考えを一時止めた。映ったのは見覚えのあるカチューシャの少女。その他にも白いエプロンを着け、おたまを持っているおばちゃん。白衣を着たパープル髪色の女性。

「ここに行けって事か？」

「う」

ピツと指を差した方角は南。この方向に行けば辿り着けるのか。どうでもいいのだが喋ってくれないのだろうか。「う」と「ふえ」しか喋っていない。イメージと行動である程度は分かるが、チリチリと頭が痛むのだ。普通に話して欲しい。

空へと浮いた機体のコックピットの中で「う」と肯定するように小さな声が響いた。

だから嫌だったんだ。リヴェアの前には銃口が四つ。イメージで見たことがあるパープルの女性にその他の屈強な兵士。入り口の前に立っていた二人の兵士を難なくクリアして横浜基地内部に侵入してきたのは予定通り。しかし、兵士を連れて見覚えのある彼女が出てきたのは予想外だった。今となってはリヴェアの嫌悪を示す眩きも意味はない。

此処に行けと示したうー少女は既に向こう側に保護され、視界の隅に落ちている戦術機からは女性が運ばれている。

「助けてもらったのは感謝するわ。でも、これとそれは別よ」

壊滅したはずの部隊。残存しているBETAが一気に減った理由を彼女はリヴェアに付けた。適当に自爆したとでも言えば納得してくれるのだろうが、大破している戦術機をどうやって持ってきたのかを聞かれる。

「はは……」

どうしたものか。と考える。しくじってしまった。戦術機ではなくパイロットだけで運ばよかった。元々放っておく予定だったのだ。ガンダムさえ、機体さえあればこの状況を打破できるが、生憎と機体は廃墟の一角にステルスを発動させて待機中。つまりだ、リヴェアに残された手段は唯一つ。

「……投降します」

「賢明ね」

当然の如く嘗倉にぶち込まれる事にリヴェアは抵抗しなかった。決して後ろに控えていた屈強な男たちが銃底を振り上げていたのを目撃したわけじゃない。鉄格子越しに彼女と話をする事には抵抗があったが。

「さて、と。幸い霞とも知り合いらしいし？どんな経緯で知り合ったのか私的にはよおおつく聞いておきたいんだけども」

「テレパシーで」

舐めてんじやないわよと言葉と共に送られてくる冷やかな視線にリヴェアは腹を括った。

「恐らく、特殊能力者、更に意識を落とした時のみに訪れることが出来る世界。そこで出会った」

「……なるほど。そっちが本性ってわけね」

「優男の方がいいですか？」

「止めて。本性知ってからだと気持ち悪いわ」

酷い言われようである。

「それで？あなたのコードネームは？」

「……………そこまで知ってるのか」

「そ。没収品から色々探してねー……………生憎とあんたにはコードネームがあるって事くらいしか分からなかったわ」

「リヴェア、だ」

「変な名前」

「ほっとけ」

「……………すみません」

「謝るな。覚悟の上だった」

「……………あなたなら無視すると思ってました」

そのつもりだったんだけどね。と背中が痛くなるベッドに寝転がりながら言葉を洩らす。自分はある手の存在に弱いらしい。今後気をつけなければならぬだろう。暗い営倉の一室。鉄格子の向こう側の彼女、社霞は椅子に座ったまま動かない。

聞けばうー少女こと、社麻衣は霞の妹だとか。何故戦術機に乗っていたのかはリヴェアは聞かなかった。前の世界でも少年兵は見てきているし、この世界もなり振り構っていられない状況なのはよくわかっている。故に聞かなかった。

だからこそだ、うーっ！と叫んでいる銀髪少女をリヴェアは寝返りを打つことで無視した。付き合ってられない……そんな  
眩きを残して。

Isn't there good in this world? (後書き)

毎週日曜日はもしかしたら掲載できないかもしれないのでご了承ください。

一日一話掲載を目指して頑張ります。

不意に思ったんですけど掲載するときのプレビューが欲しいですね。第1話をどこら辺にすればいいのかに迷っちゃうので。

## With the memory

生きたいと願う。切に願う。だからといって、戦うことを望んだわけじゃない。

### 五話

### 第

誇りを持たば人を救えるのか。違う。人を救うのはいつだって力だった。弱者は疎まれその存在を認められない。なら強者は存在を求められるのか、と聞かれればその答えはNO。力があれば必ず人を救えるのかと聞かれてもその答えはNO。強者は存在を恐れられる、そしていつか恐れられた者が後ろから強者を殺す。そうする事で世界は成り立っている。

力があれば人は救えるのか。いや、違う。力があるから救うべき人間が生まれる。弱者を生み出すのは強者なのだ。力を手に入れて変わらない人間などいない。最初は平和と正義と人の為に力を行使しようと言ってもその先に待っているのは緩やかな腐敗。その決意は時間と自らの力を実感していく度に腐り、消えていく。

だから、リヴェアはきつと自分の最後は誰かに憎まれて殺されて終わるのだと、思っていた。

鉄格子越しにみる彼女は随分と拗ねていた。一見何時も通り無表情なのだが若干眉に皺が寄っているのがその証拠だ。どうやらあの空間に入れるのは二人だけらしい。なぜあの空間で出会うのが最近イーニアのみなのか分からなかったリヴェアは納得した。聞けば霞は香月博士の研究を手伝っているらしく、意識を落とすのが遅いらしいのだ。

対するイーニアはアラスカの向こう側では子供待遇、更には過保護な保護者的存在のお陰で眠るのが早く、空間に辿り着くのが早いとの事だった。昼寝を取らせている所を見ると過保護さが窺える。リヴェアは溜息を吐くと、寝かせていた上体を起き上がらせて簡素ベッドに投げ出していた足を地面に着かせる。

「機嫌直せよ」

「……怒ってる訳じゃないです」

「……はあ」

怒っている訳でない。つまり、機嫌が悪いということとは否定していない。本格的にどうにかしなければならないとリヴェアが決意をした時だ。霞が通路の右を見つめる。それと同時に響いてきた独特のブーツの音。ガシャガシャと鳴る装備の擦れる音にリヴェアは溜息を吐いた。ついに来たかと。

香月博士と最初に話した以外の事をリヴェアは答えなかった。何処からきたのか、年齢、その他色々。尋問が行われるのは重々理解していた。



「来い」

褐色肌が印象に残りそうな黒人の軍人がリヴェアの手を掴んだ。特に抵抗もせずに手錠を掛けられる。銃口で背中を突っ突かれながらもリヴェアは先頭に立っている軍人の後に続いて歩き出した。

銃を構えている軍人が後ろに一人、出入り口に二人立っている気が縮む空間。向こう側の女性はウェーブの掛かった栗色の髪を揺らして手元の紙が挟んであるボードに目を落とすとキツとした目でリヴェアを睨み付けた。

「神宮司 まりも軍曹だ。貴様の尋問官となった」

ハキハキと相手を威圧するように話す彼女は理想的な尋問官だろう。リヴェアが憶えている尋問官と言えばとある国の要人に不用意に近づき過ぎてしまい、拘束されたときに出会った肥満気味のおっさんだった筈だと記憶を探る。彼は銃を突きつけて散々脅してきたが受けた傷らしい傷と言えれば銃底で殴られたくらいだろうか。

彼女はどんな尋問をするかを考えていたリヴェアだが、頬を襲った衝撃でその考えが吹き飛ばす。ヒリヒリと痛む頬が彼女、軍曹に殴られたと知るのには拳を振り切った軍曹を見るまでリヴェアは気づかなかった。

「人の話を聞かんかッ!!」

コイツは少しヤバイかもしれないと、リヴェアの額に汗が滲んだ。

最低限の最低な設備が揃っている営倉でリヴェアは顔を洗っていた。ヒリヒリと頬が痛む。鏡に映る何時も通りの自分は少し頬が腫れていた。軍曹から少し目を離れたら殴られ、黙っていても殴られる。どうやら彼女と肥満親父は違うらしい。銃を突きつける所か拳で普通に殴ってくる。

リヴェアは痛むを頬を押さえながらも鉄格子へと歩み寄る。一本を右手に、一本を左手に掴み跳ね返るように両手を反対側に引く張った。見事に掴んだ部分からくの字に歪曲した鉄格子を潜って外に這い出たリヴェアは靴底を外し、一本のナイフを手を持った。幸い没収されたのはポケットに入っていた宝石の類、リボンスから渡された自身のコードネームが書かれた小さな紙程度だ。捨てて行っても特に問題は無い。

「……行くんですか？」

「ああ。こんなところで時間を浪費するつもりは無い」

「……そうですか」

「……これ」

リヴェアが取り出したのは唯一没収されなかったネックレス。向日葵の花をイメージして彫刻されたアクセサリー。それを霞に握らせたリヴェアは響いてきたブーツの音に身を低くし、音が響いてき

た反対方向に向かって走り出した。

「待て、見過ごすわけにはいかない」

模擬刀を構える少女にリヴェアはナイフを横に構えた。そろそろだが見回りの兵に脱獄を察知されるだろう、この少女に時間を取っている暇は無かった

。走り出したのは少女。濃い青色の髪を揺らして一気に踏み込んでくる。リヴェアはそれを跳躍して後ろへと回り込み、振り向き様に右の肘を少女の後頭部に向けて放つ。

だが、その一撃は屈むことで回避された。体制はそのままに少女は下段の回転切りを披露して見せた。こればかりはリヴェアも回避できない。が、左拳で模擬刀の刀身を殴り付けた。鈍い音と共に折れる模擬刀を蹴り飛ばすと、啞然としてる少女の後頭部目掛けて今度こそリヴェアは手刀を繰り出した。

安心したリヴェアが吐いた溜息と基地の異常を知らせるアラームが響いたのは同時だった。

システムを起動させる。全天モニターに、コックピットに緑の光の線が往復し、モニターにOKの文字が出る。コンソールを叩いて現状を確認すると基地の周辺を小型の熱源反応が多数存在する。恐らくは基地の周辺を生体センサーで探っているのだろう。GNドライヴは夜間では目立つ。迂闊に使用しないほうが良い。引き続きコンソールを操作してドライヴの出力を切り、緊急用背後ブースタに

切り替えたリヴェアはゆっくりと地面から離れた機体を操作して夜の空へと上がっていった。

夜明け、か。モニター一杯に映った海の地平線と顔を出した太陽にリヴェアは手で一部の視界を覆った。更に機体を操作して海面スレスレの飛行から高度を上げて高度3000mまで上昇する。地球と宇宙の狭間。コンソールを叩いて背後ブースタからGNドライブに出力を切り替えたリヴェアは操縦桿から手を離し、背もたれに寄り掛かった。

深く吸った息が肺に流れ込んでいくのを感じながら瞳を閉じる。疲れが溜まっていたのか、閉じた途端に襲ってきた眠気にリヴェアは意識を任せた。

昔に囚われていた。過去に何があったのかを知りたくて、ただ我武者羅に戦ってきた。だけど、何時からだった。自身の意思が薄れていったのは。イノベーターになり、リボنزの計画に参加してから？それとも戦いを始めてから？違う。どれも答えに近いが不正解。きつと、戦って、敵を殺してから自身は変わっていったんだ。敵を殺し、人形のように状況に流され、意思を主張できずに戦いを始め、答えを出す前にまた戦いに巻き込まれる。

もし、もしも。戦う事が俺の本質ならば、俺は。

「最低の人間だ……ッ」

チリン。と風鈴の鳴る音が聞こえた、目を開けてみるとそこには木造建築の家が堂々と建っていて、縁側で少年と麦藁帽子を被った女性が話をしている。庭には向日葵の花が沢山植えてあり、既に咲いているのもあればまだ咲いていない物も在る。

「花を植えましょう」

小さなスコップを片手に持った女性が足元の土を軽く掘って種を放り入れる。掘り返した土を穴に被せた女性は満足そうに頷くと少年に種を渡した。「貴方も」と言って。少年は暫くボーっとしていたが、直ぐに笑って手元のスコップを手に握った。

景色が反転する。月と太陽がアニメーションで入れ替わるような感覚。太陽が照らしていた家の庭には月明かりだけが主張しているのみ。少し大きくなったと感じる少年はスコップを片手に必死に穴を掘っては種を植え、掘っては穴を埋めている。麦藁帽子の彼女はいない。よく見ると庭に咲いていた向日葵の花は枯れていた。

一通り埋め終わったのだろうか。少年は縁側に置いてあった水色のジョウロを手にとると水を撒き始める。空になってしまったのが水が出なくなったジョウロを地面に置いた少年は蒼いスコップとオレンジ色のスコップを地面に突き刺した。

景色がまた入れ替わる。建築物と月は消え、物寂しさを与えていた枯れた向日葵たちが白に塗り替えられていく。その光景に目を取られていたリヴェアだが、目を閉じてもう一度開けると真っ白な空

間が変わっていた。何も無い、ただ其処にあるだけの空間。唯、一つだけ違つところがあった。リヴェアが向けている視線の先。巨大な電子掲示板の様な存在がそこにあった。

一言だけ書かれている掲示板。

『鑑純夏は彼女なのか？』

訳の分からない一言が消え、また一行の文字が浮かび上がる。

『You pray and I am praying that  
you can revolutionize it.』《君が、  
君自身が変革できるように私は祈っている》

そこで意識は途絶えた。

暗い空間の中で寝転がっていたリヴェアは目を覚ました。起き上がる気力は湧かず、そのまま虚ろな目で地面と自身の手を見る。・・・いや、正確には何も見ていない。視界を適当に放り投げていたら手と地面が目に入ったのだ。たったのそれだけ。それほどまでにリヴェアは脱力感に浸っていた。やる気が起きないなんて物じゃない。やる気を起こすことすらも億劫に感じる。

「分からないよ・・・母さん・・・」

自身の戦う理由。BETAから人を守り、自らを犠牲にして人を

救う。だけど、自らBETA事死ぬことを誇りとしている人間たちが住んでいるこの世界。今、リヴェアが守ろうとしているこの世界は、リヴェアにとって本当に、絶対に守らなければならぬ世界なのだろうか。ギユツと握った拳から血が出ているのにも関わらず、リヴェアは自身の悩みを消し去るように何時の間にか光が照らしていない暗闇空間の中で目を閉じて膝を抱えた。

Next Story . . . 「Continue Looking  
for answers」

## With the memory (後書き)

なんか納得できない。だがしかしこの物語を完結に導いてみせる。  
感想要望リクエストその他。色々お待ちしています。



自分の過去への答えは見つかった。でも、今の自分への答えがわからない。だから探していこう、これまでの自分がそうであった様に、これからも。だって自分の周りを不意に見回してみればこんなにも支えてくれる人たちがいるのだから。

第六話

目を覚ました。何時もと同じの黒い空間  ではなかった。

若干差している光が強くなった気がする。そんな小さなことはどうでもいいかとリヴェアは正面の霞を視界に捉える。何故か意識は共有できていなかった。自身が無意識の内に拒否しているか、霞本人が拒否しているか。しかしリヴェアにとってそれはどうでも良かった。

「……迷ってるんですね」

「……読まないでくれ。そういう気分じゃない」

何を考えているか窺い辛い表情で淡々と自分の根元に巣食っている原因を当てる彼女にリヴェアは苦い顔をして目を背けた。迷っている。過去を知ったからこそ今の自分は迷い、塞ぎ込んでいた。イオリアに協力したのは戦争を、争いを憎んだから。戦争を止めれない人類に終止符シフトを打つために過去のリヴェアはイオリアに協力した。

思わず在るかすら分からない空間の地面にしゃがみ込む。母親を奪った世界と戦争が許せなかった。花を咲かせようとした人間を一

蹴した軍人が許せなかった。……未来を殺している世界が許せなかった。人は死んでいく。戦争に巻き込まれ、家族を奪われ、自身の世界を殺される。平和など何処にも無い。常に戦っている。そんな世界だった。

だから、花を咲かせようと言った母親にリヴェアは憧れた。庭一杯に一つの向日葵の花から手に入れた種を撒き、種を収穫して再び植える。その作業を四季が何度通り過ぎても、母親が横から居なくなってもやり続けた結果、花は咲いた。だが遅かった、何もかも。両国の国は焼かれ、子供は死んだ。母親は生まれつきの病気に、心労が重なり呆気なく死んでしまった。

平和になったと言えるのだろうか。戦争を始めた人間たちは自分の国を焼かれなければ犯した過ちに気付くことが出来ない。気付いてもその頃には人は大勢死んでいる。

そんな世界を変える為に、リヴェアはイオリアに協力した。

「……大丈夫です」

何がとは聞かなかった。いや、言おうとしたのだが背中に感じる温かみに言葉を失う。

「……わたしが、傍にいますから」

機体は何時の間にか地面へと着地していた。場所はホツカイドウ

から北へと上ったカムチャツカ半島と呼ばれている場所。その沿岸部に機体は膝を着けて待機していた。日は既に機体の真上に上り、昼を示している。飯でも食べようかとリヴェアがコックピットブロックの開閉装置を押そうとした時、機体の振動計が微かに揺れた。

異常なんかではない。続けて揺れる振動計を調べようとしたリヴェアだが、正面の海から出てきた異形の姿に即座、操縦桿を握る。次々と現れて来るBETAに先制とばかりに左のGNバスターランチャーが紅い極光で海を抉る。右のマニピレーターを操作し、背部のビームサーベルを抜き取りGN粒子を供給、紅い光を灯したGNビームサーベルが海上から現れていた小型のBETAを消し去る。

もう一度GNバスターランチャーのトリガーを引いたらリヴェアは機体を海の中につまませた。その瞬間に襲ってくる光線、光線、光線。水中に対応しているのかとリヴェアが舌打ちする前に機体紅いGN粒子と共に海から飛び出す。海面という幕を突き抜けて飛び出してきたレーザーを横にロールすることで避け続け、再び大きな水飛沫を上げて海中へ。

当たりもしないレーザーの攻撃でモニターには敵の、BETAの居場所が丸分かり。赤い光点となって知らされるBETAの居場所にバスターランチャーの極光が衝突し膨大な気泡を発生させる。メインカメラ一杯に映った気泡を薙ぎ払うように右腕が振られる。視界が開いた所に構えられるランチャー。虹色の瞳が輝くりヴェアはトリガーを引いた。

「むーっ！ー！」

イーニアが唸る。リヴェアはどうしようもないと空間に出現していたソファに腰を下ろした。なぜこんなもの《ソファ》が出現しているのかは分からないが、今はそんな事どうでも良かった。イーニアから流れてくるイメージは山。その山が次の瞬間噴火する。怒っていると言いたいのだろう。だがそれを知ったとしてもリヴェアは彼女を宥める方法を知らなかった。

そもそもなぜ怒っているのかすら分からない。すると此方の意識が分かったのか今度は違うイメージが流れてくる。劇場の様な場所の左幕から出てきたのはデフォルメされた小さな霞。右幕から出てきたのは目が虚ろで覇気が感じられないデフォルメされたリヴェア。なぜかいきなり泣き始めたデフォルメリヴェアの背中に霞が乗っかり、二人をハートが包む。

「……見てたのか」

「……なかま、はずれ」

そういうことじゃない。とリヴェアは反論しようとしたが止めた。劇場にデフォルメリニアが出て来てハートを割ったかと思うと弾丸のように突撃し三人纏めて左側の幕に飛んでいく。デフォルメリヴェアが飛んでいく最中死んだ目でこつちを見ていたが気のせいではないだろう。心なしか「助けて」とも言ってた気がする。

完全に誤解されている。冗談じゃない。自分はロリコンなんかじゃないとリヴェアはイーニアにイメージと共に説明する。自分が好きなのは同年代の女性であり、年下は恋愛対象ではない、と。リヴェアは余程自身の正常を訴えたいのか記憶の中からソレスタル・ビニングのメンバーであり、リボンズとの戦い後によく会っていた

女性、フェルト・グレイスのイメージを引つ張る。

「むー……」

失敗。更にイーニアの眉間に皺が寄り、頬が膨らむ。本当にどうしようもなくなったりヴェアを襲ったのは急激な目覚めだった。

「助かったのか、助かってないのか分からないな……」

木陰に任せていた体を起こして辺りを見回す。てつきり誰かに起こされたのかと思ったのだが、どうやらただの杞憂らしい。人影は見当たらない。が、海の彼方に見える黒く、小さな物体。それを見た瞬間にリヴェアは立ち上がり直ぐ傍に待機していた機体の昇降装置に足を掛ける。恐らくはあの物体の正体は空母。幾らBETAを海中で撃破したとはいえバレルるものにはバレルらしい。

立ち上がったシステムの作業を全て横流しにし、とりあえず機体を操作して海中へと向かわせる。だが、機体の遠望カメラが厄介な物の存在をリヴェアに知らせた。BETA。戦闘中に感じた違和感、BETAの数が少ないと感じていたのは間違っていた。簡単に言えばBETAは別れたのだ一陣、二陣に。二陣のBETAはたった一体、だがそのサイズは大きい。八本足の奴とは違い、四本足、鉄みのような手、カメラに映る複眼。

その鉄が海面を航行している空母を挟もうとしたその刹那。リヴェアの操るガンダムが巨体を掴み、海上に向かって衝突したまま突

き出る。そのまま新種のBETAを蹴り飛ばし陸地に吹き飛ばしたリヴェアは急いでコンソールを叩き始める。

空母に見つからない為にまともにシステムを作動させてないのだ。FCSはともかく、今使える装備は緊急用の腰部大型カーボンナイフにGNドライブのみ。故に機体ごと体当たりなんて真似に出たわけなのだが。

マニピレーター同期が完了し、次はFCSの調整を行ってやっと完全に戦闘ができるというのに、相手《BETA》は待つてはくれなかった。背中の殻を中央から両側に開き、羽らしき物を出して飛び、先ほどのお返しとばかりにリヴェアに体当たりをかました。

「クッ！……この！」

GNドライブが強い光を撒き散らして押されて海中に叩き落されそうになるのを防ぐ。だがBETAは止まらない。右のマニピレーターが腰部がスライドして出てくるナイフを掴みBETAの複眼目掛けて振り下ろされる。が、ナイフは空を切りBETAは再び地面に降り立つ。

そして、それは謂わば油断。一瞬目を瞑ったリヴェアを襲ったのは衝撃。モニターに映るのは見ていて気持ちが良いものじゃない複眼。マニピレーターを操作しようとするが反応しない。全天モニターの一角に映っている機体の損傷を訴えるウィンドウには左腕、右腕に異常を来たしていると報告している。

鉄に挟まれている両腕をなんとかしようとして機体がBETAの腹目掛けて蹴りを繰り返す。それと同時にGN粒子を放出し、マニピレーターがゆっくりとBETAの鉄を掴む。タイミングを合わせて

一気に引き千切り、カーボンナイフを腹部に突き刺し、離れ、もう一本のカーボンナイフを腰から引き抜く。振り下ろすナイフはBETAの首裏に突き刺さった。

終わった、とりヴェアが安堵の溜息を吐いた時だ。新種のBETAに急激な変化が訪れる。その巨体はグニャグニャに曲がり、それを白く丸い球体が包む。急激なエネルギー警報。機体が警告する前にリヴェアは機体を動かしていた。

自爆。BETAが自爆した。それもそこらへんの爆弾規模じゃない。戦術レベルでの爆発。戦場で爆発すれば敵味方関係なく多大な被害を生むだろう。爆発の影響で散った白い雲、恐らくは余波を食らったのだろう。転覆している空母。

とつさに海の中に退避していたリヴェアは被害と言う被害は被ってなかった。せいぜいカーボンナイフ二本に傷が付いた位だ。逆に言ってしまうえば、「GNDライヴ搭載機にも直撃すればただでは済まない切れ味を誇るカーボンナイフが傷ついた」ということだ。

恐らくこの世界の今の技術レベルではあのBETAに太刀打ちできないだろう。ならば自分が優先的に、積極的に戦場に介入例の新種を確認したら徹底的に撃破していく必要が出てきた。

転覆している空母を元に戻しながらリヴェアはこれからどう行動するべきか考え始めた。





Continue Looking for answers (後書き)

やっべ。かなりやばい。

ちよいとペースが落ちるかもしれません。

避けようの無い現実、自らを地獄に叩き落とすと分かっている。この道を進もう。後ろには壁、両側は奈落の底。ならば進む。進むしかない。愚図ってその場にしゃがみ込んで現実は変わらない。

だから、例え人類から目の敵にされたとしても進み、その先に待つ結末を甘んじて受けよう。

## 第七話

GN-001ガンダムエクシアにはコード名「セブンスード」と呼ばれる五種七本の剣を装備している。これをデータで見たりボーンズは自機であるリボーンズガンダムのプロトタイプ機。プロトタイプ機は二機ある。一機目はアイスガンダム、そして二機目がリボーンズガンダム【P】。遠近を両立する為に製造された開発コード「P」は大型のGNバスターランチャーを二挺。実体剣であるGNカールボンナイフ、GNビームダガー、GNビームサーベルそして試験的に出力強化型のフィンファンングを十二基装備している。

この「P」を開発中にリボーンズは「とある装備を二つ付けた」。それがGNフェザー。開発コード「リヴァイヴソード」。左腕に取り付けられているシールドを變形させて一本の大剣にする。GN粒子を表面上に展開させて驚異的な切断力を手に入れられるこのリヴァイヴソードはある意味でリヴェアにとっては最終の手段だった。

右、左のマニユピレーターの間で言う掌には高密度のGN粒子を放出できる穴が存在し、GNバスターランチャー、GNビームサーベルを接続する事で両肘に装備されているツインドライヴと直結の驚異的な出力を誇る。無論、マニユピレーターで相手を掴み高密度のGN粒子を放出。破壊する事もできる。

と言う事だ。手に持っていたペンを突きつけていた画面から下ろし、正面に座っている香月博士と霞に視線を戻す。そう、リヴェアは香月博士に協力を求める為に横浜基地まで来ていた。

「擬似太陽炉に、ガンダムねえ……見れば見るほど破格のスペックだね」

「……」

香月博士が協力する代わりにリヴェアに求めたのは操縦していた機体の情報開示。最後まで粘りに粘ったりリヴェアは遂に折れ、「P」の機体スペック解説、武装を説明し、今に至っている。

で？と皮肉気味な視線を送ってくる香月博士にリヴェアは嫌々なんだ？と答えた。

「Sランクの秘匿義務があるんじゃないの？」

「……俺は変わる。俺も、ガンダムもな」

格納庫に立つ白い巨体をリヴェアは見上げていた。香月博士に依

頼した内容は唯一つ。自身の目的達成までの協力。その代わりに機体の情報を開示、尚且つ極秘作戦への極秘参加。

整備は自分自身で行い、整備員は参加させない。その代わりに香月博士が要求したのが社霞の機体搭乗だった。だが元々一人乗りの「P」だ。霞の乗るスペースなど無い。・・・だというのに。

「・・・頑張ります」

ヘッドセットにインカム。普段と比べて若干気合が入っている目をしている霞がグツと胸の前で拳を握る。香月博士曰く「乗れないなら膝にでも乗せなさい」だそうだ。

昇降装置に足を掛けて霞を腰に抱くとスイッチを押す。先にコックピットの座席に座り、顔を覗かせた霞に手を伸ばした。

システムが起動する。直ぐ始まる各部チェックにFCSの微調整をバックグラウンドに回し、GN粒子を噴き出して地面と離れた機体の操作を始める。物珍しげな目を向けている繋ぎの作業服を着た整備員二人が開けたドアを潜って外へと出る。

なんでも、あのニイガタで出会った年老いた男性が言っていた帝国の政威大將軍殿下・・・である煌武院 悠陽が視察に来ていたらしい。そこで来たのがリヴェア。香月博士はこの機会を逃さずに帝国の重鎮にこの基地の戦力を見せ付けたいのだという。一瞬子供かよと思ったりヴェアだが底知れないプレッシャーに口を閉じる。

全天モニターの左がアップで映し出される。紫の髪を白い布・・・

・？だろうか。で纏めている女性。彼女が煌武院 悠陽らしい。リ  
ヴェアにとってこれほどにいらぬ情報も無いだろうか。

正面には何処かの戦場で見たことがある戦術機。確か、不知火と  
呼ばれていたか。その戦術機がショートバレルのアサルトライフル  
を掲げている。対するこつちの武装は      オーダーだった。

簡単に言ってしまうえば香月博士は一機目は何も使わずに倒し、二  
機目をGNビームダガーで倒せと指示してきたのだ。当然の如くコ  
ックピット部分、戦術機では管制ユニットと呼ばれている部分を狙  
つてはいけない。それさえ守れば後は好きにしていとの指示だっ  
た。

「……三十秒後に開始するみたいです」

座席の後ろから聞こえてきた霞の声に「ああ」と返事をしたリヴ  
エアはコンソールを叩いてあるシステムを呼び出した。GNフェザ  
ーと呼ばれる武装の出力調整画面を開き、自由にGN粒子濃度を  
更できるシステム。

粒子濃度を最弱まで設定すると合図のサイレンが鳴ると同時にそ  
の瞳が虹色に輝いた。

確かに自分は指示さえ守れば好きにして良いと言ったが……  
と夕呼は息を呑む。模擬戦開始と共に浮上したあのガンダムは何を  
仕出かすのかと思っていたら翼のように紅い光を機体の後ろに展開

した。絶えず放出される光り輝く羽。模擬戦相手の戦術機、不知火もその光景に動けないらしい。先ほどから動きが無い。

だが、ここまで動きが無いのはオカシイ。言ってしまったか光の羽だ、そう解り切ってしまったえば動けないことなんて無いはず。ようやく覚悟を決めたのか一機の不知火が突撃砲を構えるが、それを恐るべき加速で接近したガンダムが先制する。突き出される手が不知火の頭を貫き、次にもう片方の手が構えていた手を掴んでグシヤリと握りつぶす。

止めとばかりに繰り出された蹴りが不知火を吹き飛ばし、一機戦闘不能となった。そして二機目。GNビームダガーなる武器の使用を許可した相手だ。が、勝負するまでもなく終わった。腰から取り出した紅い光を纏っている小さな剣が不知火の両手を紙の様に切り落とし、もう一本の手が抜き取ったもう一つの剣が今度は両足を切り落とす。

ゆつくりと上昇を開始したガンダムは勝利を喜ぶように再び紅蓮の羽を天に伸ばした。

「あんたに、客人よ」

PXに向かう夕呼の後ろには少し気持ち悪そうにしている霞と何とも言えない表情をしているリヴェアが居た。リヴェア曰く、交流するのは得意ではないらしい。プツ・・・と今でも思い出し笑いしてしまう。が直ぐに自分を見る白い視線に態度を戻す。

この先には煌武院 悠陽殿下が待っている。素晴らしい機体だと、操縦技術だと、日本の為に頑張ってくれと伝えたいらしい。殿下らしいと言えそうなのだが、後ろの男、リヴェアが今後日本の為に戦うとは到底思えない。

あの時見せた目は自分と同じ目。計画を遂行してみせると日々机に向かっていている自分と同じ目だった。

(だからこそ、協力要請を受けたんだけどね・・・)

そして手に入れたガンダムとそれを操る進化した人類、イノベーターと名乗ったリヴェア・ヴェネツチア。進化した人類というのは興味深いが今はいい。敵か味方か。どちらにしても今は傭兵扱いで一応味方なのだ。それでいい。

PXのドアの前に立った夕呼はクルツと反転し人差し指をリヴェアに突きつけた。

「いい？この先にいるのは煌武院 悠陽殿下よ。く、れ、ぐ、れも失礼の無いように」

「了解」

「それと、武器は没収されるわ。髪の毛に隠してるピンを寄越しなさい」

何故分かったとそんな顔をしているリヴェアは頭の髪を払い、ピンを夕呼の手に渡した。ピンを確認した夕呼をドアに手を掛ける。ドアが、開かれた。

長いテーブルが三つほど縦に並んでいる場所。香月博士曰く、食事を取る場所らしいのだが、今のリヴェアには食事をとる場所とは思えなかった。言うならば……そう、尋問室。自分の手元に並べられた箸と呼ばれている二本の棒。その上に位置する場所に置かれている皿に乗せられた謎の物体。冷や汗が頬を伝う。

確か目の前に座る笑顔の彼女、煌武院 悠陽は面白いパフォーマンスを見せてくれたお礼にと食事を振舞ってくれた筈なのだ。だが、目の前の物体は果たして食事と言える物なのだろうか。なぜか視界にフィルターが掛かってしまったかのように物体、もとい皿の上に乗っている料理を見ることが出来ない。この時点で既に料理ではないだろう。

だが、後ろに立つ綺麗な緑色の髪を持つ女性がそれをさせない。目を光らせ、「貴様は殿下が作った手料理を食べられないのか？ うん？」と言わんばかりの視線をリヴェアに送る。その右手を添えているものはカタナ。データでしか見た事の無い物だったが、切れ味が恐ろしく良いとデータが示していた筈だ。

仕方無しにリヴェアは手元のハシを掴む。が、今一上手く使えない。そんなリヴェアを見た殿下は立ち上がると机を迂回してリヴェアの手を掴む。

「……すいません。殿下」

「いいのです。それに、殿下。ではなく、悠陽と呼んでください」



悠陽が導く通りにハシを動かし、一本を親指の付け根に、一本を人差し指と中指で中間部分を軽く挟む。これで使える……。らしい。確かに先程よりは使いやすいが少し動かし辛さが残っている。

「慣れれば使いやすいものですよ」と言う悠陽にリヴェアは苦笑すると普通に、心構え無しに、悠陽に勧められるままに謎の物体もとい料理を口に運び、飲み込んでしまった。

しまった……。！とリヴェアは吐き出そうとするが、「御味の方は……。？」と期待の視線を送る悠陽に、吐き出そうとしている事がバレているのか緑髪の女性がカタナを若干引き、キラリと光らせながら「吐いたら貴様の命も吐かせてやる」と殺意を送ってくる。

その瞬間に襲ってくる鈍痛。頭中から釘で刺されるような痛み。もはや料理ではない。もがいた時に倒してしまったのだろうか？テーブルの上に水をぶちまけてしまっている一角に、遠ざかる意識の中でリヴェアは水で”悠陽”と書くと大きな音を立てて地面に倒れた。

Next Story . . . 「Yokohama base」



正体を隠すのに最適なものは何か。簡単だ。仮面を被れば良い。目も、鼻も、口も。耳さえも隠してしまうような仮面を被ればよっぽどのが無ければ正体はばれないだろう。

最も、自身を見る怪奇の視線に耐えれば、の話だが。

第八話

リヴェアが香月博士に自分が営倉から逃げ出したときに顔を見ている人物が居る、尋問官に顔を覚えられ、尚且つ打ん殴られたと言ったのはつい数分前の事だ。その報告に香月博士は机の引き出しから白い何かをリヴェアに投げつける。引っくり返してみればそこには何か分からないが何か書かれていた。赤い鼻に小さな目。目の部分には穴が開いていて其処から見えるらしい。

最後に言いたいのは目の上辺りに付けられている耳だ。口には出さないリヴェアは苦い顔で香月博士を見る。

「正体隠したいんでしょう？それでも被ってなさい」

「……耳、お揃いですね」

そんな言葉にリヴェアは仮面をソファに叩きつけた。冗談じゃない、こんな物は絶対に着けないと。

「あら？霞ちゃんじゃないか！それと・・・アンタは？」

「リヴェア・・・です」

結局はこうなるんだ。昨日悠陽の手料理を食べ、倒れた場所PXのカウンターにリヴェアと霞は居た。白いエプロンに元気のある笑顔を霞に向けたおばちゃんはリヴェアに怪しげな視線を向ける。思わず耐えられなくなり顔を背ける。

「・・・事情があるんです」

「うん？そーなのかい？じゃあしょうがないわねえ・・・お二人さん、何食べるんだい？」

「・・・水で」

「・・・鯖定食で」

こんな仮面では飯もロクに食べないだろう水と頼んだリヴェアは誰にも聞こえないような溜息をそっと吐いた。

「か、かわいい・・・」

「・・・よかったですね。リヴェアさん、かわいいって」

「そういう問題じゃないんだよ・・・」

リヴェアの思惑通り、人が集まってきたPX。そして予想通りに向けられる得体の知れないものを見る視線、シセン。だが、一部の人は違った。目の前に座って仮面を突付く白いリボンに小さな三つ編みが印象に残る女の人。名を確か・・・涼宮遥と名乗っていたか。

しかし、周りからの視線は止まらない。そんな苦悩に苦しんでいるリヴェアに救いの手を差し伸べる如く、ポケットに入っている端末が小さく震えた。直ぐに立ち上がり霞に「用事が出来た」と伝えたとPXのドアを蹴るように開けて通路を走る。機体から送られてきた情報はコックピット内に誰かがいるという律儀でありがたい報告。

どうやって入ったのだろうか。入ったにしてもバイオメトリクスで引掛かり機体の自動制御によって摘み出されると思うのだが。バイオメトリクスで使用しているデータはリヴェアの遺伝子データ。照合は誰かが入った時点で自動開始される仕組みになってる、だといつのに侵入を許すとは・・・。

「なにやってる」

「うっ？」

幼い体に透き通るような白髪。社麻衣が座席に丸まって居心地良さげに顔を緩めていた。が、そんな物に和むようなリヴェアではない。襟を掴むと設置されていたキャットウォークに放り投げる。うーうー喚いている麻衣を無視して座席に腰を下ろすと、メインカメラを通して映っている格納庫の風景をバックに一つのウィンドウが

開かれていた。

白いウィンドウに書かれている一言。OKの文字。つまり、ハッキングで照合を回避したのではなく、普通に乗って普通に遺伝子データ照合をクリアしたという事だ。だが、この世界にリヴェアの子孫など居ない。当たり前だ。誰とも添い遂げる気はないし、そんな暇は無い。だというのに何故彼女は……詳細を麻衣から聞いたそうとコックピットから出ようとしたリヴェアに霞の顔がぶつかる。

「……どうした？」

「……BETAが出たそうです。迎撃に出て欲しいと博士が」

「麻衣は？」

「……麻衣ならいません。それにここへ来るときも誰にも会ってません」

「なに？」

詳細を聞くこととするリヴェアの耳に入ってきたのは香月博士に怒声だった。

「……BETA反応消失したみたいです」

「そう、か……」

リヴェアの中ではBETAの行動が引つ掛かっていた。逃げるのではなく、侵攻するのではなく機体に向かってくるBETA。前に戦ったときは見向きもしなかった存在が今度は積極的に攻撃を仕掛けてくる。仕掛けてくるのなら答えは簡単、やり返せば良い。BETAとこの機体じゃ性能差が大きすぎる。その気になれば踏み潰して終わりだ。

だが、なにか違った。まるで。と答えを導こうとした時だ。機体のコックピット内にアラームが鳴り響き、同時に機体が自動制御に切り替わり、上空で待機していた位置から一気に下まで落ちる。画面には極太のレーザーがさっきの地点を通過する。香月博士が言っていた光線級と呼ばれているBETAか！？答えはNO。

螳螂の様な両手の鎌。羽ばたいている大きな二つの羽、口と思われる部分から上がっている蒸気。そして見覚えのある複眼。リヴェアは被っていた兎の仮面を放り投げ、霞にシートへ掴まるように、と早口で告げるとロックも無し、完全な目視標準でGNバスターラUNCHャーのトリガーを引いた。

「やはり、当たらないか」

当然のように急降下し回避して同じ地面に立ったBETA。不気味に鎌を揺らすBETAにリヴェアはGNビームサーベルを抜き取った。機体の倍以上あるBETAは上に大きく振りかぶった鎌を、“投げた”。手首辺りから千切れた鎌は縦に回転しながら機体に迫る。が、既に空中に回避し尚且つ接近していたリヴェアには意味が無い攻撃だ。そのまま右腕を引き、突き刺すモーションを取った。

だが、おかしいのだ。投げて千切れた筈の右の鎌が復活している。

緑色の液体を辺りに撒き散らしながら。しかし、リヴェアは止まらない。複眼の下に集いつつある黄色い閃光の発射を阻止するべく、GNビームサーベルが口に突き刺さった。抉るように突き刺し、引き抜くと今度はGNバスターランチャーをマウントし、何も装備していない左のマニユピレーターがBETAの頭部を掴む。

「弾ける」の声と共に押されたトリガーに反応し、左のマニユピレーターから真紅のビームが何度も放たれる。最後の一発が頭部を消滅させた所でBETAはその鎌を力なく地面に倒し、横たわった。

『よくやったわ。そのBETAの死骸はチームが回収しに来る筈だからそれまで現状待機よ、お疲れ様』

「らしくないな」

『……なにが？』

「アンタみたいな人間が素直に礼を言うとは思えないってさ」

「言ってくれるわね」とニヒルな笑い顔を披露した香月博士にリヴェアは苦笑した。

「あ」

「あ」



失敗したと。リヴェアは呟く。通路の曲がり角を行くとぶつかってしまった女性。栗色のウェーブが掛かった髪に見覚えのある髪。その髪色と瞳に嫌な思い出しかなかったリヴェアはとっさに顔を背ける。だが、不意に仮面の存在を思い出した。そうだ、自分は仮面を着けている筈。バレる筈が無いのだ。

しかし、現実は厳しい。自身が歩いてきた道を霞が少し早足で何かを持ちながら歩いてくるのをリヴェアは目撃した。その手には、見覚えどころじゃない代物が握られている。見た瞬間から着けたくないと思わせる鼻に、両頬に走っている三本の黒い線、穴が開いた目。間違はなく香月博士から受取った趣味の悪い仮面だった。

リヴェアは自分の顔に手を当てる。擦ればキュツキュとなる肌触りは無く、代わりに肌があるのみ。

「……貴様、あの時の　ッ!」

「はいはい、そこまでよッ!」

「へ?」

「つと……」

見えない誰かに突き飛ばされたらしい栗色の彼女は自身の方に躓きながらヨロヨロと倒れこんでくる。身を捻らせて咄嗟に避けようとしていたリヴェアはいや、避けちゃ拙いだろ。と捻っていた体を元に戻し、受け止めようとして……足が絡まり見事に転んだ。

だけれどもリヴェアは見事に栗色の彼女を支えていた。仰向けに倒れながらも両手を突き出して感じる重みを支えている。衝撃で目

を瞑ってしまったが、それはそれで良いだろう。

「やるわねえ……白昼堂々、こんな通路の真ん中でまりもの胸を揉むなんて」

「冗談だろ」

「冗談ではないとばかりに襲ってきた頬の痛みを味わいながら、薄れ行く意識の中でリヴェアは冷めた視線を送る霞を発見する。その視線は「この変態が」とばかりの意味が籠っている気がして、余計にリヴェアの心を叩く。微かに共有されている意識ではデフォルメ霞がデフォルメリヴェアを何故かコップで殴打している姿が見える。涙目になっていたデフォルメリヴェアが「この大馬鹿野郎が」と言っていたのは気のせいじゃないだろう。段々視界が霞んできたリヴェアはどうやって霞のご機嫌を取ろうか悩みながら意識を落として

そんな事はさせんともう一度、今度は左頬に鈍痛が走る。

一気に覚醒した意識の中で顔が真っ赤に染まっている確か神宮司まりも軍曹だったか。彼女の髪にゴミが付いているのを発見する。お詫びに、という訳ではないがリヴェアは手を伸ばして紙くずのゴミを取る。

「~~~~~ッ!~!~!」

振り被られたグーの拳を避ける事も出来ず、その直撃を受けたりヴェアは走った痛みと共に意識を今度こそ落とした。

「あっはっはっはっはっ！！！」

バンバンバンとサイドテーブルを片手で腹を押さえながら、片手で叩いて大笑いする香月博士。対するリヴェアは紅く染まった頬に氷を当てながら「で？」と若干切れながらヒリヒリするもう片方の頬を氷で押さえる。

聞く所によると、意識を失った後も自分は神宮司軍曹に殴られ、もとい叩かれ続けていたらしい。どうりで見覚えの無い傷が増えている訳だ。

「いやあね。あそこまで乙女なまりもは初めてよ！良いもの見せてもらったわぁ……」

ツプ……と含み笑いしている香月博士にリヴェアは今度こそ上体を起こしたままのベットから立ち上がり「見てたなら止めるよ！」と柄にも無く大声を上げる。

「アンタ、その”計画”って奴発動したらもう二度と関係は作れないでしょ」

「……それで平和になるんだ。俺一人位の犠牲、黙認してくれ」

「どうでもいいけど私の計画を邪魔したらただじゃおかないわよ」

「安心してくれ、戦う為の知識なんて計画が発動すれば必要なくなる」

「……何やるつもりしてるのよ、アンタは」

疑うような視線を向けてくる香月博士にリヴェアは唯一言、言った。

「人類の意思統合」

歯車は静かに回り始めた。その歯車はたった一つ。リヴェア・ヴェネツチア。

Next Story . . .  
A man who cannot  
become the saviour

## Y o k o h a m a   b a s e (後書き)

なんかあっさりと投稿完了。さあて次に取り組むか。  
感想要望その他。何時も通りにお待ちしています。

自分の事を一番理解しているのは自分だ。だがしかし、自分を一番止められない物も、また自分なのではないのだろうか？

第九話

薄暗い照明。頬に当たる冷たさでリヴェアはそつと目を開けた。キヤットウオークの上に散らかった書類に毛布、コップ。徹夜で作業し、そのまま寝てしまったことがバレバレだ。これだとやってくる霞に何を言われるか分からないと急いで片付け始める。だが、手に取った書類の一枚に目を取られ手が止まる。

そこに書かれていたのはBETAの巢、ハイヴについて。天高く伸びる様に聳え立つハイヴには反応炉と呼ばれる場所が在りなどと書かれているがリヴェアの脳内に流れているは”あの存在”と対峙し消滅させた時に訪れた交信記録の様な物の事。もしかしたら、”あの存在”と交信していたのがこの反応炉かもしれない。

流石に早計過ぎたな・・・。バツが悪そうにボサボサになっている髪の毛を掻いたリヴェアは書類をまとめファイルに挟んだ後、畳んだ毛布の上に放り投げる。兎の仮面は着けていない。別に重大な理由が在る訳ではない、唯単に霞が真つ二つに押し折ってしまったのだ。香月博士曰く、一人前の軍人でも折るのには苦戦する素材をしようしてるとの事だったが、煎餅を折るようにパキッと割れてしまった。

これにより仮面は二分の一。半分になってまで着ける気もしなか

つたので破棄、代わりに目を覆う黒いバイザーを受取りそれを仮面代わりに着けている。だが、見え辛い事この上ない。視界の大半が黒に染まり尚且つ光が差していない所等は真つ暗だ。

バイザーを目から外したりヴェアはコックピットの中に身を落とす。イオリアが画いた計画を遂行、完遂するにはBETAの駆逐が必要事項だ。そして、香月博士から聞いた話によると反応炉を破壊されたハイヴは文字通り”死ぬ”らしい。ならば、圧倒的な力でハイヴを全て破壊、後にBETAを駆逐していけば計画の土台は整う。

コンソールを叩き先日of BETAのデータを出す。全長は約20m。一時的にだけでも擬似太陽炉二基搭載機を押さえ込むほどの力。背中の羽での飛行能力。口からの高密度レーザーの照射。自己再生能力、そして戦術レベルでの自爆。だが、リヴェアには気がかりな事が一つあった。確かに初めて戦った時と二度目の戦いの見た目は同じだった。

しかし能力の違いは明らか。一体目はレーザーなど撃たなかったし、自己再生能力も無いように見えた。一体目と二体目、共通しているのはパワーと体格、飛行能力くらいだ。ならば別種なのか。それとも単に能力を隠していただけなのか。

その呟きに答える様に格納庫に声が響いた。

「別種じゃないわね。アレ」

「同種、だと？」

「そ。学術名はEvolving thing(進化する物)、俗

称はMantis・・・ぶつちやけ螳螂の意ね」

なげやりに答えながらキャットウォークに寄り掛かる香月博士は一枚の紙をリヴェアに渡した。その紙には独自の進化系を持つBE TA、進化級ネクスTの考察。と書かれており、一番下の行には進化級は進化級同士のネットワークを所有し、戦闘データを共有、独自に進化している可能性がある」と書かれていた。

だとしたら・・・

「・・・アンタの考えてる通りよ。調査班が完全に進化級を焼却したけど戦闘データは多分とつくに共有されてるわ」

「戦えば戦うほど強くなる。か」

「提唱された対処方法は一つ。共有される前に消滅させる事。これが進化を止める方法よ」

「要するに一撃で仕留める、と」

「そーゆーことね」

他人事なのかケラケラと笑う香月博士の後ろをコックピットから出たリヴェアは通り過ぎてキャットウォークの昇降台にに乗る。リヴェアが「置いてくぞ」という前に乗り込んだ香月博士に溜息を吐きながらも装置の下降ボタンを押した。

時刻は既に昼時。格納庫のロックをし終え、香月博士と別れたり



ヴェアは通路のど真ん中で水色の髪を纏めた女性に指を突きつけられていた。理由は怪しいから。否定できなかったリヴェアだが今回は違った。香月博士から渡された仮の身分証明書、それを持っていたのだ。

「ッ!?・・・怪しいわね・・・偽物なんじゃないの?ソレ」

「確認をとってもらっても構わないが」

「大層な自信ね。まあ良いわ。今回は、今回は!見逃してあげる。別に臨時大尉つてところを見たわけじゃないんだから」

「そうか」

「じゃあ、わたしは行くからさっさとそこ、退いてくれない?」

「退いても良いがこの通路の先は機密区画だから行き止まりだぞ」

「・・・」

面白い奴だなあ。とリヴェアが呟くのど女性が「間違ったわけじゃないんだからあッ!」と言いながら身を翻し、来ていた道を走って引き返したのはほぼ同時。あつという間に奥に消えた女性を見るとリヴェアは再び面白い奴だ。と呟いた。

「あ、水月に会ったんだ」

「水月？」

「うん。一言で言うと面白い子」

「会ったな」

やっぱり？笑いながらお茶を啜る涼宮に身分証明書を見せる事で返事をしたリヴェアは手元のコップを手に取り、口に運んだ。軍属になるなど真つ平御免なりヴェアだったが、軍の基地で真つ黒なバイザーを見かけて素通りする軍人は存在しないと香月博士に告げられ、仕方無しに一時的な軍属になった。

「……あゝ大尉さんだもん。というかわたし敬語にした方がいいかな？」

「好きにすると良い。俺は気にしない」

「じゃあこのままで」

「そうしてくれ」

敬語は苦手なんだよ肩を竦めながら答えたりヴェアに涼宮は笑った。

「てつきり関係は築かないと思っていたんだけど」

「言っただろ。変わる、変わってみせる。俺はな」

香月博士のデスクの上に乗っていた書類の一枚を手にとって目を通す。世界の各地に散らばるように分布しているハイヴ。それを叩き、破壊する為にリヴェアが提案したのが超高高度、宇宙空間からの狙撃。擬似太陽炉とGNバスターランチャーを直結させ尚且つ二丁を一丁に結合させれば威力を減衰させる事なくハイヴに着弾、地面を抉り取る事が出来るだろう。そして抉り取ると同時に地上戦力を随時投入。その間に他のハイヴへと狙撃、戦力投入を繰り返せば現存するハイヴは全て落とせるだろう。

だが、その提案に香月博士は首を横に振った。理由は聞かなくても分かっていった。軍の上層部は絶対にこの作戦を許可しないだろう。理論で、機体の性能を説明しながら作戦を説明しても、だ。

「お偉いさんは耳だけじゃ駄目よ。目でも証明しないと」

幽霊と同じなのだ。口で説明しようとも、それを裏付ける映像を見せたとしても俄かには信じられない。自分の目で見なければ納得できないのだ。自身が重大な立場にいるのであれば尚更の事。

「公開デモンストレーションでもやれと？」とリヴェアは書類を投げ捨てソファにどっかりと座る。確かに、機体の性能を老眼共に見せ付けければ性能を理解させると共に機体にガンダムに恐怖の念を覚えさせる事も出来る。この二つはリヴェアにとってプラスに働くが、本人は余り乗り気じゃなかった。

もしも、もしも早い段階で、BETAを駆逐する前に老眼共がガンダムに攻撃を開始するのをリヴェアは心配しているのだ。その行動を抑止する為に偽りの忠誠を帝国様に誓っていたリヴェアだったが、悪魔でも抑止できるのは帝国のみ。他の国までは抑止効果は付

かない。

この世界の歴史には米国がG弾と呼ばれる広範囲殲滅兵器を使用し戦地をBETA、戦術機諸共一掃したと聞いているしその兵器が機体を破壊する為に使用されないとはい切れない。だからこそ秘匿し、公の場には出したくないのだ。とつくの昔に帝国の重鎮たちに披露してしまったが。

兎にも角にも計画遂行の為に早い段階で人類がガンダムを破壊する行動に出させない為にも公開デモンストレーションは出来ないのだ。しかし各地に散らばっているハイヴを確実に、効率的に潰して行くのには各国の協力が必要不可欠。

手詰まりだよとリヴェアは手を上げて背凭れに倒れ天井を眺めた。自分自身で破壊して周る、という手もあるが体力が持たないだろう。なによりも限りなくオリジナルに近いGNドライブ【T】とはいえ、一度に使える粒子など底が知れている。

「……時を待ちなさい。私はずっとそうしてる」

「……まだその時ではない、と?」

「そ、今は準備期間よ」

時を待て。と香月博士は言う。確かに急いでいる訳じゃない、かといつてのんびりとやりたい訳じゃない。リヴェアは再び天井を眺めた。

突き出される刺突。相手の模擬刀の刃に沿わせる様に刃を置き鏢と鏢がぶつかり合った所でそのまま体を回転させて下段回し蹴り。見事なまでに対処できず、地面に向かって顔面から落ちていった少女、築地 多恵を心配するリヴェアは声を掛けた。

「大丈夫か？」

「……だ、だいじょぶ……です」

よろよると、そして若干涙目になっている築地にリヴェアは訓練終了を告げる。先程から模擬刀を使って近接戦闘の基本を教えたのだが、築地は正直に言って近接には向いていなかった。触れた時に筋肉が小さく痙攣していたし、動きに無駄が在り過ぎる。剣を使っているのではなく、使われていると言えるだろう。

ただし状況の判断能力は低くない。むしろ高いほうだろう。少し寝不足だったリヴェアの覚束無い足を狙ってきたのが良い証拠だ。

向いているのは後方からの支援か……。とリヴェアは手元のボードに書き込んでいく。神宮司軍曹から頼まれ事で訓練生の面倒を見てやって欲しいと言われた時は少々倦怠感を覚えたが、中々やってみると面白い。元々何かを分析、解析するのは得意だったし、あの意味では天職なのかもしれない。

次で最後の訓練生。名前は

「御剣冥夜？」

「ハッ！」

覇気のある声と共に出てきたのはこの基地から脱走するとき遭遇、不意にとはいえ冷や汗をかかされた。特徴的な髪型に深い青の髪色。キリツと釣り上がった目尻。見間違える筈も無かった。

「よろしく、お願いします」

「……ああ」

何かを確かめる様な目をしている彼女にリヴェアはどうしたものかと頭を掻いた。

Next Story . . . Mitsurugi meiya

A m a n w h o c a n n o t b e c o m e t h e s a v i o u r

恥ずかしいな。GWは明日からじゃないか！！ゲーセン三昧だったのは事実だけど。まさか、俺勘違いして三日間も休載しちゃったのか！？

うわ恥ずかしい！これは恥ずかしい！！やっぱいわ。すいません皆さん。これから三日間の分取り戻す為に頑張りますね。GWも休載しないで載せていきますんで、許して！！

感想はユーザーじゃなくてもカキコできるので、バンバンかいちゃってください。

## Mitsurugi Meiya

人の夢と書いて、儂いと読む。これは、一種の皮肉なのかもしれない。

### 第十話

弾く、弾かれる、突き出す、弾かれる。正直に言つて、此処まで持った相手はリヴェアの記憶の中には居なかった。痺れを切らして両手、両足を使って戦っているというのに全てを守る、それどころか隙を狙つて的確に急所を狙う。間違いなく訓練生の中では身体能力はずば抜けているだろう、この御剣冥夜は。

だが、それでも幾年も戦いの場に身を置いていたリヴェアの相手ではなかった。意識的に作った隙を狙おうとし、振り下ろされた模擬刀を蹴り上げ、木のナイフをピタリと御剣の首に当てる。これで勝負は決まった。

「はぁ……はぁ……ありがとうございます、ございました」

「……ふむ。お前は完全に前衛向きだな」

ボードに書き終ると解散の指示を訓練生全員に与える。水分補給に向かう訓練生とは反対側、神宮司軍曹が立っている場所へと足を運んだリヴェアは背筋を伸ばして敬礼している軍曹に思わず苦笑し



た。それはそうだろう、彼女は軍曹、リヴェアは臨時だが大尉。こういうのが苦手だから身分証明書を手から提げていないというのに。

止めてくれとリヴェアは溜息混じりに言うと地面に腰を下ろした。ボードの内容を確認するためだ。しかし、手にあつたボードは何時の間にか軍曹の手に握られていた。見上げてみると、軍曹と目が合う。その目は「自分がやります」と物語っている。

最近はこのだ。皆が皆リヴェアに気を遣う、だが本人にとっては良い迷惑なのだ。運動がてら、戦術機とは何かを知る為に整備を手伝おうとすれば訓練生に引き戻され、食器洗いでも手伝おうかとすれば涼宮に連れ戻される。曰く、大尉としての自覚を持って欲しいとの事だったが、軍属を嫌うリヴェアだ。簡単にハイとは言えない。

機体の整備でもしておくか・・・とリヴェアは相変わらず敬礼している軍曹に投げやりな敬礼を返し、重い足取りで格納庫を目指した。

機体の足元に頬擦りしているピンク髪の少女を見てリヴェアは本気でそろそろ疲れているのかもしれないとこめかみを押さえた。機密として扱われている筈の機体。当然その機体が収納されているこの格納庫はかなり高いレベルでの立ち入り禁止令が出ている筈だ。いや、待て。もしかしたらあの少女は見かけによらず、階級が高い人物で、尚且つ基地内の位置付けが高い人物なのでは？

「はわっ！？い、急がなきゃ訓練におくれちゃう！？」

撤回。訓練生だった。

はわはわ言いながら彼方此方を走り回り、キャットウォークに顔面衝突。鈍い音を立て、「ふぎゅ」と言いながら倒れていった訓練生に近づいたリヴェアはツンツンと目が回っている訓練生の頬を突付く。起きそうに無い。それもそうだろう、あそこまで綺麗に顔面にヒットして気絶していないのはおかしい。

プニーと頬を引っ張ったりリヴェアは面白げに笑うとピンク髪の訓練生を背に抱えて格納庫の出口近くに寝かせると徹夜用にと用意していた毛布を掛ける。PXにでも送る、という案もリヴェアの頭に浮かんだが、暫く機体のシステム面のチェック、FCS微調整、間接部分の点検、擬似太陽炉の同調などやる事もあるし、時間は無駄にしない為に寝かせる案を選んだ。

キャットウォークに乗ったりリヴェアは書類に目を通しながら昇降装置のスイッチを押す。機体の首元まで上がった後に停止した装置から降りると機体の肩に足を踏み出して肘の擬似太陽炉へと向かう。外面は殆ど問題は無い、出来れば一度コンデンサーから取り外して本格的な整備をしておきたいがこの世界の技術じゃ数百年経っても無理な話だ。

今度は肘の間接部分に目をやる。一見すると大した事は無いが、だからといって無理は禁物だろう。GNバスターランチャーの使用には注意した方が良くかもしれない。肘部分に設置されているキャットウォークに降り立ったりリヴェアは機体の正面を周って今度は逆の擬似太陽炉を調べる。こっちも大した事は

両腕の間接点検、擬似太陽炉の点検作業一通りが終わり、機体を

よじ登ると首元のコックピット入り口に身を落とす。システムを一部起動させて予め戦闘中に懸念してた箇所をモニターに表示させ、その箇所を確認したリヴェアはコックピットから出た。手始めに一番近い頭部のメインカメラ。戦闘中に一瞬黒い影が映ったので気になっていたので。

その原因は風で飛んでいたゴミが付着しただけの様だった。確かにモノアイに小さなゴミが付いている。それを除去し、頭部から離れて機体の胸部へと向かう。GNフィールド発生装置でもある胸部の中央に位置しているクリスタルの様な物。物量で攻めてくるBE-TAを近づかせない為に多用しているフィールド、念のために調べてみたのだが、特に異常は無いと見られる。

取り敢えずは外部の簡易点検はこれで終了。またコックピットを目指そうとしてキャットウォークの昇降装置の操作していたリヴェアだが、静かだった格納庫に響いた甲高い声に作業していた手を止める。言うならば「きゃうっ!!」だろうか。気持ちよく寝ていたは良いが、突然頭の上に誰かがいる気がしてハッと目が覚めた。そんな感じの声だ。

何事かとリヴェアは格納庫の入り口付近に視線を向ける。何故か固まっている霞とピンク髪の訓練兵。視力は良いのでそこまでは確認できたリヴェアだったが流石に聴力までは良くない。ちよつと一般人よりも良い程度の物なので会話は聞こえない。だが、霞との意識共有によって彼女が何を言いたいのかは十分に理解できていた。

と、リヴェアが何を話しているのだろうかと見ていると唐突に霞が指をキャットウォークにいるリヴェアに向ける。次に格納庫の入り口に書かれている『機密区画』と書かれたプレートに手をやる。自分の今の現状を理解したのか大きな声で「すいませんでしたあつ

「！」と叫ぶと同時に立ち上がり頭を下げる訓練兵に思わず口角が吊り上ってしまったリヴェアだが良いよ、良いよと手を振る。

どうせ計画が発動すれば憎しみ、悪の象徴になる機体だ。それに機体に頬擦りする少女なんて見たことも無いし、行動も笑える物ばかり。到底悪に属する人間には見えない。

<霞、彼女と一緒に作業を手伝ってくれないか？>

<はい。リヴェアさん>

目を瞑れば淡く光る白い空間にいる霞へと話し掛け終わるとリヴェアは昇降装置に足に乗せた。

「はわあゝ……………」

「……………頼むから涎を拭いてくれ」

口元から垂れ始めている涎にoh……………な顔を拭えなかったリヴェアはポケットから取り出したハンカチで口元を拭くとキャットウォークの上に投げる。後で回収できるし、今はシステムの微調整を始めなきゃならない。今の段階は一時的なツインドライヴの調整、同調をしている。GNDドライヴを起動させるために格納庫の正面扉を開けなければならぬのだが。

モニター越しに見える隔壁がゆっくりと開け放たれていく。ドアの開閉スイッチの近くには既に霞がいた。恐らくだが意思を読み取

つてくれたのだろう。こつち向かつて親指を立てている。それを確認したリヴェアはモニターに出ている『GUNDAM NUCLEUS TWINDRIVE Lady』の文字に答える様にコンソールのエンターキーを押した。

耳を澄ませば聞こえてくる耳鳴りのような高い音を出して擬似太陽炉が動き出す。紅い粒子が奔流となつて格納庫を飛び出すのがモニターから確認できたが、リヴェアはまだ出力を上げていく。出力限界点まで到達しようとしていた正にその時だ、機体が紅く発光し始めたのは。現在はメインシステムとツインドライヴシステムしか起動していない為、白い筈の機体が薄い紅に染まっていく。

リボンズ曰く、覚悟があるならば作動するシステムらしいがまったく理解できないシステムだ。とそこでリヴェアはGNDドライヴの粒子生成を止め、キャットウォークに乗っかっているハンカチを手を伸ばして取り、コックピットの座席後ろで涎を垂らしている訓練兵、珠瀬 壬姫の口を拭いた。

「申し訳ありませんでした!!!大尉殿!!!!」

「……いや、そこまで頭下げなくても……」

三つ編みに眼鏡が特徴的な訓練兵が頭が足の爪先に着いてしまい

そんな位に下げているのにリヴェアは良い感じを覚えなかった。こっちから手伝ってくれと頼んだんだし、機密区画に入った事はまあ、大した事じゃない。そう言ったら眼鏡の訓練兵は驚いていたが。

「手伝ってくれって頼んだのは俺だから、気にしなくていいよ」

「しかし!」

「いいんだよ」

「……はい」

納得いかない、と言った具合の顔をしている訓練生の肩を数回叩いたリヴェアは「力、抜いた方がいいよ」と告げると通路を歩き始めた。敬礼をする音が聞こえたが、リヴェアは敢えて無視した。

「あ、あの!また……その」

「ああ、手伝ってくれと助かるよ。香月博士には俺から伝えるから」

「あ……はいっ!」

珠瀬 壬姫。確か、射撃、狙撃系が得意の完全な後方バックの訓練兵。名前で多少頭に残り、軍曹に頼んで訓練のデータを見せてもらったが、訓練生である命中率、狙撃能力は一目置ける。御剣は一線を凌

駕した近接特化、珠瀬は狙撃特化。専用のOSでも用意すれば恐らくEーS級に成長してくれるだろう。最も、訓練が完了し、最後の試験をパスするまで戦術機には乗れないらしいが。

まあ、作って置いて損は無いか・・・とリヴェアが考えていた時だ。コップを握っていた自分の体に影が差す。見上げて見れば、蒼い髪を揺らして佇む御剣冥夜がそこにいた。

「少しよろしいですか」

「・・・断つても、駄目そうだな」

いいよと立ち上がったリヴェアは御剣との間に流れる空気に寒気を感じたのか、あわあわ言っている珠瀬の頭を撫でると御剣をPXの出口へ促した。

「無礼を承知で聞きます」

目の前の大尉は冥夜の言葉になんだい？と答えた。正体不明の男、突然新型の戦術機を操って現れたこの男は何時の間にか大尉となり、偶に訓練の相手をしてかれている。だが、一度手を合わせた冥夜には分かっていた。この男は前に脱走し、敗北を味合わされた人間だ

と。その言葉に大尉は何も答えない。

夜風に髪が揺れる。冥夜は自身の髪を抑え、目の前の大尉を睨む。しかし、異変に気付いた。目の色がおかしい。先程までは紅い瞳だったのに今では形容しがたい色をしている。常に光っている瞳が冥夜を射抜く。

「その目は……」

「俺にはやるべき事がある。それを遂行する為にはどんな方法でも使う。御剣訓練兵、君は？」

「私には……守りたいモノがある。絶対に、守りたいモノが……」

「それがあただけ、君は立派だ」

「大尉には、ないのか？」

「在るさ」

それは　　なんだ？と冥夜の声がグラウンドに響き、浸透していく。大尉は光る瞳を閉じて恥かしそうに頭を掻く。そして

「　　未来を守りたいんだ」



Next Story . . . Special SOS

Mitsurugi meiya (後書き)

さて、どんどん行こうか!!

次は番外編と第十一話を書こうと思ってます。番外編は何書けば良  
いか分からんけど。

では、今日投稿予定の番外編 2 にてお会いしましょう。

守りたい物、大切な物が見つかってないって？じゃあ探すと良い。何でも良いんだ、目の前にあるノートでも良いしそこら辺に落ちてる石ころでも良い。大切、その気持ちが持てればもう君は一人の立派な人間だ。

第十一話

カーテンが防げなかった日光が目蓋を刺激しリヴェアは目を開けた。映るのは天井、そして何故かいる香月博士。「起きなさい」と彼女はリヴェアに告げるがそれを寝返る事で拒否する。久々に割当てられたベットで寝る事が出来たのだ。幾ら香月博士といえどもハイと言って従う気はこれぽっちも無かった。

掛けていたシーツを剥ぎ取るという究極の方法をこんな早場でやっつけてみせた香月博士ははやく起きるとペンの先端でリヴェアのこめかみをグイグイ押す。その行動を止めてくれとばかりにリヴェアは手を払った。

「  
いいいから起きろって言うてんでしょ!!!」

数分後。リヴェアは自分のベットの上に座っていた。頬を赤く染

めて。決して恥かしさから来た物ではない。物理的なダメージから来たモノだ。昨晚まで着ていたシャツは洗ってくれる、との事だったのでおばちゃんに預け、今は横浜基地の軍服 ではなく、着易い様にカスタマイズした軍服を着ている。

香月博士がここにいるということは例の提案が通った、ということだろう。現存する不知火機の改造、及び強化プラン。戦術機に適したOSの再構築。昨晚香月博士に頼んで乗った戦術機のシミュレーターは最悪の機動性、操作性だった。あれでは生き残るところの話じゃない。そこでリヴェアが提案したのが操作性の向上を目指す為に作る汎用OSの製作。

そして一般兵とは違い、突出した能力を持つパイロット、こつちの世界では衛士の為に能力を最大限に活かせるOS。謂わばスペシャルOSの製作をリヴェアは香月博士に提案した。

もう一つ。現存する不知火機の改造、強化。高機動を実現する為に管制ユニットを排除。モニターを付けて、コックピットに近い物を作る。システムも根本から覆し、射撃、格闘、移動、跳躍、全てマニュアル操作に切り替える。コンピューターが処理するのは機体情報と損傷具合、システム。最後に緊急機体制御。

これにより限りなく柔軟な動きが可能になるが、同時に搭乗する人間の技量が問われることになる。

「不知火をアンタの機密区画に二機、運んどいたわ。言っとくけど、失敗したら不知火諸共BETAに突っ込ませるわよ。生身で」

「冗談だろ？」

キヤットウオークに立ったりリヴェアはガンダムの正面に佇んでいる機体に目をやった。出っ張った肩、全体的にスリムな形状。スペックや武装その他を見せてもらったが、あの細い腕じゃまともな武装を使えないだろう。機動性は上がっているみたいだが。

取り敢えずは

機体の分解から始めなくては。

ジョイントされている部分を手早く外していき、ぶら下がっているワイヤーに吊るして行く。両手、両足。スペックに書かれている平らなミサイルの様な跳躍ユニットも邪魔だから取り外し。頭部も外して吊るす。これで残るのは胸部と腰のアーマーのみ。此処から更に装甲を取り外して内部の管制ユニットその他を排除。これでやっと土台が出来上がる。

新型のコックピットは従来の物を使用する。問題なのは胸部の基礎。戦術機を利用しても良いが、それでは特機として意味は無い。そこでリヴェアが香月博士に求めたのは既存している複数の戦術機装甲を複合し、本来の戦術機よりも遥かに高い強度を誇る装甲。

各地の製造ラインに手を回して持って来た各地の装甲を精密な計算の下、複合開始。出来たのが『M・C・A (Multi purpose compound armor)』。計算していた強度に達していないが、それでも充分だ。

次は両腕。精密な制御を可能にする為にガンダムのマニピレーターの劣化版を取り付ける。指の一本一本に胸部に通じるラインを作り、光ファイバーケーブルを通す。

最後に両足。腰のサイドアーマーに取り付けて使用する跳躍ユニットを廃止、脚部の中に取り付けられればサイドアーマーに武器でも搭載できるようになるだろう。問題は、跳躍ユニットの小型化。と言っても、派手に空高くジャンプする訳じゃない。放出時間は最低限、出力を上げれば瞬間的に驚異的な加速を手に入れられる。

放出が小さいのだ、小型化も簡単。こうして出来たのが『M・A (Momentary accelerator)』だ。これを脚部の脛脛に取り付け、地面に向けて穴を開けた装甲で覆う。

これらの準備、製造に掛かった時間は二週間とちよつと。二週間掛けてやつと骨組みが完成した。後は腕部、脚部を装甲で覆いえば大体は完成する。残された作業は武装の開発と頭部の改造。頭部には各種センサーを装備させ、尚且つ目の部分にカメラを付けるだけだから、簡単な作業で終わるだろう。

とリヴェアがこれからの作業を香月博士の計らいで設置されたコンピューターで整理していた時だ。大きな音を立てて格納庫の正面隔壁が開放される。なんだ？とリヴェアが視線をそちらに向ける前に、大きな声が格納庫に響いた。

「リヴェア！どこにいるの！」

「……頼むから大きな音を立てないでくれないか？それに、なんで正面の隔壁から入ってくる？普通に通路から」

「そんな事はどうでもいいの。それよりも、興味深いじゃない！この不知火は！」

香月博士は早足でリヴェアの元へと歩み寄ると手に持っていたス

ペックボードを奪う。何か言おうとしていたリヴェアだったが諦めてキーボードを叩き始めた。

「……なるほど。この段階でこれだけの……でも動力源はどうするわけ？」

「S-11を流用する」

「はあ！？……アンタ、ばっかじゃないの！？大体、S-11は」

「自爆用。だからこそ驚異的なエネルギーがある」

「~~~~つ……はあ。まあ、いいわ。アンタにまかせる。好きにやんなさい」

「ミスったら悪いな」

「……ミス？」

エネルギーを凝縮するのに十分な機材があるとは言えないが、なにも凝縮しなければならぬ、なんて事は誰も言っていない。S-11を臨界寸前まで追いやり、そこで固定できればエネルギーとしては充分だ。後は各部のラインと接続、エネルギー供給を確認できれば問題なし。どうしても自爆したいのなら臨海寸前のS-11を暴走させれば数秒で地形を変える爆発を起こせるだろう。

そして、S-11の爆発を押さえる為にリヴェアが作ったのは「SELF-DESTRUCTION-SYSTEM Canceler」。S-11の 簡単に言ってしまうえば爆発をキャンセルし続けるこのシステムは自由にON、OFFを切り替えることが出来る。もつとも、OFFにしたら爆発するが。爆発した場合も考えてある。メインカメラを搭載している頭部と、コックピット以外を失う。が、生きられるのだから文句は言わないでもらいたい。

この新しい動力源と、システムを一緒に腹部に搭載、脚部のM・A、頭部、コックピットを載せる予定の腹部にラインを作る。これで大体は出来上がった。

後は能力特化のOSを作り、それを処理できるコンピューターをこれまた各地から取り寄せたパーツで構成、八割方出来上がっているコックピットに取り付け、配線し、座席、操縦桿、コンソールその他を取り付けてようやく完成する。

これまでに要した時間は一週間。掛かりすぎた気もしなくはないが、システムキャンセラーに時間を取られてしまったのだ。仕方が無い。

次にリヴェアが取り組んだのは武装の開発。従来の武器を使っても良いが、せつかく機動性、操作性、精密性が格段に上昇したのだ。実体剣を振り回すのは芸が無い。元々、二機ある内の一機を近接戦闘用に、もう一機を超長距離狙撃用に開発しようと考えている。新しい武器は必要だった。かと言ってなにかアイディアがある訳じゃない。

「武装、武装。武装……か」

近接、と聞いて浮かび上がるのは剣しかない。逆に狙撃と聞くと



大型のライフルしか思い浮かばない。と、ここで香月博士から面白い話をリヴェアは聞いた。どうやら、今開発中である試作1200？超水平線砲なるモノが存在するらしい。それを逃す手はないとリヴェアは香月博士から試作1200？超水平線砲の開発、設計データを入手した。

しかし、流石に開発中のせいか実用性に欠けるスペック。装弾数は五発なのに対して三発で銃身が焼けるらしいのだ。だが、丁度良く不知火の装甲に利用したM・C・Aが在る。そこでM・C・Aを使い新たに銃を設計、持ち運べる重量までに減らし装弾数も増加させる。同時に頭部のメインカメラとリンクさせれば精密な狙撃が可能になる筈だ。

使用弾丸も変更。弾頭に小型化したS-11を仕込めば火力増加を見込めるだろう。S-11を使用した弾頭と、通常の試作1200？超水平線砲で使用されていた弾丸を使い分ければ戦術機としては問題ない。

近接用不知火の武装も決定した。既存する実体剣である、74式近接戦闘長刀を改良、改造した物を使う。剣の素材を従来物からM・C・Sへと変更。片刃型を両刃型に変更。剣内部にラインを走らせ、手のジョイントに合わせる事でラインと動力源を直結。エネルギーを刃に浸透させて驚異的な切断力を実現できる。

名は00式近接戦闘長刀。狙撃銃は1200？超水平線砲・改。安直なネーミングだが、名前に意味は無い。特に悩まずに決めたりヴェアはコップを片手にキーボードをリズムよく指で叩く。製作しているのは能力特化OS。狙撃型はセンサー、機体情報整理、目標距離算出、処理速度などを強化した完全な遠距離タイプ。

近距離戦闘用は狙撃型と同じく機体情報整理、緊急時機体制御、マニピレーター制御円滑化などを重点的に強化している。汎用OSは後でも良いだろう。近距離用と狙撃用のOSを組み立てたり、エアは静かにエンターキーを押す。処理中と表示されたパソコンのモニターから目を離し、立ち上がって組み立て途中の新、管制ユニットへと足を運ぶ。

狙撃型と近接型の管制ユニットはまず形が違う。通常操作時は二つとも同じ、左右の操縦桿で操作するが狙撃型は狙撃時にコックピット上部に位置する場所に在る狙撃ユニットを使って狙撃する。引き金と連動しているトリガーに覗く為のスコープ。降ろしてスコープを覗き、コンピューターが補助の元、狙い撃つ。

近接型は基本的には変わらない。だが、中々面白い機構を搭載している。柔軟性を手に入れた為、新戦術機は宙返りなど余裕で出来るようになる。その時の為にリヴェアが作った機構が機体とコックピットを連動して回る物を採用し、例え機体が宙返りしようともコックピットは水平のまま。コックピットで酔う事はなくなった。

そして、9月中旬。機体完成。

「アンタ、直ぐにこれを量産しなさい」

「無理だ」

興奮気味の香月博士の一言を眠たげなりヴェアは一蹴した。無理に決まってる。これは特機、突出した能力があるからこそ操れる謂わば専用機だ。用意してもらったキャットウォークに囲まれている二機の戦術機、不知火。もとい『試作戦術機 不知火 近接特化型』  
『試作戦術機 不知火 狙撃特化型』

戦術機というよりも、MSに近い設計をしたせいかな不知火だと判断できるのは頭部だけだ。元々のフォルムは消え、スラツとながらも力強さを感じさせる腕部、脚部。胸部に開いたコックピット。出っ張っていた肩の部分は削り両肩に突出型リーダーを装備した不知火はメインカラーを白、間接部分を赤に塗装されている。

恐らく、この機体と現存する不知火と戦わせたら何も装備せずに勝てるだろう。それほどまでにパワーが違う。ガンダムには勝てないが。

「で？この機体はどうするわけ？」

「近接特化型は未定。狙撃特化型は訓練生である珠瀬壬姫を乗せる」

「珠瀬……なるほど。納得できるわ。でも、まだ訓練生よ？」

総合評価試験に合格できるとも限らないし……と呟く香月博士にリヴェアは「だからこそ、この機体を見て頑張ってもらおうのさ」と笑った。

「あ、そうそう。先進戦術機技術開発計画って知らないわよね？ア  
ンタは」

「知るわけがないだろう」

「通称プロミネンス計画。まあ、簡単に言っちゃうとみなさんと協力し合って強い戦術機を作りましょう。ってな感じの計画なんだけどね？アレ、潰れたわ。アンタが新素材生み出したせいで」

「……データを提出したのか？」

「アンタの物は私の物。私の物は、私の物」

答えになってないじゃないか！とリヴェアは声を荒げる。何の為に機密区画で毎日作業していたと思ってるんだこの白衣は。リヴェアにとって作り出したこの二機は人類意思統合計画の要。設計データ、武器データも時を見計らって香月博士に渡し、世界的優位を獲得できる様に計らおうとしていたというのに。

そんな必死なリヴェアを笑い始めた香月博士は

「安心しなさいよ。こんな物を開発中です、って言っただけよ。後新型も造ってるって」

「それが一番駄目なんだ！」

「大丈夫よ。私を誰だと思ってるのかしら？『魔女』とまで言われた」

「人のデータを勝手に開示した大馬鹿野郎」

「……」

数分後、リヴェアの頬は赤に染まっていた。二度目だが、もう一度言う。決して恥かしさから来た物ではない。

Next Story . . . Training begin  
ing

## Special OS (後書き)

オリジナル要素

『多目的複合装甲M・C・A(Multipurpose compound armor)』  
『瞬間的加速装置M・A(Momentary accelerator)』  
『SELF-DESTRUCTION-SYSTEM システム Canceller』  
ヤンセラ

五月五日、三時ちょっと。指摘部分修正、その他修正、文章追加、次話タイトル修正。

## Training beginning

歯車を廻そう。

## 第十二話

「宇宙空間に対応してる？」

その通りとリヴェアはコップを口に運んだ。PXの席の一角。正面に座る香月博士は何か考えると立ち上がった。

「まさか、例の宇宙空間からの狙撃を考えての事かしら？」

「まさか」

確かに気密ブロックだから酸素さえあれば宇宙空間からの狙撃が可能だ。しかし、それも酸素があればの話。二酸化炭素を吸い取り酸素を生成する機能が付いているガンダムではない。酸素が無くなれば窒息死まで一直線だ。いや、途中で酸素不足による苦しみが待ってるな。

リヴェアはと、いうことだ。と肩を竦めて笑う。元々、宇宙空間まで適応させる気は無い。問題は山ほどあるのだ、狙撃にしたって途中で弾が大気圏の熱で燃え尽きるのが目に見えている。それに幾ら改良、改造したといえども地球の重量を振り切れる保障は無い。シャトルで打ち上げるのも手だが。

「そういえば・・・アンタ、まりもに言って訓練兵のメニュー追加したみたいね。私には関係無いけど、キツくしたら嫌われるわよ

」  
手を振りながらPXを出て行く香月博士を見送ったりリヴェアは空になったコップをテーブルに置く。

「 必要なのさ。俺の計画に彼女たちは、絶対に」

太陽が雲で隠れているその日の午後。PXで休憩と昼食をしていた訓練兵、もとい珠瀬を捕まえたリヴェアは問答無用で機密区画に連れてきた。途中で何かにぶつかる音がし、「わきゅッ!!」と聞こえた気がしたが、気のせいだろう。

機密区画に鍵を差し込んでドアを開けたリヴェアは目を回している珠瀬を膝を着き、待機状態の不知火 狙撃型の足元に寝かせると正面の隔壁を開ける為に手元のキーボードを叩いて隔壁を操作する。

音を立てて開放されていく隔壁を確認すると珠瀬の頬を二、三回叩く。まだまだやる事があるのだ。性能をチェックしたら次は近接型のデータを取って最終調整、狙撃型は搭載している射撃管制の調整。さっさと起きて貰わなくては。

「うん……はっ！り、リヴェアさぁん……痛いです」

「どこかぶつけたのか」

「後頭部を思いっきりリヴェアさんのブーツに……」



「……………ああ」

「……………ああ。ってなんですか!？」と騒ぐ珠瀬に香月博士から強奪もとい奪ってきたパイロットスーツ、ではなく強化装備を投げると歓喜の声を上げて飛び跳ねている珠瀬を叩き、着替えを促す。リヴェアはガンダムのキャットウォークに上ると、コックピットに腰を下ろしてコンソールを叩く。この日の為にわざわざ地球の重力振り切って衛星軌道上に大型の鉄屑を置いて来たのだ。センサー付きで。

建設途中の何かがあったが、それは無視した。興味を引くと言えはそうだが、今は関係無いのだ。

モニター一杯に表示されたウィンドウを操作、鉄屑のデータを出して待機させる。

ガンダムから這い出ると、今度はキャットウォークを使わずに機体を辿って地面に降り立つ。そのまま早足で手に持った小型の情報端末を弄りながら近接型に向かう。胸部が開いたまま待機している近接型に乗り込み、座席の後ろに回っていたコンソールを正面に引っ張ってデータ入力を開始する。ともかく人手が自分一人なのだ。霞に手伝ってもらっても良いが、彼女に負担は強いれない。

データ入力が終わわり、機体をハッチも閉じずに動かす。キャットウォークは事前に取り外しておいたから問題は無い。格納庫から機体を出し、地面に膝を着かせて待機。次は　　トリヴェアが狙撃型に向かったときだ。機体の足元から珠瀬が出てきた。何故か肌にピッタリ着いている服を着て。

「……恥かしくないのか？」

「にゃっ!?!」

まあいいやとリヴェアは呟き、さっさと乗るように珠瀬を促した。しかし、

「あのー……わたし訓練生なんですけど……」

「これも訓練の一環……という設定にしておこう」

設定なんですかっ!?!と叫ぶ珠瀬の首根っこを掴んだリヴェアは早く乗れと狙撃型の座席に放り投げる。生唾を飲み込んだ珠瀬は操縦桿を握る。マニュアルだと出ていたコンソールを叩いたリヴェアはなにか言っている珠瀬を無視してハッチから飛び降りる。

そのまま機体、ガンダムの下に。キャットウォークの稼動ボタンを押したリヴェアは昇降装置に足を掛けた。

『ど、どうすればいいんですかあっ!?!』

「叫ぶな、喚くな、マニュアルがあるだろう?それを見て……よっ……操作すれば良い」

コックピットに乗り込んだリヴェアはリンクさせてある狙撃型のモニター状況をウィンドウで確認する。……どうやらどれがどれなのかが分かっているらしい。

仕方無しに細かい事が書いてあるマニュアルを表示させるために遠隔操作でコンソールを叩く。表示されたのは各部の名称、機体を

動かす為に必要なことを事細かに書いたマニュアル。

やっとコックを掴めたのかゆっくりと前に足を踏み出した不知火を横目にガンダムを操作して格納庫から外に出る。日の光を浴びてうつすらと輝くガンダムを自動制御にし、コックピットから出たリヴェア。

格納庫に目をやると、歩いて不知火が出てきていた。

「あ、リヴェアさん！どうですか、動かせてましたか？」

「上出来だ。目視でここまでなら網膜投射でも大丈夫だろ」

問答無用で外部からコックピットハッチを閉めるスイッチを押し、機体から飛び降りる。狙わせるのは衛星軌道上の鉄屑。しかしそれは大きな物でも地表から見てゴマ粒通り越して粒子並の小ささだ。機体の性能云々の前にパイロットの技量が問われる。

設計通りに機体背部の大型スナイパーライフル1200？超水平線砲・改がスライドして機体前面に出てくる。それを右のマニユピレーターがしっかりと手にとり、左のマニユピレーターが銃身を支える。そしてリヴェアが設計し、組み立てた戦術機専用の高高度存在狙撃ユニット。機体を寝かせるだけのユニットだが、機体制御を補助してくれる機構を付けている為、狙撃成功率数%上昇を見込める。

戦術機狙撃ユニットが機体の背部と接続され、次第に後ろへと倒れていき、45度程度で固定される。

『ユニット接続確認・・・えっと、衛士専用狙撃ユニットを・・・』

・あ、これかな』

「あ、大尉!!」

「ん？」

「珠瀬訓練兵を見ませんでしたか  
戦術機のテスト中でしたか。申し訳ありません!!」

「ああ、いいよ別に。珠瀬なら、ほら、あそこ」

『リヴェアさん〜。準備完了です、いつでも あ、分隊長!』

「珠瀬。今は狙撃の事を考える。心配しなくていい、何時も狙撃銃でやってる通りにやれ。最初に二発射撃、三発目で目標を破壊しろ」

『はいっ!』

リヴェアはヘッドセットを着け、後ろの三つ編みの訓練生、確か名前は榊 千鶴。彼女にもヘッドセットを投げ渡す。ついでにクリアサングラスも。リヴェアはバイザーのアーチを上上げると「射撃開始」と言った。

瞬間、轟音が世界を揺らした。

地面が揺れ、空に掛かっていた雲は一気に拡散する。ガ シャンとポルトアクションの音が響き、巨大な葉莢が排出される。ガンダムのメインカメラとリンクしている高倍率双眼鏡を覗いたリヴェアは指をパチンツと鳴らした。

再び轟音。

『……誤差、修正……完了』

「射撃」

地面が揺れる。高倍率双眼鏡は数秒後小さく光るゴマ粒を確認する。破壊成功。まさか、ぶつつけ本番でここまで行けるとは。だが、今回は位置が変化しない標的。もっと訓練を積んだ方がいいだろう。

ヘッドセットを取ったリヴェアは近くの作業台にヘッドセットを投げ、状況が掴めずに呆然としている榊の前で手を振る。どうやら色々と許容量が限界を超えたらしい。

まあ、いいか。リヴェアは放っておこうと決め、珠瀬に機体を降りて着替えてくるように呼びかけた。

「あの、ヴェネツチア大尉。訓練兵の新メニューなんですけど」

「……ん？ああ、例のクルクル回る奴か」

「はい。その、殆ど開始早々吐いてるんですけど」

「三半規管を鍛える為の物なんだけど……しょうがない。今

度から全身回転に変えよう」

「は？全身回転？」

「ああ。ただこうやって……回るだけでいい」

手を広げ片足を上げる、クルツと自分を軸にして一回転したりヴエアはこんな感じ。と軍曹に言った。

「これを……そうだな、10回、5セット休憩なしで」

「はぁ……？」

意味があるのか？と言いたいのか軍曹はシラァとした目をリヴエアに向ける。その視線に気付いたのか、リヴエアは何処から音も無くボールペンを取り出して後ろの設計図などが中途半端に書かれた臨時設置した黒板にチョークで簡単な三半規管図を書いていく。

カツとボールペンを図に当てたりヴエアは

「これが人間の平衡感覚を司る三半規管。これを鍛錬する事で回転性めまいに耐性がつく」

「しかし……めまいに耐性はいららないのでは？」

「戦術機じゃ必要だ。特に新型」

「……合格してもいないのにそれは少し早計過ぎる気がします  
が」

「合格するさ。じゃなければ話にならない」

人類の為に戦いたいのは訓練生とて同じ。意思の力は十二分に備わっている。意思があるのならそれは可能性へと変わる。そう、意思の力は不可能を可能にするのだ。と、言っても不可能を可能になど誰でも出来るのだ。

不可能と思っているのは自分、故に、自分が可能だと思えば不可能は可能へと変化する。思えばなんでも出来るわけじゃないが。近くの椅子に腰を下ろしたリヴェアは自分を射抜いている視線に気が付いた。

「なにか？」

「大尉は　いえ、なんでもありません。新メニューの件、了解しました」

「ああ。　そうだ、軍曹」

「はい」

「平和がそこにあつて、手を伸ばせば届く場所にあるなら君は手を伸ばすか？」

「愚問です」

「……そうか」

部屋を出て行った軍曹を見送ったりヴェアは手に握った情報端末を握り締める。画面に映るのは各国のハイヴ位置、そして　軍

事基地。赤い光点として映っているその位置を見たリヴェアは思わず目を瞑る。自分の成そうとしている事は本当に正しい事なのだろうか。武力介入なんてBETAだけに行い、人間たちには手を出さずに、このままこの基地で過ごしても良いんじゃないのか？

いや、ダメだ。リヴェアは目を開ける。機体のコンピューターで計算して十二月の下旬。その時全てのステージが完成する。世界は変わり始める。

「俺と、ガンダムで世界変える」

花を咲かせましょう。

ボタンと閉じられた扉。リヴェアが花瓶に移した白い花が風に吹かれてゆっくりと揺れていた。



## Training beginning(後書き)

正直、麻衣の設定画投下で一日分としようとしてました。ごめん！！でも投下。やっぱり決めた目標は守らないと。勘違いで破ったけどね。

ぶっちゃけ、今回の話。かなり無理があると思う。のは俺だけなのか……？

では、明日はバイトの面接があります。なので投下できるかどうか微妙です。ご了承ください。ノシ

The decision : to this hand .

時間と世界は止まる事を知らない。此処に一つの結末を見た人間もまた、然り……。

### 第十三話

「ハアアアアツ!!」

「破壊するツ!!」

青と黒が衝突する。紅いサーベルと巨大な両刃剣が火花を散らしながら押し合いを始め、黒の右マニピレーター（手元操作機）の拳が青の顔を殴り飛ばした。更にこれも持ってけとばかりに蹴り飛ばす。緑の光を両肩から噴き出して態勢を整えた青はドッキングした背中（背中の）の白から無数のミサイルを黒に向けて放つ。

薄い緑の軌跡を残して飛ぶミサイルを紅いフィールドで防いだ黒は、サーベルを振るう事で辺りに蔓延していた煙を晴らす。しかし。

「ここは 俺の距離だ!!」

「チイツ!!!」

翡翠の目が光る。蹴り飛ばされた黒は二本の剣を構え、突進してくる青を迎撃しようと紅の光を撒き散らして一回転、腰からビーム

ダガーを抜き取ると粒子を噴かして青に突撃する。

「リヴェア・ヴェネツチア……お前は一体何の為に戦っている！お前の神は何処にいる！！」

「この世界に　　神はいない！！」

押し合いは黒の機体が紅く染まることで一気に状況が変わる。押し切った黒はビームサーベルを破棄、マニピレーターに近い部分がスライドして現れた柄を掴み、シールド　　いや、リバイヴソードを構えた。ソードの各部分がスライドを始め一本の剣となる。最後にシールドである装甲が剥がれ、うっすらと紅い光を纏った剣が姿を現した。

「刹那・F・セイエイ……。お前の力（答え）を見せてみる！！」

「ツク！！トランザム！！」

残像と言う軌跡を残しながら剣をぶつけ合い、蹴り合う青と黒。だが、その均衡は呆気なく崩れ去る。トランザムの強制終了、粒子残量は充分。つまりこれは　　。リボنز・アルマーク……ッ！

青の剣が油断していた黒の両腕を切り落とし蹴り飛ばす。

「クツ……機体制御……ッ」

「これが　　俺のガンダムだ！！」

目覚めは最悪だった。などという文章は此処で使うべきだなとリヴェアは目を覚ました。入ってきた光に目を細める。よりにもよつてあの時の光景が夢に出てくるとは。起きざるを得ない。よく見ると手にはうっすらと汗が浮かんでいる。

舌打ちをしたりリヴェアは扉に手を掛けて手前に引こうとして扉が開けさせまいと抵抗する。グツと引つ張れば何かが引つ張り返すのだ。引つ張る。引つ張られる。「朝から何の仕打ちだよ・・・」と呟き、コンコンと控えめのノックをして相手の出方を見る。

「・・・この ドア は 認証式 です」

「つまらない遊びは止めて早く此処から出してくれないか？霞」

「・・・はい」

瞬間勢い良く扉が開かれる。当然リヴェアは扉の近くで聞き耳を立てていた為、鈍い音を立てて直撃をもらう。その上痛みに気を取られて踏ん張ることさえ出来ずに壁と扉に挟まれる。素敵なイノベーターのサンドウィッチ完成だ。誰も買わずに腐って捨てられるのが運命さだめだろう。

「霞。お前にこれを教えたのは誰だ？」

「・・・水月さんです」

壁から脱出したりリヴェアは霞にそう問うた。その人物に報復すると言わんばかりの笑みを浮かべて。流石にリヴェアが浮かべている笑顔は攻撃色なのを理解した霞は数秒。ほんの数秒間を開けてその人物の名前を言った　　が。

「　　誰だっけ」

「ちよつとーッ！それはないでしょー！！」

「　　思い出した」

「露骨に嫌な顔すんなッ！！」

赤い瞳を半分、口を首の方へ垂らしたりリヴェアは誰が見ても「思い出しちゃったよ・・・」みたいな事を思っている、と言うだろう。事実、思っているのだから仕方がない。

蒼い髪を纏め、背中揺らしている彼女、水月は通路の影でリヴェアが痛みに耐えているのを面白がってみていた彼女は指をズビッシュとリヴェアに突きつけると

「これである時の借りは返したわ！ざまあないわね！」

あつはつはつはつと言いながら仰け反り笑う水月。が、リヴェアは既に眠たげな目蓋を擦って霞と共に通路の奥を歩いていた。「ああいう人間になるなよ、霞」「はい」などと会話が聞こえてくる。

「悔しくてなにも　　あれ？」

リヴェアはカタカタとコンピューターのキーボードを叩いていた。汎用OSの製作を忘れていたのだ。だが、プログラミングはリヴェアにとって得意分野中の得意分野。言い方が少し間違っている気もしなくはないが、それだけ得意なのだ。

真っ黒なウィンドウに並べられていく文字。次々と打ち込んで行ったリヴェアは不意に手を止めた。これを何時世界に公開しようか考えているのだ。時期を見間違えれば計画は一気にただの自演劇に変わってしまう。慎重に見極めなければ。

だが……。再びキーボードを打ち始めたリヴェアは思考に浸る。平和を作る為には英雄ヒーローが必要だ。いや、実際には英雄ヒーローじゃなくてもいい。人々がそれに憧れと敬意を持ってくれればそれでいいのだ。だが、そう簡単に英雄は見つからない。見つければ苦労はしていない。

タンツ！とエンターキーを押す。これでOSの基礎は出来上がった。後は必要な情報、プログラムを入力していけば作業は終了する。昨晩からやっていた甲斐があったというもの。

汎用OSには完成の兆しが見えた。だが、計画の最重要項目。人類の意思をどこに向けるかがまだ決まっていない。やはり、英雄的ななにかを作るのがいいのだろうか、そこ等辺の衛士ではダメだ。もっと他の多くの人間に認められている人物。

「……いたら、苦労しないか」

居るわけが無い。そんな理想的な人間などいない。リヴェアはデスクに書き込んでいると告げている画面を見ながら溜息を吐いた。

「確かに受取ったわ」

「ああ、タイミングは計らってくれ」

「わかってるわよ。それと、横浜基地だけは破壊しないでよ？」

しないよ。とリヴェアは笑う。恩を仇で返す、など日常茶飯事だったが彼女はこの世界に必要な人間だ。無闇に殺すのは愚かたしか言い様が無い。クリアケースを渡したリヴェアは踵を返す。

「アンタ、まだ計画は発動させないんでしょ？」

「・・・十二月。十二月で全てが始まる。世界と、止まっていた時間が動き出すんだ」

「平和な世界、か。だけど アンタはどうするの？」

その質問はリヴェア自身の存在理由に問い掛ける物だった。存在理由、戦争補助対象への武力介入。戦争が消えれば、平和になれば存在する意味は消え去る。つまり

「俺は  
」

「花でも植えるとするよ」

そう言っつてリヴェアはドアの向こう側に消えた。聞こえてくる足音も消えたとき、夕呼は小さな溜息を吐いた。世界を変える為の計画。あの計画は悪魔の所業だ。武力に対して武力で介入、徹底的に痛めつけ力を奪う。確かにそうしていけば世界から戦争は、武力は消えるだろう。だが、実行者は世界から敵対される。言っならば一人対世界だ。だが

計画の本質はそこにある。一人対世界にすることに意味があるのだ。対世界、つまり世界は意思を一つにしていると言っ事。『国同士の戦争は消え、協力し合っつて共通の敵を倒す』その意思を創る事がこの計画の本質。

「怖いわねえ……イオリア・シュヘンベルグ……」

二百年前の人物だとリヴェアは言っつていた。二百年も前からこの事を計画し、予見し、二百年後の人類を手玉に取っつている。恐らく自分でも勝てない。絶対に。

それに、あのイノベーターであるリヴェアも相当な物だ。零から一を作り出すのを平然とやっつてみせる。驚異的な技術力、発想、身体能力、操縦能力、それに加えてESPである霞のリーディングを使えると言っつていた。読むのではなくて共有するらしいが。

そして、受取っつたディスク。これも驚異的な物に違いは無いだろう。自分の努力が虚しくなっつて来る。リヴェア・ヴェネツチアを見



ていると。

だが、

「イノベーターってのが全員あんなのなら、虚しいでしょうねえ。戦う意味を戦いながら探している……」

だから。。

戦う意味はもう探していない。探す必要が無くなったのだ、もう見つけたのだから。きっと、自分はこれを探していたのだ。答えは、自分が求めていた世界は、こんなにも簡単な場所に在って、こんなにも手が届く場所に在ったんだ。

そう、だからこそ。。

彼は、悲しそうな目をしていた。リヴェア・ヴェネツチア大尉。一昔前は捕虜で、尋問を担当した時からこの人物は只者じゃないと分かっていただけれど。だけど、実際は違った。迷っていて、誰かに答えを教えて欲しいけど誰もいなくて。

時は待たない。

それは自然の摂理だ。待ってくれと悲願しても、悩みたいのに悩

めずに次へと流される。答えを出す暇も無く戦い続けた結果。彼はまさにそんな人間だった。だから、聞いてみたかった。答えは見つかった？と。

聞けなかった。聞けるわけが無かった。彼は肉体的に見れば18歳位だろう。でも、時々無意識に見せる本性。あれは間違いなく18歳の物じゃない。つまり、彼はずっと悩んできたのだ。途方も無い位の道を歩いてきて。それでも見つからなかった。

「言えるわけ、ないじゃないの」

彼が戦術機を見る目は、期待でもない、達成感に満ち溢れている訳でもない。感じ取った感情は、虚。虚しさを感じさせる目をしていた。『また、まただ』そんな声が聞こえて来そう。そんな感じ。

「聞けるわけ、ないじゃないの……」

まりもは静かに握った拳を壁に当てた。

The decision : to this hand . (後書き)

サブタイトル名 『決意はこの手に』

頑張った。頑張ったよ俺！！かなり危なかったけど！！  
では、また明日。

A man who was not able to shake off

廻る、廻る。遂行者は自らを殺す武器の製造を始め、もう一人の遂行者はそれを手助けする。道は違えど求める物は同じ。

#### 第十四話

臨時設置されている黒板にリヴェアは手元の紙を見ながら図を書いていた。接近型のデータは取れていないが狙撃型のデータは十二分に取れている。足りないのは弾速、威力、不測の事態の為の接近戦武器など。接近武器は大型化した戦術機用ハンドガンを二丁サイドアーマーに取り付ければ良いだろう。

問題は次だ。新型の二機には元々バツクパツクを付けるつもりだった。しかし、狙撃型に何を付けなければならないのが今一浮かばない。接近型はジェットパツクでも付ければいいのかがるうが。

「……ダメだ。これは使えない」

書いていたのは狙撃を補助してくれる高速スキャンレーダー。だが、予想以上にパツクが大きくなり、狙撃の妨げになる可能性が高い。よってこれは廃止。却下の案。

「バックパックう？」

「そうだ。後付の装備を造って既存の戦術機に取り付けられれば戦力の増加を見込める」

「ふーん……見込みは？」

「17%」

「いいわ、やりなさい」

世界中の戦術機を調べようとしたリヴェアだがその作業を諦め、ニッポンの戦術機を調べ始めた。出来れば全機手に入れて似合ったバックを作っていきたいがそれは叶わないだろう。

「吹雪と撃震なら回してあげるわ」

「助かる」

この一言を待っていたとばかりにリヴェアは部屋を出た。目指すのは格納庫。後ろから聞こえてくる香月博士の声は後で回しておく。と聞こえてきた。今の内に考えていたバック構想を完全な物にしておかなければ。

格納庫に着いたリヴェアはすぐさま黒板を一回転させ、綺麗な裏面にチョークを走らせる。手元の紙によるとゲキシン、もとい撃震は重装甲での防御力の底上げを図っているらしい。

しかし、結局のところその装甲は食い破られ第二世代、第三世代の設計思想が変わった。リヴェアはパツクの構想が書いてある紙を片手に図を黒板へと写していく。構想その1、重兵装の取り付け。具体的には大型キャノン、六砲身ガトリングガンを二つほどパツクに付けて攻撃力を上げる物。無論機動力上昇も考えている。基本的には足を固定しての射撃となってしまうが。その代わりに自動展開の大型盾を二つ取り付けられている為、防御力も上がっている。

このパツク『砲撃戦仕様』がリヴェアの一番気に入っているパツクだ。瞬間加速装置『M・A』を改良して大きくはなったが出力が強化された『M・A』を二基付けたジェットパツクを装備している為機動力も高い。ガトリングをパツクパツクから腕にスライドして装備され、同時にスラッグ弾と炸裂弾を交換できるキャノン。耐熱仕様の盾。唯一ネックなのは重さと言った所だろうか？

と、ここで大きな音を立てて格納庫の隔壁が開け放たれた。入り口にたつ白衣を着た香月博士にこの間作業の余り時間で設計し、作った帽子を被っている霞。後ろには数十人の整備兵が二機の機体を運んでいる。

「持ってきたわよ」

「流石だ。早い」

「気にしなくて良いわ。　　そういえば」

香月博士はワザとらしい仕草で手を顎に持つていくと何かを考えるフリをする。この行動にリヴェアは少なからず嫌な感じを覚えていたのか、一歩後ろに下がった。

「私、バカンスに行きたいのよねえ……誰か連れてつてくれな  
いかしら……」

あからさまにリヴェアを見ている香月博士に思わず溜息が出る。

「俺に誰かを運ぶ手段は無いぞ」

「あるじゃないの。アンタ、機体ならなんでも動かせるんでしょ？」

「まあ、マニュアルがあればな」

「じゃあ決定ね」

しまった。とリヴェアが後悔するよりも前に香月博士はこうなる  
事を読んでいたのか手に持っていたボードをリヴェアに投げ渡す。  
内容は『MH-53 ベイブロウ 操作マニュアル』と書かれてい  
る。丁寧に機体のスペックも書かれており、はつきり言って武装を  
外された武装ヘリだった。これを動かせと言うのか。

「パイロットがいるんだからそいつに動かさせれば良いじゃない  
か」とリヴェアは当然の反論をするが、香月博士は謎の笑みを浮かべ

「忘れてたのよ」

ダメだコイツは……リヴェアは頭を抱える。機体借りてパイ  
ロット忘れるなんて信じられない。仮にも学者なのだ、しっかりし  
てほしい。が、ここで香月博士を散々罵倒してみても良いが、バッ  
クパツクの製造などもある。時間は取りたくない。

「……手伝います」

「助かるよ」

「で？返事は？」

「分かった、分かりました。行くよ、やればいいんだろ」

「いい返事。それじゃ、霞は作業手伝って言うてるし私はここら辺で帰るとするわ。んじゃね」

「ああ、戦術機、ありがとう」

リヴェアの礼を述べる声に香月博士は手を振って答えた。

<霞、データの修正頼む。ポイントは >

<はい >

撃震の背中に回されたキャットウォークに立って撃震の背部を調べていた。バックパック『砲撃戦仕様』の結合部分を何処にするか探しているのだ。後付で結合ポイントを付けるから、位置を探すだけで良いのだが、機体と結合させただけじゃバックは使えない。機体の武器管制システムにバックパックを登録しなければバックの武装は使えないのだ。



だが、設計しているパックに使っているのは全て共通のシステムなので一度パックを登録してしまえば換装しても自在に使える。それがこのバックパックの真髄なのだ。

天井に吊るしていた肩と脇を挟む形をしている結合ポイント二つを撃震の両肩に取り付ける。これで、恐らく機体の内部で認証が始まっている筈。機体の中には既に霞が待機していて、今はデータの入力をしている所だろう。

リヴェアはキャットウォークから降りると地面に寝かされている巨大なガトリングガンに向かう。パックの基礎であるジェットパックは既に出来上がっている。悪く言ってしまうえば翼が出来た跳躍ユニットみたいな物だからだ。それに兵装を取り付ける為のジョイント部分を取り付け、既存するカートリッジ式のキャノン砲を二基。装甲が付いていないマニピレーターの様な物の場所にガトリングガンを二丁取り付ければ『砲撃戦仕様』の出来上がりだ。

キャノン撃つ時に機体を襲う反動を少しでも軽減する為に地面へと固定するアンカーを胸部にオプションとして付ければ反動で吹き飛ばなんて事は無くなる。

<入力できました>

<そうか。今からパックの取り付けに入る。武器管制に登録を>

<はい>

傍に待機していたガンダムに乗り込んだリヴェアはマニピレーターを操作してガトリングガンを持つと天井に浮いているパックに

取り付ける。取り付けが終わったと霞に告げると、撃震が動き出してパックの真下へ移動する。

音を立てて結合され、確かめるようにキャノンの砲身が動く。ガトリングがスライドして撃震の手に渡るとそれを握る。

<登録完了です>

<……ふう。これで八割、つてところか>

コックピットからでたリヴェアは「ご飯を食べに行こう」と撃震に呼びかけた。夜も深い。誰も居ないだろうが、サバイバル経験が豊富なリヴェアだ。簡単な物の調理法くらいは心得ていた。

朝日が差し込む。格納庫の外で湯気が立つ合成珈琲を飲んでいたリヴェアは空になっていたコップにポッドを握って珈琲を入れた。湯気が立つ。一口飲むと、「……酷い味だな……これは」最初に飲んだときと同じ台詞を零す。

「隣、いい？」

「ん？……ああ、いいよ」

長い髪を揺らして座っていたベンチに座った涼宮にリヴェアは先程のコップを渡した。まだ暖かい。

「ありがとう」

気にするなとリヴェアは背凭れに背を預ける。外気に触れていたせいか、冷たい背凭れに背を離そうとしてしまうが直ぐに慣れ一息吐く。朝を迎えたばかりだから、吐く息は白かった。

常備している紙コップを取り出すとそれに珈琲を注ぐ。一口飲んだリヴェアと涼宮の間を冷たい風が通り抜ける。寒そうに身を捻った涼宮に自分が掛けていた毛布を掛ける。

流石にシャツとズボンでは寒いか。リヴェアは寒さを紛らわす為に熱さを無視して珈琲を一気に飲んだ。

「……ねえ」

「……ん？」

寒さに震えていたリヴェアに掛けられた毛布。右肩に当たるもう一人の肩。隣を見てみれば、直ぐ近くに涼宮がそこにいた。リヴェアが二人で一つの毛布を共有していると気が付いたのはそれから数秒後だ。

珈琲の匂いが鼻を擽る。この場の雰囲気は極端に苦手だったリヴェアは立ち上がってその場所を後にしようと思いつき、行動を始めようとまずは立ち上がるうとして。

「もうちょっと、もうちょっとだけ一緒にいようよ」

「お前、どうしたんだ？少し」

「いいから。少しだけ」

俯いて表情が窺えない彼女が握ったリヴェアのシャツの裾。諦めた彼は中腰だった体を元に戻した。この後特に予定があつたわけじゃない、バツクパツクも取りあえず香月博士の評価待ちだし、ここから逃げ出した所で行き着くのは睡眠だ。彼女に付き合うのも悪くない。

「あのね。副指令から聞いたの」

「……博士から？」

うんと頷く彼女にリヴェアは嫌な汗を拭えなかつた。香月博士が互いの契約を破る筈は無い、だけど、それが絶対だとは限らない。

「あなたが、自分を殺そうとしてるって。救ってあげてって」

「きつと博士は疲れていたんじゃないか？ほら、彼女は何かと」

「何時ものリヴェアなら、何も言わないで鼻で笑ってたよ”そんな訳あるか”って」

「……」

見透かされている。香月博士の意図は分からないが、これは……  
・契約違反じゃないな。計画の事は話していない。ただ、死にたがっていると言っただけ。

リヴェアは頭を掻く。涼宮遥、彼女は確信を持っている。誤魔化

しは効かなだろう。

「ねえ、どうして自分から死にたいって願うの？」

「……計画遂行の為さ」

そつだ。計画には自分自身の、世界の敵となったリヴェア・ヴェネツチアの死が組み込まれている。計画は絶対だ、あの時の少年少女が笑って生きていける、BETAに襲われる恐怖に怯えないで済む世界を創る為にも、この計画は遂行しなければならぬ。

「……間違ってるよ。それは、間違ってるよ……」

「……分かってる。けど、俺は遂行者なんだ。思いを託された」

「私は、リヴェアに死んで欲しくない。PXで世間話して、そこに水月が乱入してきて、笑いながら話す。たったそれだけで良いの。それじゃ、ダメなの？」

その問いにリヴェアは答えなかった。否定も出来ない、だが、肯定も出来ないのだ。自分は思いを託され、ガンダムを託され、イオリアの計画すらも託された。それら全部踏み躪っていつ壊れるかわからない、世界では平和なんて無いかもしれない時を過ごす事はできない。

手に握っていたコップは冷め切っていた。



A m a n w h o w a s n o t a b l e t o s h a k e o f f

サブタイトル『過去を振り切れなかった男。』

明日は日曜日なので休載です。ハイ。お休みを頂きたいです。良い  
ですね？ね？

では月曜日にお会いしましょう！！

What a man who was able to see only

遂にその時が来た。因果律に囚われ、世界の末を見届けてきた彼が。世界の末を知っている彼と世界を変えようとしている彼。道は交わるのか、それとも。

第十五話

彼女、涼宮遙と意見が相違したあの時からそんな事もあったと思えるほどに時間が経ったある日。基地の門が何時も以上に騒がしい事にリヴェアは気が付いた。よく見てみれば香月博士がゆっくりと向かっていくのが見える。

「あ、リヴェアさん」

「ん？ああ、珠瀬」

自分と呼ぶ声が聞こえたリヴェアは窓へと向けていた視線を廊下へと戻す。何時ものピンク髪の珠瀬王姫がそこにいた。手には紙が挟まっているボードを持っている。

笑顔と共に差し出されたボードの紙にはリヴェアが珠瀬に課していた狙撃訓練の評価、距離、命中率が事細かに書いてある。一通り目を通したリヴェアは「よくやった」と珠瀬の頭を撫でた。

「えへへ……」



「他のみんなは？」

「あ、先に行ってるって！」

言っていました！と敬礼をする珠瀬に面白さから来た微笑を向けながら「行こう」と告げたリヴェアは再び窓の外に目をやる。香月博士の後ろを着いていく誰かの姿が見える。白い服とズボン。遠目から見たただだが、しっかりとした体付き。推測だが、先程騒がしかったのは彼が原因だろう。

香月博士、彼女の後を着いて行っているという事は彼女の客人なのだろうが……。

「まあ、どちらにしても普通じゃないのは確かだな」

「？ なにか言いましたか？」

「いや、何でもないよ」

彼女の客人だ。何処かの国の重鎮か、エージェント。まさか、自分と同じく異世界人とかか。

それは無いか。トリヴェアは軽く笑った。

「白銀 武。アンタと同じ世界を飛ばされて来た人間みたいね……」

「冗談だろ？」

「ホントよ」

聞く所によると白銀武は自称、同じ世界を繰り返してきた人間である。曰く、機密情報であるオルタナティブ4、5の計画を知っている。曰く、リーディングで検証してみた所、唯のイタい人ではなく事実らしい。曰く、曰く……。

霞のリーディングで事実だと分かったのだ。それで良いんじゃないか？とリヴェアはソファに背を預けた。彼は世界の辿ろうとしている結末を回避する為に行動を起そうとしているのだろうか？と。良い事だ。

「そうだけでも、この世界は白銀の思っている世界じゃないわ」

「その通り」

この世界には世界跳躍者イレギュラーが存在する。香月博士によると、彼はリヴェア・ヴェネツチアなる人物の名に聞き覚えはないらしい。つまり、彼がいた前の世界はこの世界とはまったくの別物。

リヴェアは手元に置かれたカードを切り始める。充分混ぜたと判断し、均等に二等分する。半分を隣の霞に、半分を自分で見たりヴェアは手札の悪さに顔を顰めた。

「で？どうする訳？白銀は」

「……使える様なら俺の駒になってもらう」

「使えなかつたら？」

「俺の関知する所じゃないな」

「あ、そ」

ピツとテーブルにリヴェアは裏のままカードを置く。「1」と宣言するのを忘れない。霞が続いて「2」と宣言しながらカードを置く。数秒間の空白の後、リヴェアは「3」と宣言して。

「……ダウトです」

「心を読んだな？」

「……言い掛かりです」

「素直に吐いたら今日の晩御飯、にんじんは俺が貰おう」

「じめんなさい」

何やってんのよ……と呆れ顔の香月博士にリヴェアはトランプのジョーカーを投げた。

「彼は果たして……ジョーカーカードに成り得るのかという事  
な」

リヴェアの視線の先には自由自在に動き回る近接型の姿が在った。ポッ！と足からバーニアを噴かしたかと思うと、巧みな機体制御で見事なスライドを披露する。元々滑らかな動きを再現する為に小型のローラーを足の裏部分に取り付けている、だがそれを使用するのにはかなり卓越した技術が必要とされる。

それをたった数分でここまで使いこなすとは。隣に立つ香月博士も感心したように声を洩らす。確かに彼、白銀武の能力は素晴らしい。身体能力面でも訓練生に遅れを取るところか追抜いている。そして見てきた中でもずば抜けた戦術機の操縦技術。

「素晴らしい」

まさに自分が追い求めていた存在だとリヴェアは手で隠した口で笑う。訓練風景を見てみた所、性格面でも優れている。アレならば数日で訓練生同士で仲が深まるだろう。所謂、誰からも好かれるタイプという奴か。

彼ならば世界を救った英雄ヒーローとして生きていけるだろう。ならば、あの機体。近接型は彼にこそ相応しい。それなりにカラーリングなども変えなければならぬが、得た者を考えれば体が軽いという物だ。

しかし問題は彼が世界の結末を知っているということだ。つまり、彼はこれから起こる事を全て知っている。無駄に先回りされて彼の存在が他の国にバレたら大問題だ。言い訳ができない。

「その為の訓練生待遇か？」

「そ。能力の高さは本物、知識もあるし、性格も人当たりが良い。

だからこそ、今は帝国に取られる訳にはいかないのよ」

「……試験には合格してもらいたいモノだな」

「アンタらしくないわねえ……他人にそこまで思い入れするなんて」

「鍵だからな」とリヴェアは笑うとヘッドセットを手に取った。機体テスト終了を知らせる為だ。

彼、白銀武はあの機体を凄く気に入ったらしい。なんでも自分の思い通りに動いてくれるのだとか。やはり、とりヴェアは心中で頷く。この世界に住んでいる衛士は機体を操作するのではなく、機体に操作されている。しかし逆に白銀は機体を自分の思い通りに動かそうとしている。跳躍後の硬直などクソ喰らえ、硬直するなら先行入力くらいしてやる。それ位だ。

衛士の場合は硬直を視野に入れている。つまり”硬直が当たり前”なのだ。当然機体のスペックを考えれば当たり前の事なのだが、実戦では硬直している奴ほど格好的。自分が相手ならば硬直した瞬間にGNバスターランチャーによって機体の上半身が吹き飛んでいるだろう。

これだけでも彼が幾つか技術が発達した世界から来ていると推測出来る条件となる。それに。

「XM3……エクセムスリー。か」

曰く、先行入力、行動キャンセルなど戦術機の在り方を変えたOS。まあ、既に自分が新しい概念のOSを作り上げてしまったからこの世界で生まれることは無いだろう。

しかし興味深い。自ら戦術機を変えようとしたとは。戦術機に操られるのではない、合わせるのではなく”戦術機が合わせる様にした”。これらの条件から彼という人間を見るに、確実に別の世界から来た人間だろう。この世界の人間とは根本的に考え方が違う。

「信用してみても良いと思うがな」

それに良い戦力になる。リヴェアは香月博士の椅子に腰を掛けて言葉を投げた。彼女もその事を十二分に理解しているのか返事は無かった。代わりに書類が一枚飛んで来たが。不規則な動きをしながら落ちていく紙を咄嗟に掴み裏返す。

”白銀武 戦術機適性 S”

「馬鹿げてるわ。歴代最高点よ」

「いいじゃないか」

優秀な人材はどここの国においても優遇される物だ。優秀であって損は無い。が、今は違う。どんな世界から来たかも分からない人間が歴代最高点を叩きだした。この事実がお偉い方に伝われば白銀が引き抜かれるかもしれない。悪魔でも推測だが。

とここでリヴェアは一つ疑問に思った。彼女、香月博士の部屋に必ずいる霞がないのだ。

「 ああ、霞なら白銀の所よ。そういえば、最近は毎朝起こしに行ってるみたいよ」

「そうか。」

「なんだ、その目は」

腹立つほどににやけている香月博士は「べっつにー」と呟くと「取られちゃうわよ、霞」と言った。返答するのも面倒になったのかリヴェアは投げやりに返事をする。踵を返して部屋のドアに向かった。ポケットの端末が振るえたからだ。

コックピットの画面には新規システム作成完了、インストール完了を知らせるウィンドウが出ていた。これで土台を作成完了。後は時を待ち、計画を発動するのみ。そうすれば、世界はきっと。

麻衣は、シリンダーの前で祈る様に座っていた。「彼女」を通して流れてくるイメージには様々なモノがある、だが麻衣が求めているのは「彼」との思い出ではない。「彼女」は白い「彼」と何処か繋がる部分がある、だから。

そこで流れてきていたイメージが変わる。明るかった「色」は消え、黒に変わっていく。来た、麻衣はこれを待っていた。

『

母さん』

『なに?』

『俺がやるうとしている事は正しいと思いますか?』

『ん……。そうだね、正しいかな? って聞かれたら答えはNOだよ』

『俺は例え貴方にダメだと言われても計画を遂行しますよ』

『もう……エヴァンはそういう所がダメなんだよ。武ちゃん見習わないと』

『貴方は何で俺を呼んだんですか』

『……教えてあげない』

『子供ですか』

『女の子には色々あるんだよー。分かった?』

『……分かりませんよ。貴方の心が』

『……ねえ、エヴァン?』

『なんですか』

『私が導いて上げる。近い内に会いましょう』

『貴方は身勝手過ぎる。勝手に死んで、勝手に会おうという……』



・会えませんよ、俺の覚悟が揺らいでしまっ

『まったくもう……』

そこで会話だけの空間が終わってしまった。いつも、白い”彼”が意識を落とした時にだけ発生する空間。この空間が”変わる”鍵だというのに。だというのに彼はまた、彼女を拒絶してしまった。姉である社霞のこともトリースタと呼んでいないし、涼宮遙とも決別している。”前回”とは大いに違ってる。差し詰め、人間関係を重点的に展開していた前回とは違って今回は兵器関連を重点的に展開していったのだろう。

結末は見えた。”この世界はやがて崩れ落ちる”。

「 ”今回”もダメだったんだね……エヴァン」

寂しそうに麻衣は呟いた。

What a man who was able to see only

オリジナル要素である多目的複合素材などはご自由に使うてください。結構ですよ。使う価値があるのかどうかは分かりませんが。

さて、原作開始ですね。途中から思いっきり変わって来ますがけどね。あ号さん消えてるし。今後ともよろしくお願いしますね。

では、また明日。ノシ

Thank you .

「連れないこといわないですよ……」

「……しつこい奴は嫌われる。貴方の言葉ですよ、母さん」

何度目か分からない白い空間での彼女との会話。今日もまた彼女は出会い頭に会おうと告げ、自分はそれを拒否する。そうすれば彼女は頬を膨らませて

「それは男の子の場合！わたし女の子！」

「人間なのは変わりありませんけど」

「む……あ、そうだ」

諦めが悪い彼女閃くようにポンと手を叩くと、リヴェア いや、エヴァンに向けて指を突き出した。バーンッ！！と後ろに文字が出ている辺り、彼女らしいと言える。

「諦めが悪いやつは嫌われる！！」

「貴方の事ですね」

「う……じゃあ！！」

また何かを思い付いたのか顔を上げた彼女は赤味掛かったオレンジ色の髪を黄色いリボンと一緒に揺らして再び指をエヴァンに突き

つけた。背景はドーンッ！！に変わっている。

「細かい男は嫌われる！！」

と、  
どうだ、とばかりに胸を張っている彼女。エヴァンは溜息を吐く

「その通りかと思えますけど」

「でしょっ！ふふーん、素直なエヴァンには今度会った時ぎゅっ  
てしてあげるーっ！」

「遠慮します」

即答だった。

自動でシステムが落ちていた薄暗いコックピットの中でリヴェアは目を覚ました。”彼女”と話していたせい、気分はかなり晴れている。しかし何処か引つ掛かる、最近はなぜか彼女の姿がはつきり見えるのだ。ついこないだまでは霞が掛かっついて見え辛かったのに。

姿が見えているのは良い事だ。だが。

「……いや、考え過ぎだな」

自分に言い聞かせるように呟いた一言。リヴェアは何時からかあ

の黒い空間に行けなくなった事を忘れるように首を振った。

薄暗い通路を歩く。冷たい空気が頬を伝い、去って行くのを感じながら、ブーツの音に耳を傾けながらただひたすらに一本の通路を歩く。セキュリティなど意味は無い。次々とセキュリティを侵入、解除していき遂に行き止まりの部屋に辿り着く。セキュリティは網膜によるロック。

しかし問題は無い。事前にシステムをハッキングし、自分の網膜パターンを登録しておいたのだ。丁寧に時間がくれば自動消滅も含めて。消滅指定を掛けた時間は今から丁度30分後。時間は無い。手早くやらなければ。

機械を数秒見つめたリヴェアは電子音と共に開き放たれた部屋に足を踏み入れた。

そこは空間だった。部屋の四方八方からコードが伸ばされ中央のシリンドーに繋がっている。コードを踏み分けながら進みシリンドーの前に立つ。中に入っているのは脊髄と脳。普通の人間がみたら何と思うだろうか？大体は予想がつく。

「来たよ……母さん」

返事は無い。当たり前だろう、彼女は”彼女”だ。だけど今は”彼女”じゃない。白銀武を愛している鑑純夏、その人物だ。自分が言っている彼女は鑑澄華。名前は同じ、容姿も同じ。性格も然り。

当たり前だ、鑑澄華は鑑純夏の先祖なのだから。そう、つまり澄華の息子である自分は。

撫でる様にシリンダーを触り、頭に流れ込んでくるイメージの渦に身を任せる。日の差す通学路、スポーツカー、御剣、学校……。それら全てに白銀武は存在し、鑑純夏に対して笑顔を見せていた。彼女もまた同じ。

夢から覚める前に彼女がやってくれと言っていたのはたった一つ。横浜基地の最重要ブロックに存在する脊髄だけの姿になってしまった子孫、鑑純夏と接触することだった。それさえやってくれれば今後会おうとは言わない。そう約束もした。

鑑と接触すればイメージを共有する事くらい目に見えて予測できていた。つまり、彼女がやりたかった事は自分を鑑と接触させ、イメージを共有させること。逆に言えばそれ以外に皆目見当がつかない。

イメージの奔流が止まり、リヴェアの意識は一気に引つ張られた。吸収されるように中央へと引き寄せられて。

「あなたは……誰？」

「俺はリヴェ　　いや、エヴァン・サーシット。よろしく」

「……エヴァン」

「そうだ。彼女から伝言だ”もう少しで迎えが来る”だって」

「そっか……ありがとう、エヴァン」

瞬間世界が変わる。白い空間から弾き出された様に元のシリンダーの部屋に戻された。コポコポ・・・と空気の音がやけに大きく聞こえる。とそこでポケットから振動が伝わる。事前にセットしておいたタイムリミット五分前を知らせるバイブレーションだ。リヴェアは数秒シリンダーを見つめると踵を返して走り出した。

急げ、急げ急げ　　！！。システムを強制終了しFCS、ドライヴを起動させる為に指をコンソールに這わせる。画面の隅にはかつて登録していたニイガタにBETAの大群が迫ってきている事を知らせている。この基地からニイガタまではさほど遠くない、最大推力でステルスも取っ払えば数分で着くだろう。

『リヴェア！アンタなににして　　』

繋がれた通信を強引に切り、機体の周りを取り囲んでいるキャットウォークを力任せに破壊する。紅い粒子の光りがモニターに映り出したのを確認し、マニピレーターを操作して腰のGNビームダガーに伸ばす。格納庫を開けている時間は無い、破壊して出るしかない。隔壁を右斜めから、左斜めから切り裂いた機体、ガンダムは融けている隔壁を蹴り飛ばすと粒子を噴出して空へと飛び出した。

時間が無い、通常のBETAだけでも脅威だというのにこの反応は。進化級だ。それも一体ではない、数体の反応がある。大きく舌打ちしたりヴェアは操縦桿を強く握った。間に合えと呟いて

「防衛部隊が出ていたのか……？」

機体が捉えた生命反応にセンサーが拾う爆発音、モニターが最大望遠捉えているのは煙、空へと上がっている煙が防衛部隊が苦戦を強いられている事を教えてくれた。

そして 進化級をモニターに捉える、同時にFCSも奴を口ツクオンしていた。瞬間トリガーを引く。命中率など関係無い、ステルス性を考慮して出力を落としていたGNバスターランチャーのリミッターを解除して放つ真紅の砲撃は青い空を飲み込み、抵抗している空気すらも巻き込みながら進化級へと迫る。

しかし、進化級も馬鹿ではないらしい上空に飛び立ち迫り来る砲撃を回避した。だが、

「逃がす訳ないだろうが……ッ！」

機体が操作され未だに真紅の光りを放ち続けているGNバスターランチャーが上へとその角度を変えた。当然の如く反応できなかった進化級は下からの砲撃に身を蝕まれ、消えた。まだ終わらない、海へ向けて数発ランチャーを撃ち背中GNビームサーベルをマウントしたGNバスターランチャーと入れ替わりで持つ。



左右のマニピレーターに装備された白い円筒型の物から円錐状フィールドを発振し、紅い刀身を形成する。そして。

「トランザム!!!」

『TRANS-AM』の表示がモニターに浮かび消える。二基のGNドライブが唸りを上げた次の瞬間機体は紅い残像を残して移動していた。半端ではない速度。機体がレーザー発射前のエネルギーを閉知するが、今の機体には無意味な攻撃だ。黄色い閃光が次々とガンダムに、リヴェアに向けて放たれ、貫通していくがそれは残像。

先制とばかりに機体が更に紅く染まる。腰のサイドアーマーにマウントされていたGNバスターランチャーが自動機銃の様にBTEAへと向けられ、放たれる。地面に降り立った機体を操作し、今にも突撃しようとしていBTEAを踏み潰す。瞬間、機体に衝撃が走った。八本足のBETA・・・確か要塞級とか香月博士は言っていたか。

機体の表面上に張り巡らされた薄く、圧縮されたGNフィールドに触れ消滅していく足。痛そうに咆哮するBETAに反応したのか、次々とレーザーが機体を襲う。だが所詮レーザー、高濃度に圧縮された一つの武器であるGNバスターフィールドを貫通する事は叶わない。衝突しては拡散し、衝突しては消滅していく。

学習能力が無いのか・・・。とりヴェアは冷めた目でモニターに映る光景を見ていた、がそれにも飽きたのかコンソールを操作して更に圧縮率を高める始め、限界に到達しようとした所で急激にGN粒子を供給させる。

モニターが数秒紅く染まり、トランザムが解除され通常の機体色

に戻ったその時。気色悪い複眼がモニターに映った。

「お出ましか……随分と待たせられた」

GNビームサーベルが頭部を貫き横に引き裂く。おまけとばかりに左のサーベルが胴体を切り裂き、自動火器管制によって操作されたGNバスターランチャーが別れた体を消滅させる。

レーダーに映るのは二体の反応。その内一体は 直ぐ後ろ。

マニユピレーターが進化級の挟みを掴む。間髪いれずにリヴェアはトリガーを引いた。擬似太陽炉と直結している掌底部の小型GNビーム砲が稼動し真紅の光りが挟みを飲み込み、消滅させた。喚く進化級の複眼に左のマニユピレーターが叩きつけられる。一回、二回、三回、四回目で頭部を握りつぶし、今度は右のマニユピレーターが胴体を貫いた。

息を吐く暇も無く警報。迫る大出力レーザーを仕留めた進化級で受け止め切ると、空中に放り投げて少しだけの間敵の目から映らない様にする。少しの間。そう、ほんの少しの間だがリヴェアとガンダムにとってはそれだけで充分だった。FCSがターゲットを捉えたと電子音で知らせる。リヴェアは迷わずにトリガーを引いた。

反応が一つ消える。これで残りは一体。その一体の反応は海から、しかも相当深い場所から出ている。出てこないつもりなのか、それとも唯単に臆病なだけなのか いや、待て。” ずっと海の中にいた” つまりさっきまでの戦いを見ていた？

「……GNバスターランチャー連結」

GNビームサーベルを背部にマウントし腰のサイドアーマーから片方ずつランチャーを取り出し、胸部の前で一つに合わせる。GNハイメガランチャー、その威力はチームトリニティのヨハン・トリニティ、ガンダムスローネアインが証明してくれていた。しかしスローネとはまったく出力が違う。バスターランチャーの状態でもフルパワーならば小惑星一つ破壊する事は容易い。

それを二つに連結したのだ。スローネとは違うのだ、スローネとは。特にロックオンもせず反応が在る方に銃身を向けトリガーを引いた。

大きな水飛沫が機体に降り注ぐ。恐らく数分はこの雨が止む事はないだろう。しかしこれで海の進化級は

### 衝撃。

コックピットを大きく揺さぶる衝撃がリヴェアを襲う。仕留めきれなかった、すぐさまサイドアーマーにマウントされているGNビームダガーを引き抜き機体の背後に向けて後ろ向きに突き刺した。

手応えはあった。だが、大したダメージにはなっていないだろう。なぜなら

「雨のせいで粒子兵器の威力が半減してるのか……」

モニターに映るGNビームダガーからはいつもよりも輝きが見えない。短く、鈍い光が断続的に光っているだけ。空中に退避していたリヴェアは思わず大きな舌打ちをした。これでは粒子兵器の活躍は見れないだろう。そう理解し、ビームダガーをマウントすると機体はカーボンナイフをマニピレーターは握った。

リヴェアは必死に生命反応を探していた。しきりに通信を呼びかけていた防衛部隊に水月がいたようだが今の自分には関係無い話だ。今はあの子供たちを探し出すのが先決。

そう考えてさっきから探しているというのに誰も見つからない。何も反応が無い。避難したのか、それともどこかに隠れているのか。様々な思考がリヴェアの頭を過ぎる。

だが、軍として避難勧告くらいは出す筈だ。出さなければおかしい。

「……生命反応！」

そんな時に機体のレーダーに映った青い光点そこは少年少女と出合った場所でもある。光点の数は一つだけだがもしかしたら勧告が解除されて戻ってきた人かもしれない。地面をゆっくりとホバー移動していた機体と距離はそんなに離れてはいない。リヴェアは機体に膝を着かせるとコックピットから出て走り出した。

「なんだよ……これは」

見覚えのある光景。崩れ去っている建物は確かに記憶の片隅に在った。だが、その建物に血は付いてなかった筈だ。

ベットリと廃墟に付いた血。一目見ただけでも致死量だと判断できる。リヴェアは腰からナイフを引き抜くと、震えている足を誤魔化すようにゆっくりと歩き出した。

そうだ。丁度此处でボールが足に当たって、あの場所から子供達が……。

開いた場所の中央でリヴェアは立ち止まる。視線の先には熊の人形を掴んでいる手が廃墟から見えていた。見覚えのある懐かしい人形にリヴェアは駆け寄った。

鉄の匂いが鼻を刺激する。懐かしい筈の少女は下半身から下が消えていた。

「大丈夫か」

なにを言っているんだ、自分は。早く機体に連れてって、医療班に見せれば助かるかもしれないのに。いや、分かりきってる。助からないのは分かりきってる。恐らく、この少女が”最後”の生命反応だろう。機体に映ったのも、彼女だ。

「おはな、うえたの……まっしろな、おはな……」

「そうか」

「おにいちゃ……きてくれる……て。みんなにいったの……」

「……そうか」

「たすけてくれるって……いったの」

「……そうか」

「そしたら、たすけてくれた……」

「……助けられてないよ、俺は」

「だからね……」

「……助けられてないって言うてるじゃないか」

「ありがとう」

白い花が風に揺られていた。モニター一杯に映るその花は本当に綺麗で、澄華が植えようとしていた花に本当に似ていた。リヴェアはそっとコックピットから少女を抱いて降り立った。







**T h a n k   y o u ・ ( 後書き )**

サブタイトル『ありがとう』

では、次の話で会いましょう

目の前の時計、カレンダーは11月15日の17時だと自分に告げていた。アレから、少女が死んでから基地に帰還したその時に拘束され、営倉に叩き込まれた。当たり前だろう。制止振り切って格納庫を壊して出撃。営倉に入れられても文句は言えない。

冷たい地面に力なく座り、営倉の外から差す光りに目を向けていたりヴェアに影が差した。顔を上げてみると険しい顔の香月博士がいる。確か彼女は総合評価・・・なんたらに行っていた筈だったが。なぜ基地の営倉にいるのだろうか。惨めな自分を笑いに来た？ 違うだろう、まあ、彼女がどんな理由で自分に合いに来ようと関係無い。

「アンタに出てもらおうわ」

「・・・どうせ、拒否権は無いんだろう？」

黙ったままの香月博士にリヴェアは肩を竦めた。そんな事は知らない、とばかりに彼女は一枚の髪を檻越しに投げ入れる。ヒラヒラと舞って地面に落ちた紙には『ハイヴ探索』と大きく書かれていた。推測するに、ハイヴを探索し、出来るだけBETAでも叩き潰して来いと言っているのだろう。アレの機体性能ならば叩き潰す所か、一瞬で辺りを更地にする事だって出来るというのに。

鍵を開けた香月博士はそのまま去って行く。他に話す事等無い、

ということか。自傷気味に薄く笑ったりリヴェアはゆっくりと腰を上げた。

格納庫に鎮座している機体は数日前と何ら変わりは無かった。思い足取りのまま昇降装置に足を掛け、脚部のスイッチを押す。コックピットの座席に腰を下ろしたりリヴェアはコンソールを手前に引っ張り、機体の状況を確認始めた。機体の損傷はほぼ無傷、各部パーツに異常は無いし、メインカメラも正常。ドライヴもちゃんと調整している。

敢えて言うならば、粒子残量が50%を切つていふと言う事か。それもそうだろう、トランザムシステムに最大出力のGNバスターランチャー、GNバスターフィールドの使用。これだけで充分に粒子を使っている。今回の探索では無闇にランチャーの類を使わない方が無難だろう。

「リヴェア・ヴェネツチア。出撃する」

香月博士から渡された紙には佐渡島に建設されたハイヴを攻略する様に書かれていた。だが、リヴェアにとってはそんな事どうでもいいのだ。何処の国の、何処の場所のハイヴだろうと、結局やる事は唯の一つだけ。BETAを駆逐する事。たったそれだけなのだ。

開かれた隔壁を潜り、夕暮れに染まり掛けている外へと出る。足元の整備員が何か言っているがどうでも良かった。操縦桿を握り、

機体が緩やかに上昇していくのを感じながらリヴェアは目蓋を閉じた。

天に伸びるモニメント。地面スレスレを滑空している機体はGNビームサーベルを無造作に振るいながらBETAを駆逐していた。目指しているのは悪魔でもモニメント。適度に潰していき、戦力を奪いながらハイヴ内に突入。丁寧に作戦指示まで書いてあった紙を握りつぶしたりヴェアはそのゴミをポイツと座席の後ろに投げた。

味方はいない。むしろハイヴを攻略する事自体知らされていないかもしれない。笑えてくる。BETAを駆逐すると言っていた人類が駆逐していると感じるチャンスを味わう絶好の機会だというものにまあ、別にいい。どうせハイヴを全部落としたら人類に対して武力介入を始めるつもりだった。変に協力して仲間意識を持たれても困るという物だ。

作戦通りに行くならば集中攻撃でモニメントを一部破壊、中に突入すると書いてあるがそんな面倒な事をするよりも効率的な方法がある。簡単だ、高濃度圧縮粒子をモニメントに向けて開放すればいい。辺りの地表を抉り取って消し飛ばしてくれらるだろう。後には中に突入すれば楽勝だ。BETAの戦力も奪えて一石二鳥。

そう考えたりヴェアはGNバスターランチャーのトリガーを引いた。

「……こうもあっさりと死んでくれるとは……やりがい

無いにも程があるよ」

紅く染まっているモニターの右端に表示されている生体センサーに映っている赤い光点は次々に消えていく。少しはマシなBETAは側面から攻めてくるが、前面以外はGNフィールドを展開している。無駄な行為だった。引いていたトリガーを離すと機体を操作してモニメントが在った場所に移動させる。深さは・・・センサーの類で調べてみたが、一番大きな反応が在る場所までは約1200m。

GNフィールドを展開しながら降りて行けば何も問題は無いだろう。BETAだろうと隔壁だろうと、圧縮された粒子フィールドに触れれば消滅する。自分は唯ドライヴの推力を調整すればいいだけに実に簡単な作業だ。香月博士が絡んでいたからどうせ面倒な任務だと思っていたが、どうやら深読みしすぎた。

機体がハイヴ内をゆっくりと降下していく。一気にドライヴの出力を上げて最下層まで突き抜けても良いが、粒子残量が少ない。少し重力に抗う程度の出力じゃないと、粒子蓄積と放出が一方的になっってしまう。幾らBETAだからと言って油断していれば手痛いしっぺ返しを喰らう羽目になる。それだけは御免だ。

リヴェアは機体の操作を自動に切り替えると、頭痛がする頭を押さえた。ここ暫くは何も無かったが今日の朝辺りから頭痛が出てきた。この世界に訪れた時には、介入される感じ。だが今度は介入では無く、語り掛ける感じがしている。・・・どちらにしても勝手に人の頭の中に入ってきているのだ、それ相応の覚悟があると見える。

最下層に到着するまで、時間潰しとしてどれだけ効率的にハイヴ

を攻略出来るのかシミュレートしておこうと思っていたが止めだ。一気に最下層まで降りて元凶を始末する。このハイヴの下に反応炉と呼ばれる存在が在るのならば、それを破壊して終わり。逆に他の何かがあったとしてもそれも破壊して終わり。後はゆっくりと探索すればいい。

機体の上下が逆転する。重力に引かれて推進剤として使っていたGN粒子の放出が止まる。放っておいても落ちるのだ、無駄な消費は抑えておきたい。

「これが、反応炉ね……」

薄暗い空間の中で光りを発している物体。網目の様な漏れている青い光りにリヴェアは目を細めた。取り敢えずはアレを破壊すればこのハイヴは『死ぬ』らしいのだ。紙によれば。そして恐らく、反応炉はあの存在と交信していた奴だろう。相変わらず頭痛は治まらないが受けた仕事は果たす。さっさとこの物体を破壊して。

と、リヴェアがトリガーを引こうとした時だ。青い光りが大きく発光し始めた。胎動する様に大きく光り、消え、光る。モニターが青い光りを危険だと知らせる前に機体は自動制御で跳躍していた。だが、リヴェアの目にはモニターに映った、とある表示しか見えてなかった。そう、この表示は前の世界でしか見てないもの。刹那・

F・セイエイとの戦いで得たデータ。

「……BETAが、量子化？」

A地点から途中経過をすつ飛ばして存在情報を書き換えてB地点に移動する。使いこなせれば無敵とも言える能力。しかし有り得ない、トランザムを使っている訳でも無い、何か特殊な装置を使っている？いや、確証はない、故に断定は出来ない。だが確かに、BETAは何処からか量子化しその存在を目の前で再構成しようとしている。

此処でリヴェアは小さく舌打ちした。香月博士は恐らくこの事を確めたかったのだろう、その為に自分自身を此処に送った。戦術機ではポロポロに叩きのめされてもこの機体は数百年先の技術で作られている。単機でハイヴを制圧できる戦闘能力もあり、安全性、機密性。どれを取っても申し分ない。例え不測の事態が起きても対処できる。そう踏んでいたのだろう。

光りが収まり、モニターに映るのは例の進化級。大方、何処からか何らかの方法で体を量子化、此処反応炉があるハイヴで体を再構成し活動する。この方法なら宇宙空間に鉄屑を置きに行った時に熱源センサーが捉えた衛星も突破でき、宇宙からの来訪も可能。地上で量子化する意味は無いし、宇宙から来る為の手段と考えると良いだろう。

そして、この手段は余り多用出来ないと見える。宇宙から援軍を寄越すならば、もっと大勢のBETAを寄越す物だ。しかし、目の前にいるのは進化級がたったの一匹。援軍としては随分と寂しい。これらから推測するに、BETAは量子化の手段をもってはいるが、多用は出来ず尚且つ一度に大勢の量子化は出来ない。

それもそうだ。一歩間違えば再構成も出来ずにそのまま拡散してしまうか再構成の際に体のサイズが小さくなったり、訳の分からない物質を取り込んでしまつて異形に変わる可能性だつてある。

「……まあ、いい。どちらにしたつてやる事は一つだ」

完全に再構成が完了したのか咆哮した進化級をロックオンする。反応炉に向けていたGNバスターランチャーをサイドアーマーにマウントすると、マニピレーターがカーボンナイフを取つた。

GNフィールドを消失させ、機体は加速する。機体の塗装を剥がすように掠めた黄色いレーザーをロールして避け、今にもまたレーザーを発射しそうな口を閉じるとばかりにナイフが口に突き刺さる。直ぐに抜き取り蹴りを食らわせると頭部のGNバルカンが火を噴いた。

紅い軌跡を残して次々と進化級に直撃し、その体を抉る。止めとばかりにもう一度カーボンナイフが進化級の首元に突き出され、横に薙ぎ払われる。斜めに飛んでいった複眼の頭をモニターが捉えたがりヴェアは機体を歩かせ、反応炉の前に向わせる。

ただ壊してみるのも悪くないが、GN粒子を注いで内部から爆発させてみるのも悪くない。だが、紙によると背部に外付けされたS-111を使って破壊しろと書いてあつた。仕方無しにS-111をマニピレーターが取り外す。後は設置して起爆させるだけだが、時間の調整やその他が面倒だ。そこでリヴェアはわざと掌底部分からGN粒子をS-111に注ぎ込む。

あわよくば反発しあつてくれれば良いと思つていたがどうやら過





戦う理由なんてリヴェアは必要としてなかった。ただ、人形のように命令通りに戦う自分に嫌気が差して戦う理由を探し始めた。最初の理由は『計画遂行の為』。だがそれは結果的には何にも変わってない。計画を遂行する為に命令を聞き、戦うに変わっただけ。本質はまるで変わっていない。次の理由は『平和の為』これは一日で終わった。銃を持った人間が平和など謳った所で何が変わるというのか。

リボنزは言った。「それはとても意味の無いことだ」と。しかしリヴェアは諦めなかった。他のイノベーター達と同じく操り人形になる気はこれっぽっちもない。戦う理由が欲しかった、生きる為に理由が欲しかった。イノベーターとして、リボنزの手駒として生き、死ぬなんて御免だ。そう、御免だ。手駒なんて結局は捨てられるのがオチだ。だからこそ自分は。

最悪の目覚めだ。割当てられた部屋の、少しはマシになったベッドで寝ていた筈なのに目覚めは最悪、気分も最悪、テンションは一番下を示すのが地面だとしたらここら一帯は地盤沈下しているだろう。リヴェアは負の思考を振り払う様に頭を叩くと、ベッドから起き上がり地面に立った。

不意に部屋の隅に設置されていた机の上に乗っかっていた紙にリ

ヴェアは目を付けた。それは自分自身が香月博士と結んだ契約の印。互いの計画を完遂する為に協力する。その時にリヴェアは『香月夕呼、リヴェア・ヴェネツチアどちらかが片方に依頼をした場合、依頼した方はそれ相応の対価を支払う』。

香月博士は自分に依頼をし、自分は報酬としてとある情報を求めた。机の紙を捲ってみると事細かに各国に存在しているハイヴの詳細データが書かれている。当然A4用紙には収まりきらない。良く下を見てみると小さな紙切れを発見する。『続きは引き出し』雑に書かれた文字に従い、三段ある引き出しの一番上を開ける。

そこには封筒が幾つも入っていた。これら全てがBETAの巢、ハイヴについての記述が書かれているのだろう。今から見てみても良いが、情報は機体のコンピューターに直接打ち込んだ方が良いだろう。自分の計画が最終段階に入り、各地に存在するハイヴにはこれからの作業でデータを参考にして細工をし、計画の踏み台は完成。後は時を見計らって計画を発動、BETAを殲滅した後には武力を持つ人類に対して攻撃を始める。

後悔は無い。あつてはならない。

「……行くんですね」

「ああ」

「……わたしは、武さんと一緒に行きます」

「……なんで俺に言うんだ」

目の前に立つ少女、社霞は悲しそうに目を伏せた。彼女に対してリヴェアは何も思っていない、いや、どうでもいいのだ。今の自分には何も無い。在るのは使命、与えられた計画、与えられた力。それで世界を変えろとイオリアは言った。だから、自分は悪の権化になるのだ。英雄に相応しい人間を見つけた、専用の特機も造った。

いや、これは建前か。

自分を殺すことに自分は理由を付けたがっている。計画の遂行という目標がソレだ。何故死にたがっているのか、この世界に自分の存在理由を見付けられないからだ。……違うな、見つけようとしてないだけか。

今までの行動を振り返ってみれば、計画を捨ててこの世界の為に戦う事が出来る機会なんて幾らでもあった。そうさ、この世界に前の世界での計画なんて関係無い。大事だったのは過去を捨て切れるかどうかだった。自分には出来なかったが。だからこそ自分はこの道を往く。これは押し付けだ。自分の存在を消したいが故に世界を巻き込む。

「俺のやるうとしてる事は、ただの押し付けだ。だから」

「また、繰り返すんだね。エヴァン」

「繰り返すし？」

遮られる声。その声の発生源に目を向けてみると白い髪を揺らし  
て立つ麻衣の姿があった。だが、雰囲気は何時もとは違う。それに  
自分の本名を知っている。何故だ。この世界には自分、リヴ  
エア・ヴェネツチアと共通することなど無い。故にSランクである  
自分の本名を知る手段は存在しないし、在ったとしても仮にもSラ  
ンクなのだ。簡単にわかるわけが無い。しかも、彼女にはまだ不可  
解な点がある。登録された自分のバイオメトリクスを突破する。こ  
れも解決は出来ていない。

リヴェアは気味の悪さに腰からナイフを引き抜いた。さっきの発  
言もそうだ。”また”繰り返す、何のことだ。また繰り返す、って  
事は自分は以前にナニカを繰り返しているのか？

「 そんなに警戒しなくても大丈夫だよ。”次”は私はいない  
から」

「次？」

「そう、次。これで 76回目位じゃないかな。エヴァンがこ  
の世界を周回してるの」

何を言っているんだ。とリヴェアの口から言葉が零れ落ちる。だ  
が、その質問に答える気は無いのか麻衣は踵を返すと通路を歩き始  
めた。「次、頑張っつね。エヴァン」と楽しそうな言葉が聞こえて  
くる。

麻衣を見ていた視線を再び霞の方へと向けるが、そこには誰もい  
なかった。

よく考えてみれば自分の行動は全てウソだったのかもしれない。

自らの命を絶つ為に、死ぬのに正当な理由を付けたがっているだけなのかもしれない。それを彼女、香月博士は見抜いていたのだ。そして、涼宮遥にそれを話したのも彼女なりの救いの手だったのかも。しれない。もし、あの時。計画の遂行を急いでいた自分が彼女が差し出した手を握っていれば、自分は幸せに生きられたのではないか。

そんな訳あるか。トリヴェアは寒い風が吹く屋上で頭を振った。ガンダムを行使する自分に平和など、幸せなど訪れない。世界平和の為の踏み台となるのが末路、それしかないんだと悲観するつもりは無い。 فقط。

もしかしたら、の世界への憧れは消えない。イオリアは言った、「進化の可能性を信じる」と。今はその意味が理解できる。だけど、計画は始まった。明日からは各地のハイヴに夜通しで攻撃を仕掛けて二日で壊滅させる必要がある。

現在の日時は11月16日。人類に対する武力介入は12月1日に行く。それまでにハイヴを全滅させ、BETA完全に駆逐。軍事基地の場所を調べ上げ、最終戦に相応しい場所を見つけ、システムの調整を完璧にしなければならない。

「……探したわ」

もう必要ないからと燃やし、形を変え始めたIDを地面に捨てたリヴェアに声を掛けたのは香月博士だった。右手には拳銃を持って

いる。まあ、予測できないという事は無かつたし、互いの関係を鑑みれば容易に予想がついた。

自分の計画が遂行されれば香月博士の計画は御終いだ。彼女が平和を目指しているのならばそれでも良いが、どうやら手に持った銃を此方に向けた以上、平和を目指している訳じゃなさそうだ。リヴェアは太腿に付けていたホルダーからGN粒子が込められた弾丸がセツトされている拳銃を取りだし、対面の香月博士に向ける。

自分の計画にとって、彼女の存在は危険すぎる。新型戦術機のデータを託し、世界的に有利な状況を作り出せる様に謀ったが、有利な状況を出させるのは悪魔でもオマケだ。本来の目的は時期を見計らって新型戦術機のデータを世界にばら撒く事。つまり、ばら撒いてくれるのならば誰でも良かった。

だが、自分は彼女を見縊り過ぎていた。白銀と同じ、この世界の人間とは根本的に考え方が違う人間。自身の邪魔になる物は遠慮無しに排除し、自らの目的を達成しようとする。

彼女の計画にとって、自分が成そうとしている事は目障りなのだろう。そして自分も、彼女の存在は目障りだ。前々から理解はしていた判断力、統率力、人脈。それら全てがこれからの自分には危険すぎるのだ。

「リヴェア・ヴェネツチア。アンタは言ったわね、計画を遂行する事が自分の使命だと」

「言ったな」

「それは本当に命を掛けるべき事なのかしら？」

「……さあな」

「はあ、撃つならどつぞ？」

「お前は撃たないのか」

「撃つて良いのかしら？」

撃鉄を下げる音が響く。リヴェアは響いた音に反応して引き金に指を掛けた。そして。

自分はきつと甘い人間だ。人類を敵に回すというのにアレ位の事が出来ないなんて。後悔は無かったはずだ、銃の引き金を引くのにも躊躇う事なんて無かった。なのに。

格納庫へと続く道を歩いていたらリヴェアは足を止めて通路の壁に頭をぶつける。鈍痛と共に冷たい壁の感触が神経を伝うが、血は流れなかった。思いつきりぶつけたのにも関わらず。

何がしたいんだ。俺は。

計画の遂行、人類の平和、幸せになる事。それら全てを欲している自分があるし、そうじゃない自分もある。だが、自分の世界は



加速を始めた。もう止まらない、止まらせる術は無い。後はただ終着点に辿り着くだけ。

「……ハハ」

乾いた笑いが口から洩れた。計画遂行の為に戦う。それは考え直してみれば傀儡師の操る人形となる、という事だ。人形になるのを嫌っていた自分が今は人形の役割を全うしようとして必死になっている。笑える、笑いが抑えられず掠れた笑い声が出る位に。

「あれ？大尉、どうかしたんですか？」

先日総合評価なんたらを無事クリアしたと言っていた白銀が目の前に居た。この先は機密区画だった筈だが。

「ああ、タマがこの区画にいるかもって」

タマ、珠瀬王姫の事か。彼女も自分の駒となってもらう予定だったが……この際どうでもいいだろう。リヴェアは壁にぶつけていた頭を離すと白銀と目を合わせた。この男ならやってくれるだろう。

「……白銀。お前は人類の為ならどんな敵とでも戦うんだよね？」

「当然です」

当たり前、とばかりに胸を張りながら白銀は答える。リヴェアは小さく微笑すると

「俺が試作機にのって戦場を行ったり来たりしてるのは、知ってるよな？」

「？はい」

「そこで奇妙なBETAを見つけたんだ。黒い奴でな、緑の目に紅い光りを出してるBETAだ」

そう、この男。白銀武ならば全ての条件をクリアしている存在なのだ。

L i e o f t h e w o r l d a n d m y l i e (後書き)

サブタイトル『世界の偽り、自分の偽り』

まず一日空いてしまった事を謝罪します。高校生活との両立が厳しくなってきました。申し訳ないですが、更新ペースが落ちてしまいます。すみません。

では。

My best friends .

変わらない物なんて無い。風景も、俺も。やがてはどうしようもない物に変化していくのだろう。

第十九話

リヴェア・ヴェネツチア　。いや、これからはエヴァン・サーシットと呼ばなければならぬだろう。彼は小さい頃母親、鑑澄華を尊敬していた。戦時だと言うのに、他の人間は国に忠誠を誓い、死に逝く事を当然と考えている中。彼女の存在は本当に光りだった。武器を取らず、忠誠も誓わず。ただ、花を咲かせる事だけに意識を向けていた彼女。

エヴァンと澄華は血など繋がっていない。エヴァンは少年兵として育てられて、敵を殺す術だけを教えられてきた哀れな少年だった。しかしそんなエヴァンは世界の間違いに気付いていた。土地を奪い合う、財産を奪い合うだけの戦争。他者を虐げてまで得る新しい土地。その全てがエヴァンにとって醜い物だった。

自分たちを育てた、殺す術を教え込んだ人間は言った。

「これは聖戦だ！！神々が住まう我等の土地を愚かにも侵してきた連中への制裁なのだ！！神の為に戦え！！」と。

神の為に戦い、神の為に死ぬ。見えない何かに、姿、声全てがわからない架空の存在を守る為に戦うのだ。それは果たして命を掛け

るべき事なのか。エヴァンは理解できなかった。実の両親をこの手で握った拳銃で撃ち殺してから、エヴァンの中のナニ力が揺らいだ。だけど、感傷に、考えの海にに浸るべき時間は与えられてなかった。

そして戦いが始まった。だけど、これは戦いなんて物じゃなかった。圧倒的な戦力差、経験、歳の違い、体格の違い。次々と人が死んでいった。親友も神の為に戦い、死んだ。結局残ったのは自分だけ。戦えと声を張り上げていた人間は既にもいない。基地は放棄され、機材は破壊されている。連中は始めからこのつもりだったのだ。

負けるのは目に見えていて、それでも適当に抵抗させておく。その役目は自分たちではなく他の誰か。親友が残した唯一のペンダント。大好きだと言っていた向日葵の花が象られたそのペンダントだけが、エヴァンの全てだった。そして死に行く前に彼は言った。

「神の為に戦うんだ。怖くなんて無い」と。

完全に洗脳されていた。何もかもが無意味に感じた。止めるべきだと脳が、心が告げる。だけど体が、声帯が動かない。制止の言葉が出ない。諦めると誰かが言った。諦めてたまるかと抗った、必死に遠ざかる体に向って待ってくれと手を伸ばした。だけど。

その手が届く事は無かった。

その日は雨がよく降っていた。彼方此方に燃え広がる炎を消すよ

うにザーザーと。崩れ落ちた廃墟、転がる死体、転がる藁莖。銃と銃で撃ち合った以上、人を殺しあった以上、これは戦争と呼ぶのだろう。一方的に殺されるのは虐殺だというのに。エヴァンはただ敵軍の狙撃手に頭を撃ち抜かれ、絶命した親友を見下ろして佇んでいた。

エヴァンの手には親友が戦場へと行く間際、渡されたペンダント。お守りと言って渡してきた親友はもしかしたら自分が死ぬのを解っていたのではないか？ いや、違う。元々死ぬ気だったのだ。姿形もわからない神の元に逝けると信じて、死んでいったのだろう。

なぜ解らないのか、なぜ理解してくれないのか。神なんてこの世にいない、いたとしたらなぜ争いを止めないのか、なぜ 人を救わないのか。エヴァンは手に持った拳銃を空に突き上げ引き金を引いた。甲高い音と共に吐き出された藁莖が地面を転がり、廃墟に止まっていた鴉は飛び立つ。神が憎い。傍観者を気取っている、安全な所から戦争を見下ろしている人間が憎い。平気で人間を兵士に仕立てる人間が憎い。

「力が欲しい」

ポツリ、と洩らす。神を殺せる程の力が、傍観者を殺す力が、戦争を生み出す人間を殺す力が欲しい。戦争を終らせる力が欲しい。手に持った拳銃では自分しか殺せない。圧倒的な、戦う事すら諦めさせる程の力が欲しい。

「戦争は何時でも醜い物だ。戦い、殺し人は失って初めて何かを知る」

君も同じだろう？と年老いた男性の言葉がエヴァンの耳に入った。

咄嗟に拳銃を声がした方向に向け、引き金を引こうとするがそれは出来なかった。抑えられた銃口、顔を襲った衝撃。銃口を反らされ、顔面に向けて拳を放つ。一般人に出来る技じゃない、なによりも数分前は戦場だったこの場に一般人がいる訳ない。連中は基地を放棄して逃げた、つまり、コイツは敵軍の。

「勘違いしてもらっては困るね。私はイオリア、イオリア・シュヘンベルグ。少年、君は力を望むのか？」

「欲しい。どんな奴にでも勝てる、どんな戦争も終わらせられる。そんな力が僕は欲しい」

「君が私の計画を補助すると誓うのならば私は君に力を授けよう」

「誓う」

「ふむ……憎しみで世界は変えられない。その住所に行きたまえ、君の新しい家と、母親が待っている。数年後迎えに行くよ」

小さな紙切れがエヴァンの足元に落ちる。雨で濡れていく紙を拾い上げると撫でるように書かれている住所が目に入る。比較的近い所だ。歩いていけば数日で着く。だが助かった事に此処は傭兵揃いとはいえ基地、バイク程度の物はある。

イオリアは言いたい事を言ったのか満足そうな笑みを浮かべると背を向けて去って行く。幸い、近くには乗り捨ててあったバギーらしき物がある。キーも挿しっぱなしだし、外傷も特に無い。これを使えば直ぐにでも行けるだろう。

エヴァンは落ちていた長方形の鉄屑を少し上の部分でロープで結

び、クロスさせた。しつかりと、何重にも結んだエヴァンは親友の遺体をスコップで掘った穴にゆっくりと置き、土を被せ始める。一回土を掛ける、体が埋まった。二回目、土を掛ける。足が埋まった。三回目。頭だった物が埋まった。四回目からは何をやっているのが分からなくなった。

小さな山が出来ている地面にエヴァンは鉄屑の十字架を突き刺した。これが、せめてもの弔い。神を信じる者は救われる、最後まで神を信じ、死んでいった唯一の友人に対する、手向け。あの連中が生きていたら、この場に居たら間違はなく「神の元に召されたのだ」と言っただろう。吐き気がする。それと同時に、自分に対して嫌悪感が溢れ出た。自分も、そう思ってしまったからだ。

机も何もかも香月博士に返したせいか、目覚めて見た自室は酷くサッパリしていた。この部屋ともコレつきりだ。もう二度とこの基地を訪れる事は無いし、来る気は無い。リヴェアはベッドから降りると壁に掛けてある白いパイロットスーツを手を取った。

随分と久々に着たパイロットスーツは未だに眠い頭を覚ますには充分な程ピッタリと体にフィットした。ヘルメットはコックピットの中だから問題は無いだろう。軍服を畳んだリヴェアはベッドの上に服を置くと、ドアに向って歩き出した。

通路には誰も歩いていなかった。それもそうだろう、今は朝方。



起床のラッパ音が響くまで後一時間程あるのだから。余程の事が無ければ誰も起きてはいない。リヴェアはゆっくりと噛締める様に歩き、格納庫を目指した。

キヤットウオークは既に排除してある。格納庫の隔壁も昨晚機を見計らって開放しておいた。昇降装置に足を掛け、コックピットへのハッチがある首元へ。コックピットに身を落としたリヴェアは座席の後ろからヘルメットを取り出し、被った。機体情報が右から左へ流れていき、やがて全ての情報が流れ終わったのかokと表示された。

粒子残量は充分。二日間粒子チャージの為に機体を放っておいたのだ、これくらいでなければ。リヴェア静かに機体を動かす。最小限の粒子出力で機体を浮遊させ、ホバー移動すれば音は立たないだろう。紅い光りが機体を地面から押し上げ、移動を始める。隔壁を潜り未だに太陽が出ていない空の下に機体が姿を現した。

白のカラーリングが高濃度の粒子が装甲下で回り始めた故に赤黒く染まり始める。機体に粒子が回り切った事を確認したリヴェアはゆっくりと操縦桿を動かした。目指すのは高高度。高高度で待機し、そのまま移動をすればいずれ光線級がレーザーを放ってくる。こちらから行っても良いがどの位置に光線級がいるのか位は知っておきたかったのだ。

「 願いよ風に乗って夜明けの鐘を鳴らせよ 」

宙に浮いた機体が動いているのを確認したりヴェアはコックピッ

トの中で親友がよく歌っていた歌を自分に聞かせる様に小さく歌い始めた。

「行った、か……」

空に伸びて行く紅い軌跡を眺めながら夕呼は零した。これで最高の手駒を失い、最強の敵を生み出してしまった。だが、これで良かったのかもしれない。改造戦術機2機と、汎用OS、既存戦術機へのバックパック。このどれもがリヴェアⅡヴェネツチアが生み出した兵器だ。まったく異なった概念の元作り出された戦術機。白銀用にとメインフレームを白く染められ、間接部分に銀が光る近接型。

そしてマントの様な布切れを機体に巻いている狙撃型。珠瀬専用機として開発されたこの戦術機は本当に訳がわからない。光線級のレーザーを約13秒も遮断するABCマントに戦術機専用の大口徑ハンドガン。そして何より新型機に搭載されている新しいシステム。コアブロックシステムとリヴェアは呼んでいた。コアである胴体、腕部パーツ、脚部パーツ、最後に頭部パーツを別個に製造し、組み立てるのだ。これによりパーツ破損が引き起こす誘爆を防ぎ、生存率を上げる。

これだけでも凄いとこの男は「大分簡略化した物だよ」と平然と言った。

今ならば分かる。あの男は自分の手に余る。餌付けしようとするば途端に手を食い干切られるだろう。

「怖い、怖いわねえ……」

卓越した能力、柔軟な発想、そしてそれらを実現する行動力。どれをとつてもあの男は合格点以上。しかし、考えている計画は自分の障害となる。こんなところで、白銀という駒を手に入れてようやく実証できるのだ。間違つてないと。

ならばあの男は排除しなければならぬ、が。その手段が無い。物理的なものは一切効かないだろう、G弾ならば分らないが絶対に国が許可しないだろう。リヴェアが米軍に下るなんて事も無い。放つておいても死ぬだろうが、あの男が死ぬ時、世界に平和が訪れる。

「あたしは平和を求めているのか、それとも」

My best friends . (後書き)

サブタイトル『俺の、最高の友達』

やっと、出来た・・・。疲れた。

では、また。

時間とは、残酷だ。目を閉じてても、耳を塞いでも、結末を運んでくる。望まなくても、望んでも。そして人は言うんだ。

「最悪だ」と。

## 第二十話

機体がアラームを鳴らす。しかしそれはロックオン警報じゃない。擬似太陽炉の粒子残量が危険域に入った事を知らせているのだ。幾ら粒子残量の事を考えて戦ってもドライヴからGN粒子が溢れ止む事は無い。エネルギーには必ず限界点が存在する。緊急時の背部バニアがあるとはいえ、目の前のハイヴ攻略は少し戦い方を考える必要がある。

さて、一体何個目だったか。モニターに映るモニユメントはいい加減に見飽きていた。コンソールを操作して昨晚から気になっていたGN粒子残量を確める。最悪な事に30%を切っていた。落とした数を覚えるのが面倒になる程に落としたハイヴ。確か地球上に存在するハイヴ総数は24個程だったか。いや、もっとあった様な気がしなくも無い。

リヴェアはコンソールの横に貼り付けていた紙を剥がし、確認する。地球上に存在するハイヴ総数は26個。まだまだ消し足りてない。ハイヴ掃討開始の時はバスターランチャーで消し飛ばして内部に新型戦術機の開発時に余ったS-11を数個投下して御終い、が

基本だったが今はバスターランチャー一発のエネルギーも惜しい。

GNフィールドもとっくの昔に消しているし、使っている装備はカーボンナイフ。だが、何時までもカーボンナイフを使える訳じゃない。切れ味が落ちるのは刃物の常識。最悪、残数が無いバルカンで対応する事になる。と思っていたが、自分は運が良い。粒子補給の目処が立った。

(・・・生体反応多数。同時に熱源反応多数。軍事基地か)

横浜基地に住んでいた時に製作した戦術機索敵プログラム。固有のエネルギーに反応し、熱源を戦術機か否かを判別するプログラム。レーダーには数十キロ離れた場所に多数の反応を捉えた。恐らくはこのハイヴ攻略の為に最前線基地。そこをハイヴ攻略後に襲撃、粒子補給の為に電力を頂く。

まあ、基地が近くに存在するのだ。このハイヴに対しては特に制限は要らないだろう。カーボンナイフがサイドアーマーに仕舞うのをモニターで確認したりヴェアは左のマニピレーターにトリガーを引く事で命を出す。紅い極光が辺りを包んだ。

(流石に派手過ぎたか・・・)

自機に向ってくるミサイルをレーダーで確認したりヴェアはオートで働くバルカン迎撃を見ながらそう思った。たった一日でハイヴを落としていけば注目しない国は無いだろう。特にこの世界では。

派手にならないように気を付けていたのだが……どうやら世界がハイヴに向けている目を侮り過ぎていた。予想以上に連中はハイヴをよく観察している。いや、監視か。

ミサイルが撃墜され、暗い辺りを爆発の炎が照らす。今の攻撃で何処から撃つてきているのかはコンピューターが弾き出した。どうやらハイヴでの異変を感じて部隊を出してきた、って所だろう。という事はあの部隊を送ってきた人間は多分自国に救援でも求めている筈だ。長期戦になってしまいかもしれないがマニユピレーターで潰していった方が得策。

七面倒くさいが、GNビーム兵器で破壊した戦術機からデータを取られるよりはマシというものだ。

オープンチャンネルで呼びかけてきている戦術機数機をモニターが捉える。後方には一台の車。出力をGNドライブから背部バーニアに切り替えたりヴェアは操縦桿を握り、操作する。意思を汲み取った機体がバーニアをゴツ！！と吹かし機体を加速させた。同時に鋭利なマニユピレーターを伸ばした手刀を近くにいた戦術機のコックピット目掛けて繰り出す。

空気を切り裂き下から抉り取る様に繰り出された手刀はあっさりと戦術機を貫通し、搭乗している衛士諸共破壊する。生命反応が一瞬で消えたから苦しまずに即死だろう。

状況を掴めていないのか何のアクションを起さない他の戦術機に突撃、今度は左のマニユピレーターがメインカメラである頭部を貫通し、そのまま切断する様に下に下ろされる。機体の出力に任せたまの攻撃は脆い戦術機の装甲を破壊した。胸部から両足の間まで切り裂き、邪魔だとばかりに右に薙ぐ。

闇の中で爆散した戦術機の音と光りに反応した二機の戦術機が装備していた　　確か突撃砲だったか。を連射するが右マニピレーターに突き刺さっている戦術機を盾にしてガードする。途端に銃撃が止んだ。どうやら死んでいる事に気が付いていないらしい。まあ、それもそうだろう。例え戦術機のナイトビジョンで気が付いていたとしても、『生きているかもしれない』という希望は捨てきれない。

それが、甘さだ。

青白いバーニアが闇夜に光る。コックピットを正確に狙った攻撃は意図も簡単に戦術機を壊す。此処で右のマニピレーターを貫通した戦術機から引き抜き、直ぐ隣で銃を向けようとしていた機体の腕部を握り、力任せに引き千切る。続いて蹴り、自機の脚部バーニアが一瞬吹かされ異常な加速を得た右の脚は衝撃で揺らいでいた戦術機を変形させ、吹き飛ばした。

『待て！！降伏する！！』

地面に転がっている変形した戦術機を踏み潰そうとしていたリヴェアの耳にそんな悲痛の叫びが届いた。

「……咎は受けるさ」

『　なに？おい待て！！こっちは　』

「悪いな」



爆発で燃えている戦術機の残骸が辺りを照らす。人の気配がまったくない基地でリヴェアはGNコンデンサーにコードが接続されている機体を見上げながらヘルメットを脱ぎ、頭の髪をグシャリと握り潰した。

「もう、止められない。もう、後には戻れない」

人類の戦力に手を出したのだ、これで自身の中にある迷いも戸惑いも考えも。全部振り切って計画と共に生き、死ぬしかない。だが、これで良いのかもしれない。自分の中にある”もしかしたら”の世界への憧れを消し去る良い機会だったのかもしれない。

霞に親友から受け継いだペンダントを渡したのもそうだ。過去を振り切ろうとした、真似。実際は振り切ることなんて出来やしない。出来たら自分はこの世界で笑っていられただろう。

先程まで続いていた対人型兵器戦闘はリヴェアが操るガンダムの圧倒的な勝利で終わった。当然と言えば、当然の結果だ。高級Eカーボン装甲をGN粒子でコーティングした装甲はマシンガンなどの物理攻撃では揺るがない。

流石に戦術レベルでの兵器は回避しなければならないが、今の段階でそれは無い。

そう、問題は無い。全ては計算通りの展開だ。各国家への対策も

練つてある。問題なのは、香月夕呼副指令だ。だがしかしこの際、彼女は無視しても良いだろう。確かにあの頭脳は驚異的だが、所詮は人。悩みもあれば葛藤もある。

これは賭けだ。彼女が自分の計画を無理やりにも遂行すると決意し、白銀武、珠瀬王姫の二人操る新型戦術機の矛を自分に向けさせれば、自分の勝ち。だが逆に、穏便な計画遂行を諦め、戦略兵器で自分を殺しにすれば、負け。

「始まつたわね」

「……この未確認兵器に見覚えが？」

薄暗い部屋。プロジェクターがスクリーンに映像を写し、その光りが部屋を照らす。その映像に映った黒い機体は翡翠の目を光らせて何処かへと飛び立った。そこで途切れる映像。白と黒の砂嵐に変わった画面が消える。

数日前に起きた未確認戦術機による、米国軍基地襲撃。抵抗したが数分で基地は制圧され、ハイヴ警戒基地は前線を後方へと下げた。撃破された戦術機の記録に僅かに残っていた映像データに映っているのは見覚えがあるシルエット。二つのモノアイに特徴的な二本のV字角。間違いない、ガンダムだ。

夕呼は面白半分理解し難さ半分といった具合に手を顎に持っている。き考えていたが、プロジェクターを操作していたイリ。ナの質問に

夕呼は口角を吊り上げる。

「アレは……そうねえ……最強の象徴、かしら？」

あながち間違っではないだろう。この世界で最強なのは間違いない。光学兵器に謎の生成エネルギー。光線級のレーザーを物ともしないバリア。不知火の長刀を簡単に受け止める装甲。生きていると思わせる程の柔軟な機動。

何か含んだ言い方をした夕呼にイリ ナはショートカットのブロード髪を小さく揺らした。

「……私に聞かれても」

「まあ、最強なのは確かよ。でも、まさかこんなにも早くに介入してくるなんてね……」

「どうなされますか？」

どうするか、か……と夕呼は考えるが、結局使う駒は同じ。白銀武だ。

「ピアタイプ。白銀は？」

「戦術機適性検査を受けています」

「……結果なんて目に見えているのに、ね。……はあ、ナンセンスだわ」

「後で部屋に呼んどきなさい」 夕呼は気だるげそうに欠伸をし、

白衣のポケットに手を突っ込むと部屋のドアへと足を運んだ。「あ、  
そうそう。伊隅たちにもこの映像見せておいて」

「これは一応機密なのですが……」

「機密が世界を救ってくれるのかしら？」

皮肉気に夕呼は笑った。

米軍なんたらが接触してきてから数分が経っていた。律儀に戦術  
機を降りて戦闘意思が無い事を示した彼らには軍人真似事の敬礼を  
してみても良いが、所詮は武力を有する国家の手下。話は聞いても  
それに乗る気は無い。

丁寧にお世辞を言ってきたとしても最後に来るのは力が欲しい。まるで  
過去の自分を見ている様な不快感にリヴェアは思わず顔を顰めた。  
「これだから国家ってヤツは……」と彼らには分からない言語  
でポツリと呟く。急に分からない言語で話したせいかわ、首を傾げた  
全身ピッチリ姿の軍人二人に何でもないかと手を振る。

軍人には用は無い。此处で退場願う。ただし、後ろに在る戦術機  
2機は置いていってもらおうが。そこ等辺に転がっている戦術機だっ  
た物を使って改造すれば戦況を混乱させる良い駒になるだろう。

だ、が。先程も言った様にパイロット　　衛士はいらない。遠  
隔操作を受け付けるプログラムを差し込めば情なんかには惑わされる

人間は不要だ。

つまり、簡単に言えば。

ガアンッ！！ガアンッ！！

こつこつ事だ。

やっと、やっと投稿できた。すいません。遅れてしまいました。

さて、最近コミック版のマブラヴオルタ5巻を見てクーデターは絶対に血の海になるな！<武力介入的な意味で>・・・と思っ  
ている作者です。

すいません、時間を見つけてコツコツ書いているんで。停止なんて有り得ません。指摘があった部分は時間を見つけて直していきま  
すね。それでは。

終わり、なんて言葉は良く聞く。それは戦いの終わりを示していたり、対象の人生の終わりを示していたり。しかし人は何故か終わりという言葉を使いたがる。それは何故か？簡単だ。

人そのものが、死に憧れているからだ。

## 二十一話

その日は、本当に最悪だった。地面に寝転がって星が輝く空を見つめる。ドクドクと体の中心部から何かが流れ出る感触がどうも慣れない。いや、慣れたらダメだろう。強化装備の腹部からは赤黒い液体を絶えず流れ出ている。

隣を見ればかつての仲間が死んでいた。眉間に一発、あのパイロットの副業はきつと狙撃手だ。あれじゃあ助からない。即死だろう。

だから言ったのだ、話を聞く奴では無いだろう。と。でなければオープンチャンネルでの呼びかけで戦闘を開始する訳が無い。寝転がっている衛士、アレックスはやれやれと溜息を吐く。例の未確認戦術機のパイロットはさっさと機体を動かして何処かへ行ってしまった。まあ、それもそうだ先程HQに作戦失敗の暗号を送った。長居すれば増援にやられてさようなら。

逆に増援がやれてさようならか。

アレックスは笑いが抑えきれずに口を開けて笑う。随分と久々に笑った気がしなくもない。それもそうだ、頭の中に仲間と過ごした楽しい時間が流れているのだから。これは笑わずにはいられない。

「 悪いな」

おいおい、メイニーそりゃケーキだぜ……？

「意識混濁。出血多量。……ダメか」

煙が銃口から上がっている。二人とも眉間を狙って殺すつもりだったが、まさかあのタイミングで交わされてしまうとは。仕方無しに腹部を撃ったが、流石強化装備。致命傷にはなっただが絶命させるまでには至らなかった。だからもう一発眉間に撃った。

先程占拠した基地から機体で運んできた自分と同じほどの大きさの縦が長く、横が太い鉄材を四本ロープで組み立て始める。仕方が無かったとは言いついたくない。だが、殺した事には変わりない。機体同士ならば、遠慮はしない。銃を撃って良いのは撃たれる覚悟のある奴だけ。覚悟が無くても戦術機という剣を持っている以上、殺されても文句は言えない。だが、彼らは武力を有する国家に属しているだけだ。上からの命令で自分に接触してきただけ。



機体のマニピレーターで並ぶ様に掘った人一人分ほどの穴に二人の遺体を入れていく。これはある意味での贖罪だ。身勝手な理由で殺してしまった事への、贖罪だ。

自分の正体。リヴェア・ヴェネツチアの顔を見られる訳にはいかない。誰も知らず、誰も情けの感情を抱かない存在となるのだ、その為には自分の存在を誰かに知られる訳には、いかない。

身勝手、身勝手過ぎる。機体は既に映像でバレているだろう。だけど、自分のデータだけは渡せない。ヘルメットは取つてないし、服装も特徴が無いパイロットスーツ。バレる心配は無い、が。音声データがある。

このパイロットスーツは本当にただのパイロットスーツだ。ボイスチェンジャーなんて器用な物は付いていないし、別に防弾性がある訳でもない。

僅かなデータが洩れば必ずそのデータは香月博士の元に行くだろう。そしてそのデータが横浜基地にいる白銀、珠瀬に聞かれれば見られれば。それだけは防がなくてはいけない。

リヴェアは土に塗れながら地面を埋めた。上に鉄屑の十字架を立てる。

「……同じだ。あの時と」

力を得たというのに自分は何も変わっていない。後ろで膝を着いている黒い機体、ガンダムを見上げる。リボーンズガンダムのプロトタイプ。その性能はツインドライヴを搭載している為、伊達じゃない。だが、自分はまだこの機体の真価を発揮出来ていない。リヴ

アイヴソードもロクに使えていないし、未だにシステムを使えていない。

目の前の墓がかつての親友の墓と同一の物に見えた。

「変わってないじゃないか、俺も、ガンダムも……」

「刹那・F・セイエイ。俺は、お前の様には変わらない……」

翌日、食料調達の為にリヴェアは一度日本へと戻って来ていた。持っている金銭は全て日本円だったのが要因の一つでもある。もう一つは……少女が死んだ時の帰り道で出会った男と接触する為、自分の事を情報のスペシャリスト、と自称した彼は確かに有益な情報を持っていた。そこでリヴェアは計画遂行の情報面での手助けを彼に要求したのだ。

無論、自分の正体を洩らした場合日本の地図を書き直す程のダメージを日本列島に与えると脅して。

そんな彼から自分にとっておきの情報が有るらしいのだ。音声通信のみだったが、その声色は初見でテンションが低いと感じた彼からは考えられないほどにハキハキとしている声だった。それ程価値のある情報なのか。

待ち合わせ場所の林の中で茶色のコートを着た後ろ姿を確認する。

接触時に言葉を発する事無く分かるように背中にはとある細工がしてあるのだ。それを確認する。間違いない。

「待たせたな」

「……待ってたよ。それじゃあ、さっそく行くところか」

彼が親指で差したのは古惚けた建物。所々から光りが溢れ出ている。

「情報は？」

「焦りなさんな。情報は逃げやしないさ」

「情報にとって大事なものは」

「スピード。でしょ？」

深く被っている帽子の下で口が三日月に曲がる。分かっているならばいいとリヴェアは呟いた。

建物の中は漏れていた明りとは裏腹に随分と寂しい所だった。奥のカウンターに置かれた二つの椅子。丸テーブルに数が合わない椅子。カウンターの向こうにいた藍色のエプロンをし、白い髭を顎に生やした老人が小さく「いらっしやい」と歓迎していた。

自分たち以外には誰もいない。カウンターまで歩いたりリヴェアは丸い椅子に腰を掛けた。コートを脱いだ彼もそれに続く。

「……これが今回の情報」

カウンターを這わせて差し出された茶色い封筒。A4サイズ程度の大きさの封筒の口を開け、中から数枚有った紙を取り出す。

「沙霧、尚哉？」

「そう。ソイツが国内でのクーデターを考えてるらしい」

「……確かに、これは価値がある情報だ」

「今日が、11月の23日……恐らく12月中に行動すると見て良いだろうね」

「するんだらう？ 武力介入とやらを」彼が老人から差し出されたコップに口を付けながら楽しそうに告げる。リヴェアは沙霧尚哉のクーデターに関する情報が記述されている紙を封筒に戻すと、今度はもう一枚の方に目を向ける。

珠瀬玄丞齋国連事務次官横浜基地視察。珠瀬、まさか珠瀬王姫の父親か縁のある人間か？ と頭の中に浮かぶが、直ぐにそれを振り払った。知ったとしてもどうするのかが思い浮かばなかったのだ。

「ああ、ソイツはオマケみたいな物だよ。一応アンタの耳に入れておこうと思って」

御丁寧にも、とリヴェアは紙を破り捨てると茶封筒を持って席を立った。そのまま出口へと足を運ぼうとして。

「そつだ、店主。食料を売ってくれないか？」

紙袋から取り出した林檎を口に含む。程よい酸味と甘味が口の中に広がり、リヴェアは溢れ出た果汁と共にそれを飲み込んだ。店主から買った食料は主に果実。なんでも天然物と言っていたからそれほど美味なのだろう。

横浜基地で食した合成なんとかよりは数倍マシだ。合成が芽の生えた芋ならばこれは湯気が出るほどに茹でられ、塩で味付けされた芋。それほどまでに味に差が有った。

そして今リヴェアがいる場所は帝都、と呼ばれている場所。情報収集などあの男にやらせれば良いが、顔見知りの誰かに見られる、というリスクを背負ってまで帝都にやってきた理由はある。

彼から買った三つの情報。一つはとっておきと言われていた沙霧尚哉のクーデター、二つ目はオマケと言っていたくせに金を取った珠瀬玄丞齋国連事務次官の横浜基地訪問。そして最後の三つ目。帝国本土防衛軍、帝国斯衛軍だったかが新しいOSを使っている、という情報。

もしこの新しいOS、と言つのが近接特化OS、狙撃特化OS、汎用OSのどれかならばリヴェアは確める必要があるのだ。まさかこんな早い段階で香月博士がOSをばら撒くとは思えないが……

。だが、それはこっちにとっては良い方向に動く。

リヴェアは街中で一人の男を捜していた。彼に頼んで情報を集めてもらっている男だ。テンションが低い情報屋である彼　　自称　　ナナシと酒場で会う以前に音声通信で聞かされていた帝国軍の情報。その細かな情報を得る為に雇ってもらった情報屋。先程その男から連絡が入ったのだ。と、言っても介してもらったただけだが。

裏路地に入ったりリヴェアはその奥から小さく光りが走ったのを見逃さない。こっちも懐から取り出したライトを一瞬、小さく光らせる。

「……金は」

太い声が響き、その声にリヴェアは紙幣が入った小さな袋を取り出すと暗闇に向かって投げた。

「確かに。……帝国本土防衛軍が使用しているのは極東の魔女事横浜基地の香月夕呼副司令官が極秘に渡した」

汎用OSと呼ばれているものに間違いはないだろう」

「信用できるのか？」

「俺とて情報屋。真偽位は確めてある。実際の防衛軍第七機甲隊の衛士から聞いた話だ。間違いない」

「そう、か……。感謝する」

まさか、本当に汎用OSを渡しているとは。リヴェアは考える、確かにあのOSを何処かの国の戦力に渡してくれば助かる。全て計画通りだ。恐らく帝国軍の防衛隊に渡したのは試験的な何かの為。これで表面上は優秀なOSだと帝国軍が示し、世界中の戦術機に搭載されれば、計画の遂行率は一気に上昇する。

だが、少し上手く行き過ぎじゃないだろうか？

香月博士。一般的に言えば彼女は天才だ。全知全能な訳ではないがそれでも常人を軽く越えている。

そんな彼女が、異世界からやってきて、謎の技術で造られた機体を持っていて尚且つ自分の計画の妨げになる人間が差し出した贈物を簡単に受取るのか？

いや、そんな筈は無いだろう。彼女は汎用OSを横浜基地内、自分の手駒の戦術機には搭載しないと見ても良い。帝国軍に渡したのは恐らくオリジナルデータ。

じゃあ横浜基地の戦術機に何を使うのか、と言われれば答えは簡単。XM3だ。

「流石、だな」

帝国軍、米国そんな物はどうでもいい。世界に新しい概念のOSを与え、優位を築く？ それも嘘。全ては彼女の手駒を無力化する為の物だった。

こうなれば実力で彼女と真っ向勝負をしなければならぬ。

リヴェアは手に握った林檎に噛み付いた。



前書き、って書いた方が良いですかね？

携帯で見た時はなんか前書き、本文、後書き、と分かれてて面倒なんですよ。そこで前書きは無し、代わりに後書きって感じにしてみました。

携帯の方々はこれで良いんでしょうか？

最近レポートをやらなければ、と思いつつ執筆している作者でした。

では。

「Evan has the dream .

正義という架空概念が人を救うのか？

第二十二話

煩い駆動音を鳴らして走るバギーに揺られてこの御時世、舗装されず砂利や大きな石が転がっている山道をひたすらにアクセルペダルを踏み続けた結果、見事濡れたせいかわしゃくしゃになっっている紙の住所に辿り付けた。

この国じゃ珍しい外見の家。辺りを山に囲まれた場所に建築されていたその家の正面にはオレンジ色の髪と大きな黄色いリボンを風に揺らし、吹いている風に麦藁帽子を取られまいと帽子を押さええている女性がいた。

後数百メートル、という所で流れていた景色が止まる。同時に手応えが無くなるハンドルとアクセルペダルにエヴァンは溜息と共にハンドルの奥にあるメーターを見る。針は力なく垂れていた。後ろの座席を覗いて見れば予備にと積んでいたなけなしのガソリンも無い。使い切っていた。

子供でも操作できる様に、と連中が改造したバギーを降りる。女性の元に歩き出したエヴァンは腰に差していた筈の拳銃が無くなっているのに気付く。　　そういえば寝るのに邪魔だから隣の座席に投げた気がする。

取りに戻ろうか、と考えたエヴァンは足を止め、数メートル離れ

た場所に燃料が切れ、停車している濃いグリーン色のバギーに目を向けた。

行く宛ても無く、施設に留まり続けなければ軍に捕縛されるのが目に見えていた。だから此処はあの老人、イオリア・シユヘンベルグを信じてみようかと住所を辿ったが初見の人間を、尚且つ笑っている人間に心を許す程優しい軍事教育を受けてきた訳じゃない。

笑っている人間は恐ろしい。何を考えているのかが分からないから。口角を吊り上げればそれで笑っている。目に殺意が浮かんでいてもそれは”笑っている”と言えるのだ。だからこそ、施設で教えられた一言が脳内に浮かぶ。

”自分以外を敵と認識せよ”

戦場において、それだけを守っていれば死なないと連中に教えられていた。

現に同じ施設の仲間が敵軍の此方と同じ服装をしたカモフラージュ兵に騙され、死んだ。

そんな仲間の後を追うのは御免だ。

「信用できないんでしょう?」

「誰だツ!」

咄嗟に振り向き、耳の裏に隠していたピンを取ったエヴァンは自分の後ろから聞こえた声に脳を通常状態から戦闘状態にする。そこにいたのはオレンジ色の彼女じゃなかった。雪の様に真っ白な肌、

二つに分けた鈍い銀色の髪。水色のワンピースを着ている、誰か。

その目に浮かんでいるのは攻撃色ではない、興味を持っている、と感じ取れる。唯でさえ近いというのに身を乗り出してす少女にエヴァンは思わず距離を取る為に背を仰け反らした。

「初めまして、だよね？イオリア小父さんから聞いてるよ、エヴァンでしょ？わたしの名前は　　だよ」

「  
」

また懐かしい夢を見ていた。

聞こえない名前、何処かで見たことがある容姿。記憶は蘇った筈だ。彼女　　鑑澄華の事だって思い出した。住んでいた場所も、親友の最後も、イオリアに誓った事も思い出した。なのに、何故思い出せない？

意図的に隠された目。白く濃い霧が目を不自然に覆っていた。いや、見ていた筈なのだ。だが、思い出そうとすれば霧が邪魔をする。しかし、似ている。

声、仕草、首の傾げ方。全てが社霞に、社麻衣に似ている。

同一人物？そんな訳が無い。あのビジョンは間違いなく自分の忌まわしき過去だ、忘れたくても忘れられず、永い冷凍睡眠に入っ  
てようやく忘れられたというのにまた思い出している、過去だ。

システムが音を立てて終了を告げる。瞑っていた目を開ければ、  
反応炉に筒状の物が数個取り付けられている。データ入力通りに設  
置してくれたみたいだ。

このハイヴは最後の一つ。派手に他のハイヴを破壊してきたリヴ  
エアだが今回のハイヴだけはステルスシステムを起動させ、人間側  
に気付かれる事無く反応炉へと辿り着いていた。

何時も通りに破壊する事には違いないが、今このステージで人類  
に地球上に存在するハイヴが全滅したと悟られてはいけない。だか  
ら何時でもスイッチ一つで反応炉を破壊出来る様にS - 11を辺り  
に設置した。

しかしそれは万全なのか、と聞かれれば瞬時にNOと答えられる。

問題は此処がハイヴの奥、進化級が量子化移動した後の到着地  
である反応炉であるということだ。

あの個体は謂わば蓄積機みたいな存在だ。戦術機の自爆を見たの  
であろう自爆をし、戦術機が修理をされている所を見たのか再生能  
力も得た。もしも進化級がS - 11の危険性を知っているのならば  
設置したコレを何らかの方法で除去されてしまいかもしれない。

ならばトリヴェアが考えたのが接触型起爆装置。

蟻だろうと何だろうと触れれば起爆させる簡易装置だ。と、言っ

てもS - 11を起爆させる物じゃない。反応炉に取り付けたS - 11の外部に取り付けられた爆薬を爆発させる装置。爆発すればS - 11の誘爆は免れないだろう。

万全ではないが気休め程度にはなる。時間さえ稼げればそれでいい。

「世界の歪みを破壊する、か……」

「その歪みはもしかしたら……」

「俺なのかも知れないな」

誰かが泣かない世界を創ろう。母さんが言った花が咲く世界を創ろう。自分みたいな人生を辿らせない為にこの力を振るおう。

地面からゆっくりと浮上を開始した機体のコックピットの中、リヴェアは静かに瞳を閉じた。

コンコン。

期待を混めた深呼吸からのノック。何時もならば何の返答も無く開けられる扉は今日も開かなかった。数秒に数分の隔たりを感じる。思わず溜息を吐いた武は茶色の前髪をクシャリと握り潰した。

二度目のループ。オルタナティブ計画。

オルタナティブ5の最後を見届けた武は再びこの地に戻って来ていた。終った筈の物語をまた経験する為に。

未来を知っている自分ならば最後を変えられる。そう信じて。

再び仲間と会えた喜びに震える武は更に喜びの種を見つけた。戦術機が進化しているのだ、既存の物とは一線を越えた物に。

新型戦術機。不知火をベースに改造されている機体は2機有った。一機は前の世界で見た大型のライフルを背中にマウントしている狙撃型。これにはタマが乗ると言っていた。

そしてもう一機。前の世界では見た事の無い臨時大尉が自分に譲渡すると渡してくれた近接戦闘型。

自分の思いに伝えてくれる反応速度、瞬間的な高機動、高い出力。"ソレ"を感じた瞬間に武は勝てるかと確信した。

だからこそ武はリヴェア・ヴェネツチア臨時大尉に会いに来ているのだが、ここ数日間この扉が開けられる事は無かった。

香月夕呼先生に問うても返って来るのは「アンタが知ってもどうしようも無い事」だけ。

思わず扉のドアノブに手を掛け、捻る。どうせ鍵が

「……開いた？」

突っ掛かりは感じず、そのまま捻られるドアノブ。奥に押ししてみると扉は呆気なく開いた。冷たい空気が頬をなぞるが構わず武は部屋の中へと一歩踏み出した。

何も無い部屋。自分の部屋と何ら変わりがない。壁際に設置されたベッド、部屋の隅に置かれた机。

ただ、”自分が初めて自室を利用した時”となんら変わりが無い。住んでいると思わせない雰囲気。

気味が悪くなった武は踏み出していた足を思わず止めてしまう。

「……どうかしましたか？」

「!?!」

響いた声。聞き覚えのある声は部屋のベッドから聞こえた。薄暗い部屋をよく見てみるとベッドの上に小さな人影が見える。下ろした髪、抱いているピンクの兎らしき生物のぬいぐるみ。

社霞が、そこにいた。



「博士の指示で？」

「はい」

通路を歩く自分の隣を歩く霞は何時もと変わらない無表情で大尉の部屋にいた理由を告げた。博士からあの部屋に移る様に指示されたらしい。理由は分からない。

博士にも考えがあるのだし、自分がソコに口出しするべきじゃないと思うのだが……今回は少し疑問に思った。

「気にしなくても、いいと思います」

「……そう、かなあ……」

「はい。いやじゃないです」

確かに大尉には悪いけどあんな気味の悪い部屋に住んでいたら霞だっ

「気味、わるくないです」

「へ？」

「……」

そのままスタスタと足早に去って行く霞に武は首を傾げた。

その夢は、少し変だった。

何が変なのかとは抽象的で言えないが確かに変な夢だった。動けるのだ。景色は流れ、風に吹かれる感覚を神経が脳へと伝える。ザワザワと騒ぐ木々に起されてリヴェアは目を覚ました。

視界一杯に広がる青い空、白い雲。起き上がってみると辺りには芝生が広がっている。端が見えない景色に目を閉じて頬を抓ってみる。

確か、さっきまでコックピットで休息を取っていた筈なのだ。乗っていた機体は消えているし、そもそも自分がいた場所は陸上から離れた海の上だ。

それにあの世界で地平線まで芝生が広がるなど有り得ない。

「これが、あなたの望んだ世界だよ。エヴァン」

「」

「平和なんて概念はいらない。ただ、誰かが休める世界を創りたかったんでしょ？」

「誰かが、か……そんな抽象的な存在の為に俺が世界に喧嘩を売るとでも？」

「エヴァンは優し過ぎるもの」

「優しいを使う相手を間違ってますよ、母さん」

「エヴァンが欲しかったのは平和じゃなかった」

「  
」

「ただ、理不尽な死を与える人間が許せなかったただけだよ。エヴァン」

彼女は微笑みながら俯いているエヴァンに告げた。

エヴァンは目を閉じる。

彼女が突きつけた自分の真意を忘れる様に。

「Evan has the dream . (後書き)」

サブタイトル「エヴァンは夢を見る」

疲れた、疲れました。親の目を盗むのも一苦労です。  
実はですね、最近親から叱られました。

「高校生なんだから少しは外で体でも動かせ！」

お前は家に帰ってきてから毎日毎日パソコンばかり云々」

と。両親の言っている事も正論ですし、下手に逆らえばどうなるかが目に見えているので……。

皆様には迷惑を掛けます……。すいません。

剣を振るう。

木を握りやすく、刃が短い短剣      ナイフの形に簡単に加工した模擬刀はあっさりと同じく木製の杖に叩かれ、絡め取られて遠い明日の方角へ投げ飛ばされる。青い空をバツクにクルクルと回転しながら宙を舞うナイフがやけにスローモーションに感じたエヴァンは拳を引くと、掛かって来い、とばかりに笑っているイオリアに踏み込みと同時に拳を突き出した。

(      もらう )

キレも無ければ威力も無い、速さすら欠けている右ストレートは呆気なく回避された。しかしそれはフェイント。

本命は左の鳩尾への一撃。幾ら体格差があろうとも人間の急所が変わるわけじゃない。横にステップを踏む事で右を回避したイオリアは不敵に笑っている。エヴァンも、『喰らえ、爺』と笑い体を回転させた。

振り切った右腕を抱え込む様にして前方に移動しながら回転、未だに笑っているイオリアを正面に捉えたエヴァンは踵に力を込めて砂利と共に後方へと開放した。

加速する体、頭の横に持っていかれる左の拳。

人間の腹部の少し上にある窪み、腹筋の少し上辺りを目指してエヴァンは拳を振り抜いた。

瞬間左腕に圧力が掛かる。同時に肋骨にも。足を何かに払われ、自分の体は宙を舞った。

## 第二十三話

「リヴェアっ！」

「イーニア……なんで此処にいる？」

懐かしい横浜基地にリヴェアは再び足を運んでいた。別に香月博士と談笑する為に来たわけではない、談笑する前にやるべき事があった。

リヴェアが手に握っているのは小型の端末機。これはデータ収集を主としたリボーンズガンダムPに備え付けられているシステムの一つ。熱源探知。何を探知するかはコックピットで設定し、それらを端末に流せば準備完了。後は調べたい場所に端末を放置するだけで良い。

カモフラージュして基地に設置してきたリヴェアは早々に退散しようとしていた。しかし、見つかった、見つかってしまった。

「イーニア、どうしたの？ 急に」

イーニアを追って来たのかももう一人の女性が建物の影から姿を現す。イーニアと同じく雪の様に白く、少し銀が混じった様な髪を短

く揃えている女性。彼女と視線が交差したリヴェアは襲った頭痛に顔を顰めた。

彼女と関係が有った時点で只者では無いと理解していたが、まさか彼女も意識を探れるとは。

「……エヴァ、ン……サーシット？」

「ッ！！ 俺の記憶を読むんじゃないッ！！」

白い何かが脳内に侵入してきていた。ソレを追い返す為にリヴェアは偽りの記憶を奔流として白いナニカと共に吐き出す。

自分の本名を知っている、という事は自分の過去を

「死ね」

腰から上下二連式のニードルガンを取り出す。弾丸であるニードルもプラスチック、銃身その他も全てプラスチックで出来ているこのニードルガンは人一人殺す位簡単だ。

掌サイズのコンパクトなニードルガンの引き金に指を掛ける。

「彼女との思い出を見た人間に 生きる価値は無い」

「……いや待て。彼女？ 母さんじゃなくて？」

「彼女？ 誰だ、ソイツは いや何を言っている彼女は彼女じゃないか」

太陽の光りの様な存在で、手を伸ばそうとすれば眩しくて目を瞑ってしまって、向日葵の様な。。。

（ エヴァンはホントに、世界を ）

懐かしい声。紅い瞳を悲しげに閉じた『霞』は。。。

そこでリヴェアの意識は、目の前の世界は黒に染まった。

「霞、待てよ……そんなに、走らなくても」

「待ちきれないよっ、お先に〜」

「はぁ……母さんも何とか言ってくださいよ」

「待ってよ〜っ、霞ちゃん!!」

「……同じ人種だったか」

草が茂って思うように動けない場所、自分の遙か前方を太陽光を反射して輝いている白銀の髪を揺らし、楽しそう笑いながら駆けている霞を追いかけて澄華はサンドウィッチなどが入った籠を右に左に激しくシャッフルしながら走り出す。

「あああああ……」と中身の事を考えたエヴァンは見られないと手で顔を覆った。



「アレはもう中身が酷い事になっているだろうね」

「そう思うなら止めてくれよ……イオリア」

隣をゆっくりとマイペースに杖を突きながら歩いているイオリアにエヴァンは視線を向けた。見慣れた白衣に片眼鏡。鼻の下の口は不敵に三日月へと変わっている。

霞と澄華の後を追って草むらを踏み、坂を登る。

「……此処の花は本当に綺麗に咲いている。そう思わないか？」

「百合の花、だっけか」

太陽の位置付けが悪いせいか、影が差している丘を登りきるとそこには一面の白い花が咲き誇っていた。粉雪の様な白い六つの花びら、黄色いおしべ。大きな向日葵の花に囲まれているこの一帯は、恐らく殆どの人がこの場所の存在を知らないだろう。

意図的に地面が見えている場所を花を踏まない様に歩いていく。数十歩歩けばそこにはブルーシートが広がっていた。しかしその上にちょこんと座っている澄華は何処か浮かかない顔をしている。具体的に言えば「やっちなまった……」みたいな感じだ。

大体予想が付いていたエヴァンは無言のまま差し出された茶色のバスケットを受け取り、蓋を開ける。

「これは酷い」

「だろ」

「うっ」

隣からバスケットの中身を覗いたイオリアが溜息交じりの言葉を洩らす。

悲惨、という言葉が似合うであろうグチャグチャになっているバスケット内部。三角形のサンドウィッチは原型を留めていない。酷い物だ。

「い、良いじゃない！食べられるんだからっ！」

「・・・やれやれ」

最早、食パンを三角に加工したパンとハムを別々に食べるしか方法は残っていない。これであっさりスープとボールに盛られたサラダ、焼けた目玉焼きが現れれば自分が望んでいる理想的な朝食だ。ハムを摘んで口に運んだエヴァンは溜息を吐いた。美味しかったからだ。

薄く焼かれたカリカリのパンには塩が撒かれているし、ハムの焼き加減は絶妙だ。パンより一回り程大きいスライスチーズはパンとハムの熱で自然に溶けるように調節されているし、文句など出るわけが無い。

「　　美味しい」

「でしょっ!?!?」

「また腕を上げたんじゃないか？ 霞」

「ん、頑張ったもん」

「あれ？あれれ？」

「なんですか、母さん……そんなあからさまな悪巧みの顔は」

「分っちゃう？霞ちゃんが作ったって分っちゃう!？」

「……エヴァン、向こう側に花咲いてたよ。一緒に取りに行こう」

何かを言おうとしていた澄華の声を遮って霞は立ち上がる。水色のワンピースを揺らしてサンダルを履いた霞は未だに口にハムを啜っていたエヴァンの手を引っ張り、強制的に立たせた。

「オイ、靴くらい自分で履くさ」

「じゃあ早くしてよ……ほら、早く立ってっ！」

霞はエヴァンに手を伸ばして。

白き雲が所々に広がり、青い空を背景に雲が泳ぐようにゆっくりと流れていた。手、足、胴体、頭。それら全てに共通している感覚

は”冷たい”だった。それらを把握して自分が水に浮いている、と理解したのは目が覚めてから三分後。自分が何故海に放り投げられた死体の如く浮いているのかは理解し難い。

だからこれは夢だと感じた。

太陽は見えない。なのに空は明るい。しかも水に浮いている。これだけで夢と判断できる。先程まであの”クリスカ・シエスチナ”に銃を向けていたのにこの光景は有り得ない。

「平和、か」

澄華の言葉が頭を過ぎる。

『自分は平和など求めていない』と。

それは自分の行動、理想、思想、理念、後悔、希望、過去、求めた未来、求めた現状それら全ての核心だ。

確かに、そうだ。彼女の言う通り。否定できる部分など見つけれない、見つけたくない。

彼女かすみは言った。

『世界を変えて』と。

変えると誓った、変えてみせると決意した。この腐りきった世界を、争う事でしか生を実感できない人間やしらを肅清し、争う事すら馬鹿馬鹿しくなる様な世界を創ってみせる。絶対に。そう、誓ったのだ。

必死にナイフを振り回した。親友の死を、忘却すべき過去を思い出すのを恐れて握るのを止めたコンバットナイフを握り締め、毎日の様に仮想の敵を切り裂き、突き刺し、葬った。その度に、虚しさを知る。

幾ら敵を倒しても、幾らナイフを振るっても。この渴きを癒す事は出来ない。雨に濡れても振り、風が吹き荒れても振る。何度も地べたに這い蹲った。何度もこの身は傷付いた。

そしてイオリアから機体を託された。

『全ての悪意を向ける』機体。ガンダムを。

勝利など、無い。

敗北も、また無い。

各国で当たり前の様に起きる民族紛争。

信じた神。

見えない、あるのかすら分からない存在を崇め、讃え、信仰し、侵攻する。殺される人、殺す人。殺された人間の親しい人間は、殺した国に憎しみを抱き、それは人を殺す動力源となる。

連鎖、連鎖、連鎖。

鎖で繋がれた憎しみは断ち切られない、いや、断ち切ろうとしないのか。人は。自らが抱いている感情を復讐心と誤認し、誤解し、憎しみと知らずに誰かを傷つける。

終点など無い、始まりもまた、無い。

だから。

「組織名は、ソレスタル・ビーイングだ」

「天人……神様でも気取るつもりか？イオリア」

「神でもなんでも無い、世界に対し、人に対し平等なる存在。それが、それこそがソレスタル・ビーイング。如何なる事情があろうとも、如何なる理由があろうともソレスタル・ビーイングは、ガンダムは世界の武力に対し平等な武力介入をする」

「修羅の道、だな」

「望んだのは君自身だ」

「分ってる」

理不尽な死によって霞は死んだ。世界の不安定な情勢に耐え切れなくなった人間たちが起した自爆テロに、巻き込まれて。

だが、エヴァンには悩む時間も、割り切る時間も、ましてや弔う時間すら残されていなかった。イオリアの計画を確実な物とする為のガンダムの起動実験、性能テスト。私設武装組織ソレスタル・ビーイングのメンバーはエヴァン・サーシットのみ。

テストの為に機体を紛争地域に向わせたエヴァン　　リヴェアはひたすらに紛争に介入しては両陣営の戦力を根こそぎ破壊。それだけを繰り返していた。

そして、気付いた。気付いてしまったのだ。

紛争に介入し終わり、帰還しようとしていた最中。モニターに映ったレジスタンスの死体。それは間違いなく、自分が作り出したものだ。理不尽なまでの力を以って殺した。

理不尽じゃないか。

理不尽な物が許せなかった。理不尽な死、理不尽な結末、理不尽な終わり。全てが憎悪の対象で、全てがこの世界に不要だと感じていた。自分がガンダムに乗ったのも、人を殺す覚悟を、咎を受ける覚悟を決めてソレスタルビーイングに入ったのもそれが理由だった。だが、気付いてみればどうだろうか？

気付けば自分は理不尽な死を”憎む”のではなく、”与える”側に変わっていた。

その事実を否定した。否定したかった。だから理由を探した。ある筈も無い、ある訳の無い、人殺しの理由を求めた。それが”平和の為”だった。イオリアの計画は世界を”最終的には”平和に導くと、些細な疑問を振り切って自分に言い聞かせた。

彼女の望んだ世界へいわを創る為に。

「だけど、俺は」



D r e a m   c o n d u c t   o n e   s e l f   o f   b e i n g .

(後書き)

サブタイトル『夢の在り処。』

大幅に遅くなりました。すいませんでしたアツ!!

親の睡眠時を狙って執筆をコツコツと続けていた結果がこれです。  
ハイ。

次回からは時間を気をつけます。では。

A man who deserted himself

見える世界が、視界に映る映像が、耳に入る声と言う雑音が、感じる風が、それら全てが五月蠅く感じた。彼女は死に、母は床に伏せた。長くは持たないと医者に宣告されたのが数分前の事だ。イオリアは計画の遂行を未来に託すと告げていたし、自分も依存は無い。

白き花は枯れた、向日葵の花もまた枯れるだろう。緑の雑草が敷き詰められた元花畑に逃げる様に走ってきたエヴァンはそこで数分の時を無駄にした。本来ならば澄華の傍に居てやるべきだろう、見届けてやるべきだろう。だがしかし。

血だらけの手で、怨念に憑かれたこの体で、傍に居られるわけが無い。居てやるべきではない。自分は最早一つ概念。憎しみを抱く存在として世界に在らなければならぬ。そう決めて、銃を握ったのだ。

例え、それが自らを殺す物だとしても。

四話

第二十

「やめてっ!!」

「ツク!!」

撃ち殺さんとニードルガン突き出して構えたりヴェアの視界に、標的であるクリスカとの間に割り込んだのは他ならぬイーニアだった。イーニアの悲痛の叫びで夢から覚めたリヴェアは記憶の奔流に戸惑い、思わずトリガーに掛けていた指を外し、失われていた記憶を拒むように発した頭痛にニードルガンを落した。

痛む。

脳内で記憶と記憶がぶつかり合い、闘ぎ合う。視界がぶれる。まるで地震が襲っているかの様にふらつく体を膝を地面に着かせる事で制したリヴェアは地面に転がっているニードルガンに手を伸ばした。

しかし、自分の手が届く前に何者かがガンを拾う。

「クソ……」

何者なのかを確める術は、リヴェアには無かった。

11月31日 PM 14:53

不意に身を襲った寒気に目を開け、辺りを見回してみると誰もいない廃墟のと化した町並みだった。頭の痛みは既に消え、イーニアとクリスカの姿は見えない。

立ち上がったリヴェアは足元に落ちていた変り果てているニードルガンを拾う。バレルを押し折られ、ニードルは抜かれている。恐

らくはイーニアか、あのクリスカかがやったのだろう。

そして分かる事がもう一つ。自分は『見逃された』。

彼女たちがニードルガンが無力化したのならば自分を横浜基地に連れて帰り突き出す、なんて選択肢が有った筈だ。しかし彼女たちは自分を見逃した。一体なんの為に。

逃がしたところで彼女たちにはなんのメリットも無い。寧ろ報復しに来るとは考えなかったのだろうか？普通ならば殺す発言に銃を向けられればそれ相応の行動を起すと言うものだが……。

……過ぎた事を一々考えていては時間の無駄。今自分は生きています。それだけだ。

リヴェアはニードルガンを無造作に地面に投げ捨てるとその場を後にした。

機体のステルスシステムを起動して移動したリヴェアは海底にいた。海に面している陸の地下に。マニピレーターを使い、掘った穴。そこには奪取した戦術機と、基地から奪った様々な物が置いてある。使える物は戦術機の残骸からも入手しているし、幸いコンピュータも入手できた。電力は何処かの軍事基地を襲って戦力を奪

い、そこから電力と弾薬を貰うしかない。

洞窟と言っても差し支えない場所。壁に開けられた無数の小さな設置された無数の蠟燭が照らす中、リヴェアは機体のコックピットに乗り込んだ。

後は 奪った二機の戦術機に仕掛けを施すだけなのだが、コレが思っている以上に手間が掛かっている。

遠隔操作を受け付けるプログラムを搭載されているOSに流し、起動を確認できた。しかし、どうしても操作している際には自分の機体が疎かになってしまうのだ。コレはどうしようもない。GNフィールドを展開していれば多少は耐えられる。

「オートプログラム自動機能でも組み込むか？」

いや、ダメだろう。

そこ等辺の一般衛士ならば撃破できるだろうが、Eス級の衛士ならば相手にすらならない。所詮は組み込まれたプログラム。プログラム通りに動く機体なんて、彼等の敵じゃない。

それを覆す為には機体の性能で圧倒するしか手は無い。だが、時間が足りない。機材も、設備も何もかもが。

だとするならば、やはり自分が操作するしかない。

コンソールを叩いてFCSを再設定しながらリヴェアは更に思考の海に沈んでいく。

一機に自動機能を組み込んでもう一機を遠隔操作する。コレがベ  
スト……なのかもしれない。

……まだ、計画の最終段階には入っていない。自動機能の精  
密さを高める事は可能だ。

機体のマニピレーターが地面に置いてあつた弾倉が抜かれてい  
る突撃砲を拾い、トリガーを引く。問題なく発射される空砲にリヴ  
エアは息を吐いた。

疑似太陽炉は有限だ。空を飛ばせば少量だが消費するし、戦闘をす  
れば使用武器によつて消費量は増える。ならば、既にこの世界で使  
われている武器を使うしかない。BETAは殆ど駆逐したし、スイ  
ッチ一つでハイヴも消滅する。

まず武力介入するのは、日本国内で起きる沙霧尚哉主犯のクーデ  
ター。出来れば詳細な情報が欲しいが、クーデターが起きたとなれ  
ば、必ずどこかが”動く”ソレさえ見ていれば何処で、どれだけの  
規模で起こつたのかは簡単に把握できる。

クーデターを潰したら、次は 米国だ。

戦略兵器G弾。アレを使用した事がある米国は武力介入し、徹底  
的に戦力を奪う。

「……何を迷つてるんだ、俺は」

奪う、しかない。戦争を、紛争を起させない為には戦力を奪うし  
かない。

だが 本当に、それで良いのか？

BETAはもうやってこないのか？そもそも、BETAは何処から来たんだ？

「保険を、残しておくしかないな」

・・・奪うのは、G弾だけ。戦略兵器を奪うだけだ。BETAに対抗するだけの力は残しておく。この世界について自分は知らない事ばかりだ。だというのに、押付けで計画を発動、戦力を根こそぎ奪ってしまつては不慮の事態に対処できない。

適度に戦力を奪い、G弾を奪つて破棄。または誰も手が届かない場所、宇宙に廃棄する。

クソツとコックピットから出たリヴェアは舌打ちをする。白い花は澄華の。向日葵の花は、カスミの。

分からない、自分の真意が。自分はこの世界を平和にしたいと願つた筈だ。だからこそ、BETAを駆逐したし一時的にだが香月博士にも協力した。

「クソ、クソ、クソツ！！！」

記憶によつて揺れる覚悟。理不尽なモノは世界共通で憎むべき物だ、ソレさえなければ世界は平和になるだろう。しかし、自分が平和の為に計画を遂行すれば自分自身が”理不尽な存在”になつてしまふ。

苛立ちは増す。ソレは、何時まで経つても覚悟が出来ない自分に

対してなのか、それとも。

「麻衣、この世界はどうなの？」

「ん、もうダメだと思うよ。エヴァンがトリースタと別れてるもの……多分、後は全部”同じ”じゃないかな」

「そう……やれやれね。あいつは一体いつになったら変わってくれるのかしら」

「仕方ないよ……エヴァンは過去に囚われてるもの」

「……世界を変えて、ってやつ？」

「うん」

真ん中に小さなテーブルが置かれているだけの空間。木製の椅子に座っていた髪を下ろしている麻衣は嬉しそうに、そして悲しそうに小さく頷いた。

対面に座っている夕呼はもう慣れた、とばかりにカップを口に運ぶ。

「一番良いのはわたしが傍にいてあげる事なんだけどね……そ



「うもいかないし」

「エヴァン・サーシットの強い思いで引き寄せられた魂、だしね。それに、あいつには”進化”してもらわなきゃ」

「ん。だから、トリースタに一生懸命話し掛けてたのにね」

「あいつには勇気が足りず、トリースタには時間が足りなかった。ねえ、トリースタも記憶を引き継げないの？」

「うん・・・遙や夕呼びみたいにエヴァンと強い関わりがあった人しか記憶が引き継げないみたい」

「あ~~~~っ！！まどろっこしいわあ・・・」

「遙の泣き落としもダメだったし。ホントに”次”だね」

「はあ・・・しょうがないわねえ・・・それじゃ、”次”もよろしく。カスミ」

「うん、任せて」

ウィンドウを操作していたリヴェアは座席の後ろからキーボードタイプの入力機を引っ張り出す。カタカタ・・・と途切れる事無

く打ち込み始めた。文字を打ち込み、チェックしているのは以前横浜にいた時に作成していたプログラム。

ミスをしているとは考えられないが、念には念を。

「ふう……」

一通りの指示文字列を入力したリヴェアは溜息を吐くとコックピットから出、膝を付いている機体を伝って洞窟の地面へと降り立った。明日からは十二月。クーデターが起きる月に入る。そこで全てに蹴りを付けるしかない。十二月。それが。

「俺の、最後の月だ」

薄暗い部屋。コードが無数と伸びている部屋の中心のシリンダーには”脳髄”があった。世界と、世界を結ぶ鑑純夏の、脳髄が。

（廻る……）

コポコポ……

（世界は……廻る）

コポ……

(そして)

...

(始めるの)

『H Q! ダメだッ!! 奴の侵攻を抑え切れないッ!!』

入ってくる無線を聞きながらリヴェアは金色の瞳で目の先に展開している戦術機数機を見据える。戦術機を認識しているモニターが赤に染まった瞬間、リヴェアはトリガーを引いた。

銃身から吐き出した銃弾は寸分狂わず戦術機の胸部に直撃、やがて沈黙する。

トリガーを引いても反応しなくなった突撃砲を地面に捨てたりヴェアは左のマニピレーターが握っているもう一丁の突撃砲のトリガーを引いた。

『クソッ! なんで攻撃が効かないんだよオッ!!』

「.....」

確かに弾幕は濃い。これがBETA相手ならば有効な攻撃だ。しかし、機体のガンダムの装甲はGN粒子でコーティングされ、圧倒的な防弾性能を誇っている。

ゆつくりと地面を歩行しながら的確に、確実に戦術機のコックピットを狙う攻撃。倒れ、爆散していく戦術機。

(これでいい……これで、人類は)

『このヤロオオオッ!!!』

一機の戦術機が腰のユニットを噴かして拳を振るう。モニター杯に映る戦術機のヘッドと拳。その戦術機のヘッドを右のマニキュペレーターが握り、潰す。

瞬間、拳を振るっていた戦術機がボコボコと沸騰した水のように膨れ上がる。

「弾ける」

無情な言葉と共に膨れ上がった戦術機は爆散した。

(俺は……ソレスタルビーイング)

故に

「目標を破壊するッ！」

A man who deserted himself (後書き)

サブタイトル『自分を捨てた男』

第二十四話でした。

ここで皆さんに報告があります。

リヴェア・ヴェネツチアことエヴァン・サーシットの決定版ができました。

相変わらず超アナログですが、ご了承ください。ちなみにヤシロカスミも書きました。

後オマケみたいなもの書いてみたので、お楽しみに。

近い内にタイトル『エヴァン・サーシット』として投稿するので、よろしくお願ひします。予定としては明日を予定します。

では、これで。

## Each reason Part 1

「行けるな、ガンダム……」

三面あるディスプレイ・ボードに灯りが灯り、システム・チェックのバイナリファイルをスクロールさせ始めた。GNドライヴの起動ボタンがまるで押せとばかりに点灯する中、左のサブディスプレイに出力系の計器が映し出され、速度計、距離計が続いて表示される。いつも見てきた愛機の状態に思わずリヴェアは口を綻ばせた。

徐々に覚醒していく巨人の息吹が背面のサブ・ブラスターの起動音と共に伝わってくる。固いシートに収まる体を解す様に腕を軽く回し、右のサブディスプレイに現れた通信モニターにタッチして『Sound only』と書かれた画面を操る。次々に入ってくる激烈な声に遅かったか。と顔を顰めると、直ぐにディスプレイ・ボードのキーを操作してパイロットスーツを半分脱ぎ、自分の右手の掌をそこに押し付けた。

掌紋識別の光りが灯り、アクセス許可の表示がディスプレイに浮かび上がる。コックピットハッチが閉まってから全天モニター

オールビューモニターを構成するパネルが順々に作動し、継ぎ目の無い三百六十度映像が周囲を包み込む。各種制御システムのチェック・ウィンドウが現れては閉じ、その間にリヴェアはGNドライヴの起動ボタンに手を伸ばした。

『これを聞いているのであれば、エヴァン、君は新しい世界に無事目覚めたということだろう』

ああ、そうだよオリア。リヴェアは小さく洩らし、操縦桿をギュツと握った。何度も聞いた老人の声に透き通る青い瞳が虹色に変

わる。同時にゆっくりと乾いた声が耳に入る。『行け、エヴァン』と。

『自分の可能性を信じろ、そして、変わってくれ。過去ではなく、未来の為に。為すべき事を為すのだ。誰でもない、自らの意思で』

「変われなかった、俺は、変われなかったんだ……」

だけど。左に握っていたスイッチを押す。瞬間、とにかく使える事だけを求めた臨時の地下格納庫が設置された爆薬によって破壊されていく。彼方此方から湧き上がる火の手。それは正しく火炎地獄と言うに相応しかった。モニター越しで火に飲まれていく奪取した機材を確認したりヴェアはディスプレイ・ボードを見、GNドライヴが正常に起動したことを確認した。

紅い粒子が巨人の装甲を染め上げていく。汚れてしまい、白と言うよりは灰色、と言った方がしっくり来る装甲はまるで侵食していく如く赤黒く染められていく。白く発光している装甲の継ぎ目は胎動する様に光っては消え光っては消えを繰り返す。赤の侵食が頭部まで達したとき、額から二つに別れ、伸びていた角がその存在感を主張した。

人の目をした二つのツイン・アイが翡翠に染まり、キャットウォークの拘束を力任せに引き千切った。

## 第二十五話

アラート。

ロックオンされているとアラートが鳴っても、どの機体から狙われているのかは今は関係なかった。レーダーには無数の光点が存在し、それら全てが自分を狙っていると分かっていたからだ。地面を滑空するオレンジ色の弾丸、途切れる事無く撃たれているそれを避わず事だけで精一杯だったリヴェアは思わず舌打ちをした。

狙おうにも扱ったことの無いアサルトライフルだ。幾らFCSが敵機捉えていようと、トリガーを引けば弾が敵に当たる訳じゃない。しかも今は襲い来る敵弾を回避する為に地面スレスレを滑空している。移動しながらの射撃はそれこそ簡単ではない。止まって撃つよりも難易度が高いだろう。かと言って止まればGNフィールドによるガードを強いられてしまい、攻撃に回れない。物量の差、とはこ



の事か。リヴェアは手足の様に動いてくれる機体を操りながら地面を走る様に飛ぶ。

すれ違いざまに戦術機に蹴り付け、それを踏み台にして空中で一回転。バランスを崩し今にも倒れようとしている戦術機を追っていた白い輪が『Lock-on』の表示と共に紅い輪に変化したのを見、リヴェアはトリガーを引いた。弾を吐き出しながら着地した機体を小刻みな加速で回転させ、辺りに展開していた戦術機に向けてトリガーを引き続ける。

スライド。

緩やかに回転しながら地面を削り、オールビューモニターが捉える敵機にトリガーを引く。展開していた部隊の大半を撃破した頃だ、不意に耳に弾切れを告げるアラームが入ってきた。同時に武装を捨てた（パージ）したとディスプレイ・ボードに表示されたのを確認したリヴェアは操縦桿の前に設置してあるコンソールに手を伸ばし、システムを戦闘から索敵に切り替える。

幸い残存戦力は大した事は無かった。仕留め損ない、行動不能になった戦術機が数機、増援なのか高速で飛行している四機の熱源。まだ戦力差が分からないのか　　！。リヴェアは　リボーンズガンダム　を四つの熱源へ疾<sup>は</sup>らせ、両肩を飾るように屹立していたビームサーベルのグリップを右のマニピレーターが掴み、先頭を飛んでいた戦術機に向けてサーベルを引き抜き、振った。すれ違いざまの斬撃がアサルトライフルを構えていた右腕の装甲を抉り取り、装甲の下に隠されていた配線を晒し、無様に回転する。後続の三機も足を斬り、頭部を斬り、胴体と下半身を分断し戦闘不能に陥らせたりヴェアはオープンチャンネルを開いた。

「それで言い訳ができただろう！帰れ！」

クソ、なんだコイツ等は！

受信している通信から爆発音と共に男の悲鳴が聞こえてくる。どこから発信されたのかをディスプレイ・ボードで確認したリヴェアは、リボーンズガンダムをそこへ向わせようとするが機体を襲った微かな衝撃に顔を顰めた。攻撃だ、だが、ダメージは殆ど無い。GN粒子を介して伝わってくる強張った意識を引き受け、地面に倒れ黒煙を噴出している右腕を失った戦術機が立ち上がり、アサルトライフルの銃口を、リボーンズガンダムに向けていた。何で分からないんだ、とリヴェアは頭の片隅で反駁はんぱくした。

「負けられんだ、我々は……！」

「機体の性能差は目に見えてる。撤退してくれ」

「……若いな、若すぎる」

右のサブ・ディスプレイに砂嵐とノイズが現れ、年老いた男性の声がコックピット内に響いた。呼吸は早く、体のどこかをぶつけたのか時々うめき声が聞こえた。

「少年、私は”明日”が欲しいのだよ。輝かしい、明日が。その為には殿下を隠れ蓑にしている逆賊共を根絶やしにしなければならぬ。そうしなければ日本に”明日”は、来ないだろう」

「……その為に、俺と戦うと？」

「いや、少年。これは願いだ。私個人ではこの戦況を変える事など、出来ない。だがしかし、君ならば」

「無理だ。俺はどの組織にも属さない完全なる第三戦力。この紛争に介入し武力を以ってこの紛争を終結させる。戦争を生み出すモノ

を、駆逐する存在だ」

「ならば、討ってくれ、米国を。この戦いを生み出したのは奴等だ。敵である君に頼むのは御門違いなのかもしれない、だが、頼む。日本の、未来の為に……！」

「  
」

操縦桿を握る手が汗ばむ。頭の中で反発し合うソレスタル・ビーイングの考えと自分の中で生まれた確証も無く米国を討つという考え。本来ならば迷う事無く目の前の戦術機四機のとどめをさし、別の場所で展開している部隊を撃破しなければならぬ。だが、この衛士が言っている事が本当ならば、戦争を生むものとして米国を討たなければならぬ。

「  
分かった」

「  
……」

「アンタの言っている事を信じる。だが、同時にクーデターを起している連中も叩く事になるが、それでいいな」

「構わない。元よりそのつもりだ。」

感謝

する、少年」

瞬間、オールビューモニターが一面炎の色に染まった。地面が次々に揺れ、炎の柱が鉄屑と共に舞い上がる。爆風を感知し、防御システムが働いたのか左腕のシールド、GNフィールドが自動展開さ

れ、オールビュローモニターには大きな盾とそれを握るマニユピレーターが一面に映った。リーダーに映っていた四つの光点は震動と共に消え、遂には炎が燃え盛る音と爆発で空へと上がった鉄が落ちてくる音だけが残る。

ギユツと操縦桿を握る力が強くなった。これも、戦争が生み出した悲劇の一つだ。戦いが無ければあの年老いた男性も”明日”があったのだらう。もしかしたら、素晴らしい明日になっていたかもしれない。人生に一度か二度しかない幸運が訪れたのかもしれない。それがどうしようもなく悔しかった。武力による紛争への介入。それが戦う理由を見つけられなかった自分が、どうしようもなく惨めだった。

彼等の様に、次の機会を一方的に、唐突に戦争によって奪われた人たちが沢山いるのだらう。それを奪った当事者は自分だ、だけど。リヴェアは顔を上げて正面を見据えた。先ほどの悲鳴が混じった通信の発信源は直ぐそこだ。

「死を背負う覚悟くらい、とっくの昔にできてるさ……！」

『もう一度、警告する』

聞き覚えのある声に水月は操縦桿を握る手の力を強めた。どこか冷めていて、どこか挑発的で、どこか儂げな男。皮肉交じりの会話を繰り返した仲の人物が今、見たことも無い機体に乗って此方を警告していた。スラリとしたフォルムに背中から溢れ出ている紅い細かな光。巨大な剣を左腕に握っているその戦術機は今までに類を見ないほどの存在感があった。

赤黒く塗装された機体がゆっくりと上空から地上へと降り立つ。

『これ以上戦闘行為を続けた場合、紛争幫助対象と断定し、お前たちを破壊する。以前の戦闘が正当防衛であると主張するならば』

『

「くだいな。我々は人類を守る剣。それを邪魔するのであれば、人であれBETAであれ排除する。そう言った筈だが」

『・・・どうやら、戦力差も分からない人間らしいな。なら、殉ずるがいいさ、己の正義に酔ってな』

「あんだ、リヴェアなんでしょ？ だったらなんでこんな所に・・・それに武力介入って」

『リヴェア・ヴェネツチア大尉はとっくの昔に死んでいる。ここにいるのはただ一人のソレスタル・ビーイングだ』

「はあ！？ あんた何言ってる」

『そこまでよ、水月。アイツは敵。今はそれだけで十分でしょ？』

「司令！！でも　！」

『黙りなさい。集中しなきゃ、殺されるだけよ』

瞬間、モニターから悠然と佇んでいた赤黒い機体が文字通り、消えた。後に残っているのは紅い光りと翡翠のライン。それがあの機体が残した残像だと理解した頃には既に戦闘は始まっていた。推進剤も使わないでこの加速　　！。水月は操縦桿を握り直し機体

不知火を反転させる。

『遅いな』

「このオツ！！」

モニター一杯に映ったのは翡翠の輝きを一層強くした人間のそれと似ている二つの目だった。狙いも何も無い、トリガーを引こうとするが機体を襲った衝撃でそれは叶わなかった。体を襲う激しいGに耐え切れなかったからだ。震動するシートにしがみつきながら水月はうめき声を上げる。

『撤退しろ、機体の性能差が分からない訳じゃないだろう』

巨大な剣の切っ先がコックピット内に不穏な空気を漂わせる。『早くしろ今ならまだ　』と続いた声を遮り、「あたし達は！！」と水月は押しかぶせた。

「あたし達は人類を守らなきゃいけないのよ。BETAから、ね。リヴェア、あんたが何でそんな物に乗っているのかは知らない、で

も、任務の遂行を邪魔するならあたしはあんたを討つ。それだけよ」

『この……大馬鹿野郎が!!』

「させないッ!!」

大きく振り上げられた大剣が爆発と共に跳ね上げられる。横から跳躍ユニットを噴かして飛び出してきた不知火はリヴェアに取っ付き、そのまま空へと押し出す。

「高原!？」

「中尉は早く離脱を!ここは私が!」

『拘束されている味方を助ける為に単機突撃。ヒーローにでもなつたつもりなのか、お前は』

放出されている紅い光りが一層強くなり不知火の押し上げる速度が緩やかに遅くなつていく。誰が見ても分かるパワーバランスの逆転、そしてリヴェアの機体がゆっくりと左腕を動かしかつさり、まるで赤ん坊の手を解く様に不知火の拘束を解く。右手と右手、左手と左手を組み合わせ取っ組み合う形になつた二機。

「ツク、なんで……なんでそんな力があつて……」

『殺してるんだらう?』

「え?」

『なら、殺される覚悟もあると見た』





## Each reason Part 1 (後書き)

『それぞれの理由 Part 1』でした。

さて、今回はこんな感じで行きましたが「これでおk」ならこれからはこんな感じでいきたいと思っています。

では、また次回。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6079s/>

---

Muv-Luv Alternative +

2011年11月15日21時50分発行